
ヘタレで少女な勇者様

椎名 瑞夏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヘタレで少女な勇者様

【Nコード】

N9467I

【作者名】

椎名 瑞夏

【あらすじ】

何の特技もない平凡少女が世界を救う勇者になる！

最近世界で魔物が頻繁に出没しました。

各国の王たちは悩みに悩んだ末、ある対策を考えた。

そっだ、勇者を作ろうと。

それぞれの国では勇者オーディションが行われる。

何の特技もないのに、そのオーディションに合格してしまった少女ナナギ。

他の国から選ばれた勇者達と一緒に魔物退治の旅に出ることになる。口の悪いチサヤ、苦勞体質のクシナ、何かとミステリアスなレイ。そして、ひよんなことから仲間になってしまった心強い(?)魔物、妖艶な美女リイーリアと部下の毒舌少年シャオロン。

プラス扇の精霊で、見かけはゴスロリの超美少女、中見は酒好き男なクリス。

個性豊かすぎる仲間と平凡でちよっぴりヘタレな少女の旅は、どうやら平凡では済まないようで・・・!?

シリアス少なめ、コメディ要素多めな勇者ナナギの、恋あり戦闘ありな珍道中ストーリー。

では、勇者を募りましょうか

『厳正なる審査の結果。アヴェロン国主催勇者選抜による我が国の勇者は……… ナナギ・グローラ様です！』
わあっ。

この日一番の歓声が、広い会場を包み込んだ。

そもそも。

事の発端は、あの主要国首脳会談だったのだ。

「最近、国と国を繋ぐ道に、魔物が出るそうです」

静まり返った会議堂に、その若き国王の声はよく響いた。

「それは、うちでも問題になっていきますな」

最年長の国王が、低いバリトンの声で続ける。

白髪混じりというよりも、黒髪混じりといった方が正しいような頭をしている。

しかし、その顔と立ち振る舞いには、古株らしい威厳と慈愛に満たされ、見るものに敬愛の意を示させるほどだった。

「ほう。確かにそれは由々しき事態でありますの。では、解決案を話し合うとしましょうか」

小太りの、人のよさそうな国王も言う。

ちなみに、虫も殺せないような顔つきをしているくせに、趣味は戦争だったりする。

そんな国王の言葉に、会議堂が静まり返った。
るくでもないこと言い出すに違いない。

混沌とした思いが伝わったのだろうか、小太り国王は苦笑いすると、
禿げあがった頭を掻いた。

「いやはや、何とも……」

「私は、やはり大本を倒してしまうのが良策だと思いますよ。無駄な殺生は、後味も悪いですし」

八ナからそう話を持っていくつもりだったのか、若王は淀むことなく言っただけだ。

それと同時に、ざわめきが広がる。

数秒の後、控えめに細い手が拳がった。

「しかし、誰を向かわせるのです？ 兵士達で、魔物の親玉があっさり倒されてくれるとは、にわかには信じがたいのですが…」

この場にはいささか不釣り合いな、若い女声だった。マルク国は先代の王の跡を継ぐものがおらず、未亡人となった女王が引き継いだのだ。

ちなみに、彼女の名はエリザベータ。

豪奢な名前に、劣ることなく女性的に美しい人だ。

谷間の深い胸を張りながら、エリザベータは宣言してみせる。

「残念ながら、わたくしの国には、魔物の親玉を倒せるような屈強な兵士はいません！」

…少し天然のようだ。

またもざわめきが広がり、その後にもまた手が拳がった。

「では、勇者を募りましょうか」

老若男女、職業、生い立ち、性格、外見一切問わず。やる気と勇気さえあれば大歓迎。

それは、全世界の人間という人間に配られたものだった。

各国ごとに一名。

勇者を選び、全世界の魔物を退治させるという計画らしい。

ちなみに、出場しただけで参加賞として、賞金が渡される。

ということだ、かなりの参加者が集まっていた。

ナナギ・グローラ。

小柄で華奢な身体に、沈みゆく夕陽を切り取ったような深い茜の薄くウェーブのかかった髪をツインテールに縛っている。

お世辞にも、屈強な肉体も鋼の精神も備えているとは思えない。

ちまたで流行している、生花の花びらを縫い付けたレースを、裾にあしらったふわりとしたシフォンのワンピースを身に纏い、周りの熱気に怯えたように、小さな身体を殊更縮こまらせている。

「なんであたしが書類審査に受かったのか、ナゾだよな…ナゾ…
…っ!？」

独り言を言っている最中に、誰かの野性的な咆哮が轟いた事に驚き、ナナギは顔を青白くした。

二次選考は、知能テストだった。

八割方勘で書いたと言うのに、何故か通ってしまった。

三次選考は体力テスト。

どこから飛んでくる槍やら何やらの、危険物から身を守るという内容だったのだが、持ち前のヘタレ精神が功を制したのか、合格してしまった。

そして、今に至る。

これが最終選考。

アピールテストというもので、つい先刻前に全員の選考が終わったという。

「ま。選ばれるわけではないしな。あの受け答えじゃ、耳の端にも引っ掛かるわけもないし…」

何を聞かれても、頭に入らず何を答えたかも覚えていない。

まさしく、どうにもならない。

遠くから、アナウンスの声が聞こえてくる。

ナナギはぼんやりとその響きを聞きながら、腕に掛けた金の細いブレスレットをいじりながら、ため息をついた。

「大体姉ちゃんがいけないんだよ。お小遣いピンチだからって、あたしを参加賞金目当てで、選考に応募するなんて」

そう、ぶつぶつと愚痴を溢すナナギの耳にねじり込まれた内容は
『厳正なる審査の結果。アヴェロン国主催勇者選抜による我が国の
勇者は………ナナギ・グローラ様です!』

では、勇者を募りましょうか（後書き）

お久しぶりです。

椎名です。

今回はファンタジーに挑戦です！

とりあえず、十話ほど書き溜めているので、それが無くなるまでは二日に一話位のペースで更新します。

無くなったら、またいつものごとくのんびりペースで更新します！

勇者もの！

一回書いてみたかったんです！

戦闘シーンを書くのは苦手なんですけど、どうにか頑張りますんで、応援よろしくお願いします！

それでは！

瑞夏

全世界の勇者様方

ナナギ・グローラ様

この度はおめでとございます。

貴方様のことを、国をあげてバックアップさせて頂きます。

さて、今回は各国で選抜されました勇者の皆様との顔合わせが行われます故、参加をお願いしたく願います。

それでは貴殿のますますのご発展をお祈りします。

アヴェロン国勇者委員会

筋肉だるま。

よぼよぼ熟年魔法使い。

グラマラスな妖艶美女。

まさに、十人十色を実感する場だ。

友好共和を結んだ、全36ヶ国から一名ずつ選ばれた勇者の面々は、超個性的な面々だった。

偶然、ナナギの瞳に映ったのは透き通った海の色の目を持った細身の少年だった。

目が合うと、彼は優しげに笑い、丁寧に礼をしてきた。

慌ててナナギもお辞儀を返し、苦笑いでその場を去る。

知らない人は、どうも苦手なのだ。

「うう。…誰も知らない」

当たり前のことを恨めしげに、呟きながらアヴェロン国勇者こと、ナナギは硝子のテーブルに並べられた、アンティークなグラスを手にとった。

薄い赤紫の液体は、ぷつぷつと発泡していて、甘い香りを放っている。

ラズベリーソーダ。

「美味しそ」

薔薇色の透き通ったそのグラスは、ナナギの着ている白いカジユアルドレスによく映えていた。

このドレスは、ナナギが気に入っているもので、フリルと小さな花模様がふんだんにあしらわれた、可愛らしいデザインだ。こくり、とグラスを傾け、ナナギは細い喉を上下させる。

刺激のある飲み心地に、胸がすかっとした。

その瞬間、ナナギは背中に衝撃を感じた。

「……ぶふっ」

バシヤリ。

グラスが揺れて、ラズベリーソーダが波打ち、零れる。

その雫は純白のドレスに、染みを付けた。

「ぎゃっ…あああ!？」

「あ。ヤベ」

悲痛な叫びに被って、小さく焦ったような声が出た。

「あ、あっ、あなた!」

どもりながら勢い良く振り向いたナナギの目に入ったのは、二人の少年だった。

一人は背の低い、金髪。

もう一人は長身で焦げ茶色の髪をしている。

どちらも、道を歩けば幾人もの女性達を引き付けるような顔立ちをしていた。

「悪い、ちよつとぶつかつた」

「チサヤ。誠意が感じられないぞ」

確かに。

へらへらしながら頭を下げられても、全く真実味が感じられない。

ナナギは眉をひそめた。

「あなた、謝り方も知らないの？」

「は？ なんだこの女…」

チサヤと呼ばれた少年が、顔をしかめる。

どうやら、こちらも負けず嫌いらしい。

「見なさい、この染み。これ、洗っても落ちないんだから！」

「あー、そうかよ。どうもすみませんでしたねえ」

「だからねー！！！」

「チサヤ……」

憤慨するナナギを見て、隣にいた少年が、チサヤを嗜める。

「ちょっとクシナは黙ってる！」

「てゆうか、クリーニング代出しなさいよーっ！」

「はっ。給仕係が出しゃばってんじゃねえよ」

「給仕係い！？ 誰のことよ、それ！」

「おまえ以外に、誰がいるかよ」

「失礼ね！ あたしは、アヴェロン国の勇者よ！」

「「勇者！？」」

二人の声が、重なった。

礼儀の正しい少年の方も、さすがにナナギが勇者だとは思っていなかったようだ。

その反応に、少なからずいらっとしたのか、ナナギは白い額に青筋を浮かべた。

「なーによお」

「勇者……しかもアヴェロン国の……」

呆然とする、クシナ。

それもそうだろう。

アヴェロン国は、友好共和を結んだ国の中でも、一二を争う大国なのだ。

「そんな大国の勇者が、よりもよってこんな小娘なのか、って？」
ぷくっ、と小さな頬を膨らませナナギはそっぽを向いた。

そんなこと、人に言われなくたって分かってる。

一番訳が分からないのは、あたしなのに……。

「ふうん。おまえ、何か特技とかあんのかよ？」

「特技？」

「そ。例えばこいつ…クシナは剣を持たせたら、右に出る者なんていないし」

「オレよりすごい奴は、いっぱいいるよ」

「謙遜は、今はいらなかつたの。…で、俺は自分で言うのもなんだけど、銃なら百発百中だな」

そう言つて、チサヤはズボンに掛かつたホルスターから、短銃を抜くと、くるくる指で回してみせた。

ナナギは、少し俯く。

「おまえの体じゃ、力は無さそうだな。んじゃ、魔法か？ もし

くは…んー、妖精使いとか」

「…魔法なんか使えない。…妖精なんか見えたことないよ」

「は？ じゃあ何が出来るん…」

「チサヤ。アナウンスが始まつた」

ナナギの様子を察したのだろうか。

クシナがチサヤの声を遮つた。

チサヤも、今度は反発することなく素直に従う。

『全世界の勇者様方。これから、皆様には魔物を倒す旅に出てもらうわけですが、一人では厳しいとのことと、四人一組のパーティを組みさせていただくことになりました。しいては、ご入場の際に配られました、パンフレットの一番最後のページに、パーティの名前が書かれていますので、その四人でお集まり下さい』

有無を言わせる間もなく、アナウンスは早口で告げた。

しばし静まつた会場だったが、はつとしたように、各々パンフレットを確認しだした。

惚けたように口を開けていたナナギも、置いてかれまいと、慌ててパンフレットを捲る。

「お！ ナーイスっ！ クシナ一緒だな」

一足早くそのページを見つけたチサヤが、嬉々とした声をあげた。

「えー、あとは…レイズン・シャーロン。もう一人は女かな…ナナギ・グローラ…」

びくん、とナナギの耳が動いた。

そんな様子は気にも止めず、チサヤはナナギのパンフレットを覗き込んで言った。

「よお。おまえに迷惑掛けられる不幸な奴は、誰だった？」

にやにやするチサヤを、ナナギは睨み付けながら、震える指で指した。

「あんたよ……」

「はっ？」

「ナナギ・グローラは、このあたしよ！」

全世界の勇者様方（後書き）

どうも、こんばんわ。

椎名です。

ヘタレシリーズ第二話です。

明日は、ちよつと場面が変わって魔物世界のお話を書きます。

別に暗い話ではないです！

女王様な魔物と、その部下（？）の人間と魔物のハーフの男の子のお話です。

次話も、読んでいただければ、幸いです。

瑞夏

主と下僕

「シャオロン！ どこにいるの！？」

薄暗い室内に、甲高い声が響き渡る。

声から察するに、まだ若い女なのだろう。

彼女はきよろきよろと辺りを見回し、目当ての人物を探した。

「ちよつと、シャオロン！？」

「そんなに叫ばなくても、十分に聞こえますから。無駄に体力使うのは止めた方がいいですよ」

更に声を張り上げた女の背後で、アルトの返事が返ってきた。

「しかし、困りましたね。まさか魔界が地上を乗っ取るうとしているなんて」

大して困った素振りも見せずに、シャオロンと呼ばれた少年は淡々と言う。

薄暗闇でも分かるほどに、彼の黒髪は艶を持っている。

少々童顔な事を除けば、実に整った顔立ちをしていた。

「全くだわ。わたくしは魔城でのんびり暮らせるのなら、地上なんて要らなくてよ」

「魔界人が皆あんたみたいに平和ボケしてたら何の問題も無かったんですけどね」

「シャオロン、貴方今わたくしをあんた、とか呼んだわよね？」

ぴくりとこめかみを引きつらせて、女は扇を広げた。

そんな彼女に、シャオロンは面倒くさそうな顔をする。

「確かに言いましたけど、何か問題でも？」

全く悪びれる気配ゼロだ。

しかも無表情。

「問題ありまくりよ！ あるいは何か主をあんた呼ばわりなど言語・

・

「尊敬に値しない人物であれば、多少の暴言は許されると思います

が？」

女の声を遮ってひょうひょうと言い放つシャオロン。
いい度胸してますね。

「何、さらりと言ってるの!？」

「真実を述べたまでです。そんなことよりも、リーリア様。どうするんですか？」

主の怒りをそんなこと、の一言で片付けたシャオロンはまたも無表情で言った。

「うっ……。わたくしは無駄な争いは好まないのよ」

「んなこと知ってます」

「あ、そう……」

半泣きなリーリア。

シャオロンはとにかく辛口だ。

「で、魔物側につくのですか、人間側につくのですか？」

「人間側では、勇者をたてるというのだけど、それは本当かしら？」

「らしいですね。実力のほどは分かりかねますが」

リーリアの質問に、彼はポケットのメモ帳を取り出し確認する。

「なら、わたくしは人間側につこうかしら。まあ、勇者とやらがそれなりの力を持っているのなら」

くつりと、リーリアは薔薇色の唇を三日月型に曲げた。

丁度差し込んだ月明かりに、リーリアの姿が照らし出される。

ウェーブのかかった長い闇色の髪。

怖いくらい美しく整った顔立ち。

出るところは出て、引つ込む所は引つ込んでいる、完璧なスタイル。

それはまさしく、妖艶な美女だった。

そう、背中に生えた黒く大きな翼以外は。

「シャオロン、試す方法はあるかしら？」

「……いくらでもあります」

「そう。じゃあ試してみましようか」

「はい。かしこまりました」

こうべを垂れて、シャオロンは深く敬礼をしてみせる。

そこに、先ほどの毒舌な少年の姿は無い。

「なら……」

「どうしました？」

「えーと、その……」

言いにくそうに、リーリアはきよるきよると辺りを見回した。

「シャオロンは、それで平気かしら？ その、わたくしについて、

魔物側を裏切ってしまったら、余計に……」

「構いませんよ、そんなこと」

リーリアの言葉を遮り、シャオロンはあっけらかんと言いつつ

彼女が驚くくらいに、あっけらかんと。

まだ何か言いたげなリーリアの瞳から目を逸らして、ふっと笑う。

「私は、リーリア様のことをお守りするために存在するんです。

リーリア様がいいと言うならば、他人なんかの目など気になりま

せんよ」

別に、その声色には恋愛感情が混じっているとは思えなかった。

だが、二人の関係の強さを思わせる言葉だった。

主と、下僕。

それは、ある意味恋人なんかよりもずっと強い絆を持っているのか

もしれない。

双方心から信頼し合っているのなら。

「シャオロン……」

「貴方の脳みそは只でさえ容量が少ないんですから、余計なことは

考えずに、大事なことだけ考えていてください」

ちよっと感動してしまったリーリアに、シャオロンはおまけとば

かりに、毒舌を放った。

勿論、威力は絶大だ。

「シャオロンッ！！！」

さっきまでの、少しいい雰囲気はどこへやら。

「全く、半魔なんかに負けては示しがつきませんよ？ 力でも、頭

でも」

「だまらっしゃい！ もう、さっさと試してきなさい！」

癩癩を起こしながら叫んだリイリアにもう一度笑みを向けて、シヤオロンは窓から翼をはためかせ飛び立った。

そう、灰色の翼をはためかせ。

主と下僕（後書き）

こんにちは。

椎名です。

今回は、予告したとおり、場面変わって魔界でのお話です。
はい、予測がつくとおり、この二人はこれからもけっこうよくよく登場します。

もしかすると仲間になるかもしれないし。
敵対するかもしれません。

次話は、場面戻って、パーティの続きです。
メンバーはどんな人たちなのかを、書きたいと思います！

もし感想いただけたら、嬉しいです。
では。

瑞夏

旅の手引き

「銃者ガンマンのチサヤ・マリア」

「特に役職なしのナナギ・グローラ」

ぶつすー、つとした表情のままナナギは金髪の少年を睨み付ける。同じように、チサヤも目の前の茜色の髪の少女を眉根を寄せて見ていた。

二人の間に漂う剣呑な雰囲気打ち払うように、クシナは手を打った。

「ほら！ 四人目の奴が来るぞ。な？」

何が、な？

なのはイマイチ分からないが、四人目の勇者が来たのは本当のようだ。

足音よりかは、衣擦れの音を響かせる、優雅な歩みにナナギは振り返る。

そして、息を呑んだ。

「び、美少女…っ」

「あ。僕男ですから」

そんなナナギの言葉を全否定する声と共に、その勇者は現われた。海を思わせる深い碧の瞳に、ダイヤモンドの銀を映した艶めく髪。無駄な肉が一つもないならかな肢体は、一見すると少女のようにも思える。

ナナギ達とは種族が違うのだろうか。

銀髪の間から、僅かに覗く白い額には、翠の宝石が光っている。埋め込まれたというよりは、元からあったと言うほうが納得が行くほど、ごく自然に彼の額を彩っていた。

「レイズン・シャーロンです。性別は、男です」

念を押すように、柔らかな声でそう言うと美少女ことレイズンは微笑を浮かべた。

女神降臨…！

思わず手を合わせて拝みたくなる衝動を何とか押さえると、ナナギは気持ちを落ち着けようと深呼吸を繰り返した。

「何やってんだよ、役職なし女」

「…は！？」

ぼそりと言ったチサヤの声を見逃さず、ナナギは不満の音をあげた。

「別にー」

頭の後ろで手を組んですつとぼけるチサヤ。

ナナギは、まだ納得は行かないようだが、放っておこうとそっぽを向いた。

「えーっと、レイズンさんはどんな役職ですか？」

眉間に寄った皺を手で伸ばしながら、ナナギは愛想良く笑った。

事の次第は見ていたはずなのに、レイズンは戸惑うことなく笑みを返した。

「僕はそうだね、基本は僧侶クレリックだけど、少しなら攻撃魔法も使えるよ」
そう言って、レイズンは白い手のひらを前に出すと、その微か上空にルビーの色をした珠を浮かべてみせる。

ちよつとしたご挨拶のつもりなのだろうか。

その輝く珠を、レイズンはナナギに手渡した。

「うわー、綺麗」

感嘆の声を上げたナナギに、またも余計な一言を放つ。

「馬鹿は光るものが好き」

「ちよつと、チサヤっ！」

「まーまー、ナナギも押さえて。ほら、チサヤも謝れって」

またも言い争いが始まりそうな気配に、クシナが焦ったように仲立ちした。

まだ不満の残るナナギだったが、クシナがそう言うなら、と膨れっ面のまま小さく頷いた。

「まあいいや。でさ、レイはどこ出身なんだ？」

「レイ…？」

「あー、レイズンじゃ長いからな。別にいいだろ？」

「うん、構わないけど。えーっと、僕はシルバーナからの代表だね」「シルバーナ！」

レイズンもとい、レイの言葉に、ナナギが驚いたような声を上げた。

「あ、知ってる？」

「勿論、女の子なら常識だよお」

ぱちぱちと、小さな白い手を叩いてナナギは胸を張る。

シルバーナ。

宝石の産地としても有名な、ファッションの最先端に行く国だ。

ちなみに、女の子なら、一度は行ってみたい国ナンバーワンだったりする。

「この前レースだけで作ったスカートが出たよね！ あれ、可愛いよねえ」

「そうだね。あのふわふわした質感がいいね」

「そうなのー！ コーディネートも色々あるよね」

「ジーンズ生地の上着と合わせると、甘くなりすぎなくて可愛いと思うんだ」

「確かに！ あー早くアヴェロンにも入荷しないかなあ〜」

「買ってこようか？」

「本当っ？」

きゃっきゃっ、と華やかな空気の流れるナナギとレイの会話を聞きながら、チサヤは渋い顔をして、げんなりと呟いた。

「……なんで話が分かるんだ？」

「姉が、シヨップ店員をやってるから」

「聞こえたのかよ」

「レースカート、一番乗りだよー」

「話題が脱線しすぎだ…」

なんだか、まとまりのないメンバーだ。

必然的にリーダーになってしまいそうなクシナは、頭を抱える。

「…ほらほら！ もう交友を深めるのは後にするぞ。さっき貰った

紙に、概要が書いてるから」

「はぁーい」

「おー」

「了解」

三者三様の返事に、クシナはにこりと笑い、三人が盛り上がった時に渡された紙をひらりとテーブルに乗せた。

「概要つて何の？」

「んー、とりあえず旅の。かな」

「ふうん」

曖昧に返事を返しながら、ナナギは紙を覗き込む。

>旅の手引き<

なんかネーミングセンスないなー！。

遠足のしおりみたいだ、とナナギはぼんやりと思いつつ、何の気なしに紙の一番下を見た。

出発日 4月8日

……………ん？

「ねえ、今日つて何月何日だっけ？」

「あ？4月8日だろ」

チサヤからの答えに、ナナギは眉を寄せると、「ごしごしと目を擦ってからもう一度確認をした。

出発日 4月8日

「……………ん？」

今度は口に出た。

「どうした？ 何か心配事でもあったか？」

黙り込んでしまったナナギを心配そうに覗き見ながら、クシナが声を掛けた。

「あの子……………」

この一時間弱で、ナナギが分かったこと。

チサヤとは、どうもソリが合わないということ。

クシナは、世話焼きで優しいこと。

レイは、美少女な顔をした男だけど、服にも詳しいこと。
そして……。
「今から出発うっ!?!?」

旅の手引き（後書き）

こんにちは。

なんとなく気分が乗ってしまったので、本日二度目の更新です！

次は明日更新します！

次話は、ちよつぴり家族モノ。

・・・なのでしょうか？

ナナギのちよつと暗い過去が見えるような、見えないような・・・？
では、また。

瑞夏

貴女を憎んでなんていない

妹とは異なる、父譲りの淡い水色の髪を背中に流し、浅く椅子に腰掛ける女性。

その顔は、白いというよりも、青白いという方が正しく、顔立ちも整ってはいるのに、やつれた頬と目の下の隈のせいで、気難しい印象を持っていた。

腕も脚も胸も、女性らしい肉付きがなく、冬の枝木のような。

そんな女性は机を見つめたまま、虚ろな表情をしている。

「姉ちゃん？」

控えめな声と共に戸の軋む音がした。

女性の表情が、一瞬光を帯びる。

「ああ。もう帰ってきたの。で、どうだった？」

抑揚のない声に、戸の少女が躊躇いがちに眉を寄せた。

「ん。普通だよ。あの、それでさあだし、準備したら、もうすぐ出発するから」

「……………え？」

「今日出発なの。装備とかは、向こうでちょっとずつ買っから……」
少女は薄く笑うと、こう付け加えた。

お金も心配ないから。

「ナナ……………ギ」

名を呼んだときには、もう妹はそこにはいなかった。

そつと、女アオイは唇を噛む。

また、言えなかった。

違うの。

そうじゃない。

お金なんか、どうでもいいの。

じわりと、紺碧の瞳が揺れる。

なんで言えないのだろう。

伝えたいことは、たった一つ。

たった一言なのに……。

「もう、貴女を憎んでなんていないのよ。ナナギ……」
消え入りそうなその声が、妹に届くことは、なかった。

「うー。やっぱり姉ちゃんと話すのは緊張するなー」

言ってみてから、会話にもなっていないか。

と、服をたたむ手を止めて、苦笑する。

あれじゃ、挨拶程度だな。

「また、こつちを見てもくれなかったな……。ま、そりゃ当たり前だよね……。全部、あたしのせいなんだもん。あたしが、全てを壊したんだよね……」

わざと明るくナナギは、早口でまくし立てると、不意に俯いた。

「ごめん……」

ぼたりと、たたんだばかりの服に小さな染みが浮かんだ。

数秒おきにだが、雫は確実に服を濡らしていく。

ぼたぼたと零れる、その塩辛い液体に、ナナギは泣き笑ってみせた。

「えへへ。旅に出るんだから、姉ちゃんともお別れだね」

涙を拭いて、目を細めるナナギの笑みはどこか儂げだ。

涙に濡れた服を、くしゃりと握り締めるとナナギは立ち上がり、白い机に歩み寄った。

「これも、持って行かなきゃねー」

金の取っ手を引き、引き出しを開ける。

ごちゃごちゃと、要るもの要らないものが、ごちゃ混ぜ状態になった引き出しを覗き込み、ナナギは中を探る。

こつり、と手に当たった硬い感触に、安心したようにナナギは息をついた。

「あったあった」

そう言いながら、目当ての物を引っ張りだす。

それは、小さな色とりどりの宝石がちりばめられた、銀の華奢な髪飾りと、それに似合った銀のシンプルな、指輪と腕輪が鎖で繋がれたアクセサリーだった。
両親からの、最後のプレゼントだった。

「じゃ、行ってきまーす」

結局、出発のその瞬間もアオイは現われず、ナナギの声は寂しく玄関に響き渡った。

さよなら。

また会う日まで。

貴女を憎んでなんていない（後書き）

こんにちは。

椎名です。

予告どおり・・・？

ちよっぴりナナギの過去話です。

姉ちゃんのアオイちゃんとは、なにか蟠りがあるようですね。

次話は、明日更新の予定。

なんだかねだで、出発します。
では。

瑞夏

世の中は不思議

「と、と、と、と…！」

「は？ 何だよ」

目を見開き、とととと言いだしたナナギに、チサヤは訝しげな視線を向けた。

今日は晴天旅日和。

きらきらと輝く太陽は、金の髪を持つチサヤによく似合う。

ちなみに彼の服装はというと。

動きやすそうな黒のタートルネックシャツに、深緑のダウンジャケット。

小綺麗な細身のジーンズは、元から細いチサヤをより一層しなやかに見せる。

およそ冒険者には似付かわしくない服装なのは、急ぎよ出発が決まったため、用意が出来なかったせいだ。

しかし、なまじ整った顔立ちだけに、一見すればどこかのモデルか何かのようだ。

背は低いが。

「と、と、と、と…」

対して、まだとととと言っているナナギのファッションはというと、ふわふわとした生地の白いニットワンピースに、インナーは薄い水色のフリース素材のシャツ。

細い首には、柔らかそうなファーのマフラー。

茜の髪を彩るのは、マフラーと対になっている、丸っこい帽子だ。

こちらにも、残念ながらどこをどう見ても勇者には見えません。

せいぜい、いいとこのお嬢様ですね。

「どうした？ ナナギ」

「何か、忘れ物でもしたの？」

クシナとレイが同時に声を掛けた。

ちなみにクシナは鉄の簡易なアーマーに身を包んでいて、長身で筋肉も程よく付いた体系のせいかな、これぞ勇者！

という感じになっている。そしてレイはというと、彼の瞳と似た深い藍の長いローブを纏い、優雅に笑む姿は勇者と言うよりも、宮廷魔術師のようだ。

そんなモデルみたいなの（チビだけど）と、いいとこのお嬢様と（中身結構庶民だが）、宮廷魔術師＋勇者。などという、何ともちぐはぐなパーティーメンバーが、この世界を救う代表者、勇者だったりするから、世の中は不思議。

「と、徒歩で行くのおーっ!？」

……特にこいつ。

頭を抱えて叫ぶ、こいつ。しかも、徒歩が嫌だなんて言っちゃってます。

「仕方ないよ。馬車に乗って優雅に旅する勇者なんていないよね？」
にこやかに、レイがナナギを宥める。

そんな表情も清廉な聖女のように見える。

「まあ、適度に休憩を挟むから、疲れたら遠慮なく言ってくれ」
いつのまにか、パーティーのリーダーと化してしまった、頼れる少年クシナはナナギの頭をぼんと叩く。

茜色の髪からは、微かに甘いバニラの香りがするが、そういうことには疎いのか、クシナは何の反応も示さなかった。

「っていうか、皆凄い格好だな」

「そんなすぐに準備出来るかよ。俺の家は、お前の家と違って普通の家系ですからねー」

呆れたようにぼやいたクシナに、チサヤが道端の石ころを蹴りながら返した。

その会話に、ナナギとレイも口を挟む。

「クシナの家は、何か特殊なの？」

「チサヤとクシナは幼なじみだったっけ？」

レイの質問は、軽く意図がずれている気もしないでもないが、クシナは丁寧な答える。

「ああ。俺の家は、代々冒険者の家系でね。俺もいつかは旅に出る予定だったんだ。…まさか、こんなに重大だとは思ってなかったけどな」

「んで、俺とクシナは確かに幼なじみだな。俺の親父とクシナのお袋が、仲良くてな。なんてーの、性別を超えた友人ってやつだよ。ま、一回親父振られてんだけどな」

「家は、国境ざかいに丁度隣り合わせなんだ。だから、国籍は別だけどお隣さん、ってわけだ」

リレーよろしく、そう続けると、チサヤとクシナは顔を合わせた。

「幼なじみ、かぁー…」

ぼつりとナナギが溢した。

「お前にも、いんの？」

「うん。いる…」

少し考え込んだ後、にこりと笑う。

「いたよ」

「なんで過去形？」

「うーん。いなくなっちゃったんだよねー」

カチコーン。

ナナギの一言に、空気が凍る。

三人の脳内には、死のワンフレーズが駆け巡り、地雷の警報が鳴った。

「え、えつと…」

「お、おう」

「そうなんだ…」

各々が気まずい相づちを打つが、当の本人は全く沈んだ様子もなく、あっけらかんと首を捻った。

「んー。二年前くらいにね、急に旅に出ちゃったんだよね。第四彼女のサラサさんと…だったかな？」

「た、旅？」

「そう」

脱力する三人。

「ていうか、第四彼女ってなに？」

軽くスルーされかけていた疑問フリーズをレイが恐る恐る口にした。

「ああ、タキちゃんかなり遊び人なんだよね。第一彼女のローゼンさんが本命って言うてたけど……でも、多分……」

「……」

ちよっとしたハーレムだ。

アラブの国王みたいな、黒光りしたおっさんが四方に美女をはべらせる、という下らない空想をしてみても、チサヤはげんなりした。

「タキちゃん、かつこいいからねー」

ふと、ナナギはタキが旅に出た日を思い出す。

あの日も、こんな晴天だったっけ……？

最低男に恋をした

「ねえタキちゃん、本当に行っちゃうの？」

「おー、サラサがどうしても言うからな」

白い歯を見せて、けたけたと笑うタキを見上げて、ナナギは確信する。

タキが歯を見せるときは、大概嘘を言っているのだ。

「……嘘ばかり……」

「え？ ……まあナナギ達には悪いがな。こんな不安な時に行くなんて、薄情だろ」

「そうだね。でも、別にタキちゃん関係ないし……」

そう言つて、ナナギは目を伏せる。

この頃は少し俯いただけで、涙がすぐ落ちてしまう。悪い癖だ。

あたしは泣いていい人じゃないのに……。

「あー、なんだ。そんな悲しい事言つなよ。アオイと二人で、頑張れよな」

くしゃくしゃと髪を撫でるタキの大きな手をつかみ、ナナギは俯いたまま何度も頷く。

後ろの方で、急げとばかりにドスンと荷物を置く音がした。

サラサは美人だが、気が短い。

「ナナギ、お前は何にも悪くないんだ。誰に何言われても、勘違いすんなよ」

「でも……！」

「親戚の婆さんとオレ、どっちを信じる？」

意地悪く、タキは口の端を上げる。

優しいオレンジの髪が、風に揺れた。

「……タキちゃん」

「だろ？ なら、ナナギは前向いて歩けよ。……大丈夫。人の噂は三歩歩けば忘れるから！」

「それ、鶏」

ぼそりと、落ち着いたアルトの声がした。びくと、一瞬ナナギの肩が震える。

でも、それは本当に一瞬で、次の瞬間には笑顔に変わる。

「姉ちゃん！」

「アオイ……！」

水色の髪を後ろに縛り、少し鬱な表情で現われたアオイは、交互に二人の顔を見ると、薄く微笑んだ。

「タキ。ナナギに余計なこと言わないで」

「は？ 余計なこと？」

「そうよ。父さん達が死んだのは、ナナギのせ……」

「アオイッ！」

アオイが言い終わらないうちに、タキが叫んだ。

紅い瞳が苛立ちに染まる。

「ナナギの前で、お前何言うつつもりだよ？」

「真実よ？ タキ、貴方みたいに考える人なんて、この世ではほんの一握り。分かる？ 例えどんなに正しくて美しい理屈でもね、認められなきゃ幻想に過ぎないのよ」

「アオイ！ なんでお前がそれを言う？ お前はナナギを庇う人間だろ……！」

「庇う人間？ ……笑わせないで！ 何故私がこの子を守らなきゃいけないの……？ 私は被害者、この子は加害者なのよ！」

「ざけんなっ！」

咄嗟にタキの手がナナギの頭を離れた。

反射的にアオイは目を瞑り、頬に力を入れる。

全てがスローモーションになる。

「やめてえっ……！！！」

パァンッ。

乾いた音が響いた。

「……ナナ……！！！」

じんじんと頬が痛む。

突き刺さるようなその痛みに、顔を歪めることなくナナギはにっこりと笑った。

つう、と表情に反比例して大きな瞳から涙が一筋伝う。

「駄目だよ、タキちゃん。駄目だよ……」

そつと目を開けたアオイは、顔をしかめた。

妹の、赤く腫れた頬を見て。

その表情は、とても彼女を憎んでいるようには見えなかった。

しばし呆然としていたアオイだったが、はっと我に返ったのか、きつくタキに視線を向けた。

「そうそう。旅に出るんですってね。どうか良い旅を」

形ばかりそう告げ、向こうの方でイライラと立っているサラサを見つけると少し眉をひそめた。

踵を返し、タキに背を向ける。

「……………いつてらっしゅい……………」

それは、聞き取れるかどうかも怪しいほど小さく消え入りそうな声だった。

それでも、タキは驚いたように目を丸くし、ナナギは嬉しそうに顔を綻ばせる。

小さくなつていくアオイの背中を見送りながら、ナナギは赤くなつた頬を押さえた。

「悪かつたな、ナナギ」

「うん？ 気にしてないよー。あたしが勝手に飛び出したんだし。

それに…タキちゃん、もし姉ちゃんを叩いてたらすつごく後悔するでしょ？」

ふるふると首を振り、またナナギは可愛らしく笑む。

「タキちゃん、嘘はつかないで？」

「ナナギ……」

「タキちゃんが旅に出る理由、姉ちゃんの悲しむところを見たくないから、でしょ？」

「……」

黙り込むタキに、ナナギは続ける。

「ごめんね、タキちゃん。姉ちゃんがあんなになっちゃったのは、あたしのせいだよ。姉ちゃん、変えちゃったのは、あたし」

そう言つて、ナナギはまた赤い頬に触れた。

まだ、ずきんと痛む頬に苦笑を浮かべてナナギはタキに手を伸ばす。

「あたしを叩いたのは、本当に気にしないでね。これは、あたしのタキちゃんと姉ちゃんにしたことに対する罰だから。これでも、軽すぎるくらいだけどね」

うふふ、と声を上げるナナギを見て、タキは悲しそうにする。

幼なじみに、嘘は意味をなさない。

それでも、嘘を重ねるしかないのだ。

ほんの少しでも、この幼い少女の苦しみを薄めるために。

たとえ、自分の愛しき者に憎まれようと。

「ばあか……。ナナギ、女に手を挙げる男は最低なんだぞ。よく覚えとけ」

「ふーん、なら姉ちゃんは最低男に恋をしたのね」

したり顔で言つたナナギの頭を、タキはこづく。

「何言つてんだか。でも、そうだな……。もしそれが本当のことなら、アオイに言つておいてくれや。最低男のことなんか、さっさと忘れちまいな、ってさ」

そうして、タキは旅に出たのだ。

歯を見せて笑つてから。

最低男に恋をした（後書き）

こんにちはー。

椎名です。

今回は、ちよぴっと過去話です。

ほんのり暗め・・・ですかね？

タキちゃん、けっこう私は好きですね？
では。

瑞夏

早くも初戦闘

「うー、疲れたー」

わざとらしく足を引きずる様にして歩きながら、ナナギは額に浮かんだ汗を手で拭いた。

「またかよ？ 体力ねえなあ。運動しねえと牛になるぞ」

ここぞとばかりに憎まれ口を叩くチサヤから、露骨に顔を背けて、ナナギはクシナとレイを交互に見た。

どちらに頼むべきだろう。

ぼんやりしているように見えて、たまに打算的な能力を発揮するナナギは、瞬時に考えを巡らせた。

クシナには絶対的決定権がある。

これは不本意ながらリーダー化してしまった事による、唯一の利点だろう。

次にレイ。

彼はパーティー優しいのだ。

一番成功率は高いのだが、たまに飴と鞭方式に乗せられてしまうのが難点だ。

ちなみに、チサヤは論外と考えているらしい。

まあ妥当なのだが。

「クシナ、ちよっとだけ休憩しようよ。ほら、あそこがいい感じの木陰発見！」

どうやらクシナを選んだらしい。

少し先に見える青々とした大樹を指差しながら、ナナギはにこっと笑った。

「こいつの言うこといちいち聞いてたら、いつ町に着けるか分からないぜ」

「ちよっとチサヤ黙っててよ！」

水を差しにわざわざやってきたチサヤを睨む。

勿論、ナナギの軟弱な目力に負けるようなチサヤではない。
ないのだが、残念ながらクシナはレイと同等に優しかった。
チサヤの言葉も気にはしたようだが、疲れたというナナギを無視で
きるはずもなく、決断をした。
「じゃあ、少しだけな」

さわさわと、風に緑の葉が揺れて音を立てる。

それはとても癒しを呼ぶもので、ナナギも例外なくその癒しに浸り、
目を閉じていた。

太い幹を背もたれにし、寄りかかる。

その樹は、誰もが目を見張る大きさで、四人皆が寄り掛かってま
だ余裕があるほどだった。

「あー、極楽」

「温泉入った婆さんかよ」

「チサヤ！」

極上の癒しを妨げられて、いつもより強く名を呼ぶ。

対してダメージはないが、形ばかり肩をすくめてチサヤは舌を出し
た。

「ところで、最初の目的地はどこかな？」

二人を眺めながら、レイが横にいるクシナに尋ねた。

「そうだな。とりあえず、一番近い町が…セルフィオネだな。そこ
で、情報収集しようか」

「了解。あとどれくらいで着く？」

「何も問題なく進めば、今日中には着くだろうな」

「何も問題なく進めば、ね」

意味深にレイが呟く。

「何かあるの？ 痛いつてば！ 離しなさいよ！」

「お前こそつねってんじゃねえ！ で…ああ。なるほどな」

ナナギは髪を、チサヤは頬を互いに引っ張られながら、クシナ達の会話に口を挟んだ。

これまでの経緯は…。

察してもらいたい。

「なるほどなつて、チサヤ分かったの？」

「ま、な。鈍感女とは訳が違うんで」

「あんたはいちいち一言多いのよ！」

「はいはい。そこまで」

第二ラウンドが始まりそうなところで、クシナが仲裁に入る。

さすがにこれ以上付き合ってられないようだ。

最も、ナナギも言われなくてもやめただろう。

…この光景を見た瞬間に。

「ま、魔物……！？」

辺りを囲む無数の生物。

それはどう見ても人間には見えず。

友好的にも見えず。

あえて言うなら、そう。

好戦的。

旅が始まって早数時間。

早くも初戦闘のようだ。

早くも初戦闘（後書き）

こんにちは。

椎名です。

いよいよ私の大の苦手な戦闘シーンに差し掛かってしまいました・
・。

あああ。

温かい目で見守ってやってください。

瑞夏

クリーンヒット

咲いた咲いたチューリップの花が。

並んだ並んだ赤青黄色。

どの花見ても綺麗だな。

…赤青黄色が綺麗だと思えるのは、どうやら花だけらしい。

自分たちを取り囲む生き物を見渡しながら、ナナギはそう実感した。

「気持ち悪う…」

「んなこと言ってる場合かよ」

げんなりと呟いたナナギに、チサヤがすかさず突っ込んだ。

じりじりと詰め寄ってくるそれらのモノから間合いを取るように、少し後退りする。

その間にも、ホルダーに引っ掛けた銃を右手に移す。

「ナナギ。武器は持ってきたか？」

同じように長く大きい剣を構えながら、少し向こうから聞こえたクシナの質問に、首を横に振りながらナナギはきよるきよると忙しく瞳を動かした。

「樹の後ろに隠れてて」

ナナギの行動の意図を察し、レイが的確に指示を出す。

だが、彼女は戸惑ったように苦笑を浮かべた。

「あ、あたしにも何か出来ないかな…」

「そこら辺の石でも投げとけば？」

さすがに一人だけ安全な場所で隠れているというのは気が引けるらしい。

そんなナナギの言葉に、チサヤが面倒臭そうに答える。

残念ながら、クシナとレイはもう戦闘体制に入ってしまったようだ。

ナナギの声は届かない。

「じゃ、じゃあ石…」

しゃがみこんで小石を拾った瞬間、全てが始まった。

魔物の咆哮が轟く。

非人間的な体が、宙を舞い踊りかかる。

チサヤが銃口を向ける。

クシナが大剣を振りかぶる。

レイが目を閉じ呪文を唱え始める。

そして、ナナギが情けなく石を構えた。

「ていつ」

「つてえ！ ナナギてめえどこに投げてんだよ！」

「ごめん！」

ああ。

会話から分かるように、何だか残念な感じになっています。

一応説明しますと、ナナギの放った石は、へろへろと頼りない弧を描き、見事に仲間であるはずのチサヤの後頭部へとクリーンヒットしたわけです。

勿論、そんなこちら側の内情なんか考慮してくれるはずもなく、そうこうしている間に魔物は襲い掛かってきた。

赤色の体に、うっすらと浮かんだ緑の斑点。

筋肉が不規則に盛り上がった腕と足は、顔に比べて異様にでかい。分厚く腫れぼったい唇からは、生臭い唾液がこぼれ落ち、目は濁った沼色だ。

「いいいいいいっ！！！」

そんな魔物を間近で見つめ、ヒロインっぽくない叫び声をナナギがあげた。

その声に顔をしかめたチサヤだったが、そこは何か差があるのか焦ることなく銃を持ち直すと、にまりと笑った。

「見てな、ノーコン女」

その言葉に失礼な！

と喉まで込み上げたナナギだったが、次の光景を見てごくりと飲み込んだ。

ドギョーンッ。

どうともつかない、そんな音が響くと同時に、目の前にいた数匹の魔物が一瞬にして、散り去った。

「な、なんでえっ!?!」

「は? 何で?」

てつきり、すごーい。

などという賞賛の言葉を期待していたチサヤは、ナナギの声に肩を落とした。

「一発しか撃ってないよね?」

「あー、この弾特殊なんだわ。いい位置に当たれば何匹でもどんと来いだな」

また笑って、チサヤは銃を傾けてみせた。

「へー!」

ナナギの顔が輝く。

幼い頃から一緒にいたタキの影響か、ナナギは銃やら剣やらという男らしいものにも興味があるのだ。

「いーなー! なんかかつこいいい!!--!」

「ま、そらそーだな。お前の石ころに比べれば何千倍もいかすな」

「チサヤが石でも投げろって言ったんじゃない!」

「ノーコンすぎんだよ!」

「ひっどーい!」

ぷくうつと頬を膨らませたナナギと眉をひそめたチサヤがしようもないことで言い争っているとき、クシナとレイは真面目に戦っていた。

「レイ、大丈夫か?」

肩で荒く息をしながら、クシナがレイを見た。

焦げ茶色の髪は、心なしか乱れている。

そんな様子は、不謹慎にも色気を感じてしまうほどに、大人びてい

た。

「何とかね」

にこり、と場違いに穏やかな笑みを浮かべてレイはロッドを軽く回した。

翡翠色のロッドの先から、零れるように氷の粒が吹き出す。

その氷の粒は一直線に、群がる魔物の群れの中心に向かっていく。

その氷の列が見えなくなる頃に、レイはロッドをもう一度回し、ふつと息を吐いた。

その瞬間、群れの中心がまばゆいばかりの光を放ち、銀に煌めいた。

「アイスタワー」

何故か心の底から楽しそうに呟くレイ。

視線の先には、確かに氷の塔が出来ていた。

見た目は良いものの、目を凝らしてみれば透き通る氷の中には、悲痛な顔で固まった無数の魔物が凍っている。

それを見て嬉しそうに笑うレイは何というか…。

悪趣味ですね。

「だあああつー!!」

真横で笑うレイを気にも止めず、男前な声を上げているのは勿論クシナだ。

長くてごつい大剣を軽がると振り回し、周りにいる魔物を次々に吹き飛ばしていく。

まさに、圧巻。

冒険者の家系というだけあって、それなりの教育は受けているようだ。

数えきれないほどいたはずの魔物たちは、何時の間にやら数匹に減っている。

真面目に戦っていたクシナとレイの努力の賜物だろう。

その光景を見て、安堵の息をつく二人。

はい。

お疲れ様でした。

……なんてあっさり終わってしまうわけ、無いですよ？
ズシッ。

地面に穴が開くのではないかと懸念されるような、重苦しい地響きがした。

汗で額に張りついた髪を払っていたクシナが、ぴたりと動きを止める。

嫌な予感がする。

先程までの魔物達は、お世辞にも強いとは言えなかった。

雑魚と言っても良いだろう。

つまり、安易に予想できる展開の一つにこんなものがある。

雑魚の後には……。

「ウガアアアアッ！！！」

ボスが来る。

クリーンヒット(後書き)

こんにちは。

椎名です。

ああああ。

やっぱり戦闘シーンは苦手です。

瑞夏

見えてない？

雑魚の後に登場したボスに、四人は右往左往していた。見た目こそ雑魚達と大して変わらないものの、圧倒的にサイズが違った。

毒々しい青の身体は、先程まで平和に寄り掛かっていた大樹とさほど変わらず、とにかくデカい。デカいと思ったら、デカいのだ。

しかも右手には斧。

左手には束付きの棍棒。

どちらも巨大です。

「最恐装備：！」

「でけえ……」

「グロテスクだな」

「強そうだね」

各々感想を伸べ、たらりと脂汗を流した。

出発して、まだほんの数時間。

早くも絶体絶命。

格が違うぞ、格が。

そんなことを考えながらナナギは、ボスを見上げる。

「あれ？」

そして、首をかしげた。

ナナギの瞳に映っているのは、グロテスクなボス。

…の眉間だ。

身体もデカけりや眉毛も太い。

別にこんなどうでもいいことを思ったわけではない。

ボスの太い眉毛と眉毛の間には、金に輝く球が埋まっていたのだ。

それは、気味の悪いボスにはあまりにも不釣り合いな程美しく、思わずナナギは見とれてしまいそうになる。

「ねえチサヤ、あの金の球って何なの？」

「は？ 金の球？」

ナナギの問いに、チサヤは怪訝な顔をする。

「だから、あの眉間にある…」

「どれだよ」

眉を思い切り寄せて、ボスの眉間を睨むチサヤ。

だが、見つけれられないらしくまたナナギを見た。

「んなもんねえよ」

「あるつてば！ クシナとレイには見えるよね？」

チサヤでは話にならないと、クシナとレイに話をふる。

しかし、二人も曖昧に苦笑するばかりで、頷いてはくれない。

む、と膨れながらナナギは自分の額を指差す。

「ここだよ、ほら」

「だから、ねえつて」

「あるつてばー」

全否定するチサヤに、ナナギが尚更むくれてみせた。

茜色の髪が、風にふわりと揺れた。

「と、とにかく立ち向かうだけ向かおう！」

おお、男前な発言です。

きりつと顔を引き締めてクシナは叫ぶと、降ろしていた大剣を持ち

上げ直した。

「援護は任せて」

「分かった、よろしく頼む！」

目と目を合わせて、にやり。

先ほどの雑魚との戦いで、いつのまにかクシナとレイの間に何らか

の絆が生まれたようだ。

喧嘩した後の友情、の類の絆が。

「俺も行く」

ちよつとチサヤはむすつとしている。

幼なじみを取られた様で、面白くないのだろうか？

「え、え、え？ 皆行っちゃうの？」

武器の無いナナギは、戦いたくても戦えない。

それについては、むしろ都合なのだが、置いていかれるのは嫌だ。ナナギは諸手を挙げて引き止めようとする。

「うーん、じゃあチサヤ、ナナギについててやれ」

「は!？」

「とりあえずは俺とレイで行くよ。ピンチになったら呼ぶ」

「ちよつと待……」

ナナギの護衛(?)に、何故かチサヤをチヨイスしてクシナは、彼の言葉も最後まで聞かずに駆け出した。

レイも、跡を追って走りだす。

「うおおいつ!!!! 何で俺が残んなきゃいけねえんだよ! こら、クシナ!」

チサヤの声も、ただただ虚しく響くだけだ。

「俺にも戦わせろおつ!」

見えてない？（後書き）

こんにちは。

椎名です。

そろそろ、第一話も終盤に差し掛かってきました。

第一話って言うか、まだ零話って感じですけどね……では。

瑞夏

これこそ絶体絶命

「で、でかいな…」

「…そうだね」

いざ傍に来てみると、それは予想以上に巨大だった。しかし、その代わりなのかどうにも動きは鈍そうだ。

現に、真下に走ってきた二人の姿を捕らえることもままならないように、ボスはただ彼らをじーっと思つめている。

威圧感はあるのだが、さすがに視線で人は殺せない。

少しびくりとしながらも、クシナは大剣を振り上げた。

「でつりゃあああ！」

掛け声と共に、風を切る音がブオンとする。

それに合わせて、レイが目を閉じ呪文を呟き始めた。

どうやら狙いは足のようだ。

バランスを崩す作戦なのだろう。

ガツキーン。

痛そうな鈍い音がした。

だが…。

「え？」

「あれ？」

ボス、びくともせず。

太い足をじろりと睨むと、首をかしげてぼりぼりと掻いた。

痛くはないが、痒くはあるらしい。

しかし、ダメージが限りなく0に近いことに変わりはない。

しかも、先ほどの攻撃は一撃で仕留めるつもりでやったのだ。

クシナの剣技とレイの魔法を組み合わせた、即席の割りには一応今の

の実力をフルに出した攻撃だった。

つまり、この攻撃でどうしようもないということとは。

「む、無理だ…」

クシナが脂汗を流して呟く。
こくりと、レイが同意する。

その時、ボスが腕を振り上げた。

「えー!? ちょっと待て! 攻撃してくるのか!」

「み、みたいだね。早く逃げ……」
られなかった。

今の攻撃（全くダメージなしだが）に怒ったらしく、ボスが動きだした。

動きはのろいものの体が大きいから、すぐに捕まってしまうそうだ。まさに、これこそ絶体絶命。

さー、と二人の血の気が引いた。
ボスが牙を剥く。

二人は、足が竦んで動けない。

なんだかんだで、魔物を見るのは初めてな上に、正直言って実戦も初めてなのだ。

おまけにまだ年も若い。

巨大なボスに狙われて、機敏に反応出来るわけではない。
勿論、そんな状態を察してくれるはずもない。

ボスはにたりと笑い、右手の斧を力一杯振り落とし……。

「うがあああああっ」
倒れた。

きよとんとする二人の目の前で、ボスは力なく地面に伏していく。

その顔に生气は宿っていない。

ばたり、とボスは倒れて数秒もすると、ふしゅーっと気化していった。

跡形もなく。

後ろの方から

「ほら、言ったとおりでしょっ?」

「まじかよー!」

そんな感じの声が聞こえてきた。

緊張感も何もないようなその会話に、気が抜けてくる。

へたりと、レイが座り込み、クシナが剣に寄り掛かった。

「なあーんだよ、もう」

「腰、抜けた……」

どうにか、危機脱出の様で。

「ね、ねえ。あれヤバいんじゃないの？」

「ん……そうだな」

遠くの方で、剣を振る魔法を使うクシナとレイが見える。

しかし、様子がおかしい。

一回攻撃した後、二人の動きが止まり、代わりにボスが手を挙げた。右手には、斧が握られているのだ。

あの腕力なら掠めただけでもただでは済まないだろう。

しかも、二人に逃げる様子はない。

「大変だよっ！ チサヤ！ どうにかしなきゃ」

慌ててナナギはがくがくとチサヤの肩を揺り動かす。

「分かってら、そんなこと。でもどうすればいいんだよ、あいつの剣で駄目なのに、銃位でどうにかなるかよ……」

がくがくと上下に揺られながら、チサヤは悔しそうに言う。

「やってみなきゃ、分かんないでしょ？」

「そんなの分かってんだよ！ でも、どこ狙えって言う……」

「眉間……！！」

「またかよ」

「お願い、信じて……！」

げんなりとするチサヤだが、半泣きで懇願するナナギに、諦めたように銃を構えた。

「撃つからな」

その言葉に、ナナギは涙ながらも、少し嬉しそうに笑う。

「うん。外さないでね」

「はっ、俺様を誰だと思ってるんだか」
出会ってまだ一日なのに、誰だもないだろ。

なんて捻くれた事を考えたわけでもなく、ナナギはもう一度ボスの眉間を見つめた。

確かに、金色の球が輝いている。

大丈夫。

大丈夫。

心のなかでそう繰り返し、ナナギは祈るように手を組んだ。

ボスの手が振り下ろされると同時に、チサヤは引き金を引いた。

ズギョントツ。

小さな弾丸は、ぶれることなく真っ直ぐと進み、見事眉間のど真ん中を射ぬく。

瞬間、ボスが揺れる。

ナナギが目を開いたときには、もうボスは地に伏しゆっくりと消えていっていた。

「ほら、言ったとおりでしょっ？」

「まじかよー！」

二人がそんな和やかな会話を交わしだすと同時に、辺りを一瞬間が覆った。

これこそ絶体絶命（後書き）

こんにちは。

椎名です。

今回は対ボス戦です。

お分かりのように、ナナギは少し変わった子のようです。

次話は、ついに（？）ナナギと魔界のあの人たちが対面します。
では。

瑞夏

年増の見栄

「おーっほっほっほ！」

闇のなかに最初に響いたのは、女の甲高い笑い声だった。

「リーリア様、聞くに堪えないんで、止めてください」

お次に聞こえてきたのは、何とも冷静な声。

「な…っ！」

「年増の見栄は見苦しいだけですよ」

「年増ですって!?!」

「はい。三百をこえた老女が年増でなく、他に誰がいるといつのです?」

その一言に、しくしくと陰気なすすり泣きが始まる。

「きつつー…」

ナナギが同情的な呟きを洩らした。

「てか、こいつら誰だよ」

ぼそりとチサヤが言うと、待ってましたとばかりに闇が失せた。数秒ぶりの太陽に、思わず四人は目をつぶる。

次の瞬間、目の前にいたのは、一人の女と一人の少年だった。

ちなみに女の目は赤く、鼻水も垂れている。

「いい年した年増が、鼻水垂らして泣かないでください」

「な、泣いてなんかいなくってよ!」

「はあ、ではその鼻から流れる液体は何ですか?」

「うっ。こ、これは…」

「これは?」

「これは…」

「ごくり。」

思わずナナギ達も、女の答えを固唾を飲んで見守ってしまっ。

「これは……………つによ、汁よ!…!」

今、尿って言い掛けましたよね?

「汁ですか。へえ、あなたは鼻から得体の知れない汁を垂れ流すんですね。鼻水流すよりも、よっぽどみっともないと思いますよ」
少年の毒舌は容赦が無い。あまりにも辛辣な言葉に、女はおろかなナギも固まった。

「あー、で、何なんだ？ お前達は」

事の成り行きを眺めていたクシナが、半ばげんなりとした面持ちで聞いた。

「ほら、聞かれていますよ。リイーリア様」

「うぐっ、ぐすっ」

「…私達は魔界の者です」

フオーノーなし。

むしろ不機嫌そうに少年は、女を見てからため息をついた。

「魔界……って、もしかして」

「はい。魔物ですが？」

「魔物っ!？」

どう見ても人間にしか見えない。

と、ナナギは思わず少年を見る。

「今は翼をしまってますから」

ナナギの不躡な視線に気付いたのか、少年は少し眉をひそめた。

黒髪に黒い瞳。

翼が無いことを除いても、何故か雰囲気人間に似ている。

隣で泣いている女は、やはりどこか人間離れた空気を感じているのに。

「えっと……」

「ああ、私は魔物と人間の混血児ですよ」

「混血児……?」

ナナギは首をかしげる。

あまりナナギには馴染みの無い言葉だった。

「要は、ハーフって事ですよ」

「ふうん」

理解出来たのか、ナナギは小さく頷いた。
横のチサヤが、こきこきつと首を鳴らす。

「で？ そのハーフさんが、何の用っすかね」

なんだか態度が悪い気もするが、一応敵なのだからそれは仕方がないのだろう。

そんなチサヤの声にも、少年は全くの無表情で返す。

「魔界では、今地上を乗っ取るうという計画が進んでいます。その証拠に、貴方たちがいるのでしょ」

淡々とした口調は、友好的とも取れるし、好戦的とも取れる。

戸惑いの表情を浮かべながら、今まで黙っていたレイが口を開いた。

「ちよつと待つて。ということは、君たちは僕らを殺しに来たの？」

「……さあ？ それは、私ではなくリーリア様が決めることですから」

そう言つて薄く笑うと、少年はまだ半泣き状態の女を見た。

ぐすぐすと情けない声を上げながらも、女は豊かな胸を突き出し精一杯威厳あるポーズをしてみせる。

「シャオロン、掛かった時間は？」

女の問いに、少年は表情を変えずにメモ帳を開いた。

「雑魚、三十分。ボス、二十分。最終的には、弱点を見つけさせたものの、危機的状況にもなる。弱点発見も、まぐれの可能性あり」

「な、なんだかぼろくそ言われてない？」

「そうだな……」

ひくりと、ナナギの頬が引きつる。

しかし、少年の答えに女は満足げに頷いた。

もう涙は乾いたようだ。

「まぐれも実力のうちだね。力があつたつて、運が悪いのは御免だもの」

「そうですね。もしかするとまぐれではないかも、しれませんしね」

「なんだよ」

吟味されるような口振りに、チサヤがイラツとしたようだ。

「貴方たちにとっても、悪い話ではないはずですよ」
「わたくし達と、手を組まなくて？」

年増の見栄（後書き）

こんにちは。

椎名です。

今回は、ついに魔物と人間が会ってしまいました。

果たして、敵か味方か！？

って、これを見る人はもう分かってますよねー。
では。

瑞夏

道中会話

「リーリアさんって魔物なんですよね？」

つつつ、と擦り寄りながらナナギはリーリアを覗き込んだ。

目標の町は近く、道もなだらかなので六人は思い思いの相手と道中会話を楽しんでいた。

「ええ。一応ね」

口を窄める様にして笑むリーリアは、正直言ってかなり美しい。

女としてのプライドを、軽くなくしながら、ナナギはリーリアをじっと見つめた。

妖艶な美女。

まさにそんな言葉がぴったりだ。

ずがーん、と落ち込んだナナギのためか、自分のためか、シャオロンはふいに呟いた。

「リーリア様は、三百歳超えていますよ。婆さんですよ」

「ちよつ、シャオロン！？ 何言って…」

「あ、すみません。つい口が滑りました」

全くの棒読みで謝るシャオロンに、リーリアは眉を吊り上げる。

「全く！ わたくしは魔物なんだから、人間でいえばまだぴちぴちなよ」

「若いんですか？」

「若いのよ！」

「…ナナギさんと同じくらい？」

「もちあたばーよ！」

その言葉が古い。

だが、シャオロンはリーリアの答えを聞くと、満足そうに笑んだ。その笑顔は、漆黒の夜に浮かぶ細い三日月のように、神秘的で蠱惑的だ。

「そうですね。なら、ナナギさんもため口で構いませんよね？」

「へ？」

「同い年なら、敬語はおかしくないですか？」

「え、ええ……」

何かおかしいと感じながらも、世にも珍しいシャオロンの笑顔につられてリーリアは曖昧に頷く。

美しさは人を操る。

そんな言葉がぴったりだ。

「だそうです。ナナギさん、リーリア様に敬語など使わなくても良いですからね」

「え？」

急に話を振られたナナギは間抜けな声を出して、首をかしげた。横にいたチサヤが、肩をすくめた。

「…策士」

「チサヤもあれくらい頭を使えたら、いいんだがな」

「クシナ！」

ぼそりと呟いたクシナをぎろりと睨んで、チサヤは鼻を鳴らす。

「なら、シャオロンもあたし達に敬語なんか使わなくていいよー」

「これは癖みたいなものですから……」

ナナギの提案に、一瞬表情を曇らせるように俯いてから、シャオロンはまた微笑んだ。

三日月ではない、今にも崩れそうに儂げなその笑顔に、何故だかナナギは胸が痛くなる。

「だから気にしないでください」

ナナギの表情を読んだのか、シャオロンは素っ気なく付け加えてからそっぽを向いた。

無表情の仮面の下にある感情は、たまに顔を出しては心を映す。

弱い心を見せると、人は同情の瞳を向ける。

それが堪らなく嫌で。

仮面を被った。

「そっか。ならいいけど、せめて名前は呼び捨ててね。さん付けな

んで、よそよそしすぎるもん！」

にっこりと、ナナギは言った。

純粹な、自分には持ち得ない笑顔にシャオロンは微かに動揺して。微かに顔を赤くした。

「はい、分かりました」

町は、もうすぐ。

まともな町

「着いた〜！」

にゅーっと、変な声を出しながらナナギは大きく伸びをした。

茜色の髪が、ふわりと揺れてなびく。

「『セルフイオネにようこそおいでませ（笑）精一杯のおもてなしをしないこともないこともないです（笑）よい旅を（笑）』」
怪訝な顔つきで、クシナが道に立ててあつた看板を読んだ。

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

沈黙が六人を包む。

「…：…なんだろうね、このどうしようもない不安感は…」

ぼそりとレイが呟いた。

「（笑）つてのが、余計に不安を煽るよな」

「果たして此処はまともな町なのでしょうか…」

「わたくし、頭痛がしてきたわ」

頭を押さえるリイリア。その横で、ナナギが先ほどまでの爽快な気分は萎えてしまったのか、微妙な表情をしている。

「もー、とりあえず宿屋に行こうよ…：…疲れた」

「そう…：…だな」

「メシ食おうぜ、メシ」

「僕はもう寝たいな」

「私、道具を買い揃えたいのですが」

「…：…この町には、エステはあるかしら」

思い思いの言葉を口にしながら、六人は重い足で町に入った。

宿屋の大部屋を借りた六人は、ひとまず計画を立てるべく、卓を囲う様にして座っていた。

男女で部屋を分けなかったのは、とりあえずまだ金を手に入れる当てがないので、当分節約しようと思ったからだ。

リーリアは、こんな狭い部屋に！

と文句を言い掛けたが、シャオロンの煩わしげな視線に、あっさりと口をつぐんだ。

この二人の上下関係は、イマイチ掴めない。

「じゃあ、これからどうするか話し合おう」

リーダーの威厳たつぷりに、クシナは卓を叩いた。

「しなきゃいけない事ってある？」

「情報収集だろ、装備も整えたいな。休養とるのも大事だし……」

「あーもうっ！ めんどくせえ！ 何手かに分かれて役割分担しようぜ」

指折り数え始めたクシナを遮って、チサヤが声を上げた。

反論が出る前にチサヤは矢継ぎ早に続ける。

「俺とチサヤは情報収集。レイとその女は……」

そう言って、チサヤはちらりと二人を見た。

「ん……」

「すぴー、すぴー」

寝てる。

「レイとその女は休養とね。っていうか、もうとってるが」

「あたしとシャオロンはー？」

拳手して首をかしげたナナギに、チサヤは視線を向けて少し考えこんだ。

「……ナナギとシャオロンは装備を整えてきな」

「私、もう装備は整えていますか？」

「あー、ならナナギの見立ててやってくれや。どうせ、こいつ何も分かってねえから」

「し、失礼な！」

ナナギはチサヤの言い草に、眉を吊り上げた。

しかし、チサヤはどうでもよさそうに一瞥だけくを見ると

「本当のことだろ」

「う、ぐぐぐぐ…！」

悔しいが言い返せない。

確かに、ナナギが何も分からないのは真実だ。

一人で行ったところで、訳の分からないものを選ぶに違いない。

チサヤが言っているのは正論なのだ。

「分かったわよ！ シャオロン、行こう？」

「はい、構いません」

全く表情を動かさず、シャオロンは控えめに頷いた。

「予算は、常識の範囲ならいいからな」

クシナがどこから取り出したのか、電卓をぱちぱちと叩きながら言った。

「らじや」

「では、行きましようか」

まともな町（後書き）

こんにちは。

椎名です。

一応、前回の話で第一章完結のつもりです。

今話からは、第二章「セルフィオネ編」となっております！
キーワードは『猫』でございます。

初めてたどり着いた町で、ナナギ達はどんなトラブルに巻き込まれていくのでしょうか……？

では。

瑞夏

子猫のような

足を踏み入れた瞬間、甘ったるい薔薇の香りが、鼻腔を突いた。アロマなのだろうか。

強すぎるその香りは、頭をくらくらさせる。

「匂いきついねー」

店の人には聞こえないように、ナナギは小さい声でささやいた。物珍しそうに、店内をきよるきよると見回していたシャオロンだったが、ナナギの言葉に頷いた。

「そうですね。薔薇…でしょうか？」

そう言いながら、ディスプレイのレイピアを手に取り物色する。銀が使っている。

なかなか良い品のようだ。

「装備って具体的には何買えばいいのかなー」

鼻歌混じりに呟いて、ナナギはシャオロンを覗き込む。

「…防具と武器。大きく分けるとその二つですね。防具はいいとして、武器は…。ナナギ…は何を使いたいですか？」

ナナギの名を、少しくすぐったそうに呼び捨てる。

それに気付いたかどうかは定かではないが、ナナギはふわりと笑った。

そして、きっぱりと言い切る。

「分かんない」

いい笑顔ですこと。

ナナギの答えに、シャオロンはあからさまに大きなため息をついて、額を押さえた。

レイピアを置いて、ナナギに向き直る。

「見ててください」

長いまつ毛の奥に漆黒の瞳が隠れた。

口の中で呪文を転がして、空中に丸を描いた。

すると、何もなはずの空間に映像が浮かび上がった。

「ふわ…あ」

ナナギは思わず感嘆の声を上げる。

「まず、有名どころから」

そう言いながら、シャオロンは映像の一つを指差した。輝く大剣が映っている。

「剣ですね。これは、体力のある男性が向いていると思います。ナナギには…」

ふい、と視線を逸らす。

暗に無理だと諭され、ナナギはショックを受けた。

「次は遠距離支援…、銃や弓。あるいはナイフですね」

「ナイフ？」

首をかしげたナナギに、シャオロンは隣の映像を指す。

鋭いナイフは、刺さったら痛そうだ。

「投げるんです。結構威力がありますよ。コントロールが良ければ、致命傷も与えられます」

コントロール。

その言葉にナナギは遠い目をする。

「あ…ナイフは無理かも…」

「そうですね。なら、これはどうですか？」

ナナギに頓着することもなく、シャオロンは最後の映像を指差した。そこに映るのは、大きく開いた扇だった。

「…？」

「扇ですよ。これなら、非力な方でも使いこなせますし。威力もそれなりにですから」

説明しながら、シャオロンはナナギを見た。

品定めするように、じつと眺める。

「多分…向いていると思います。貴女はどうやら風の魔力が強いよ
うなので」

「魔力？ え？ 私人間だよ」

目を丸くするナナギに、シャオロンは呆れの視線を送る。

「人間でも、微弱ですが魔力を纏っているものなのです。火、水、雷、土、氷、闇、光、緑、そして貴女の風。人それぞれ違う魔力を備えているのですよ」

無知に肩を竦めて、シャオロンは淡々と言った。

「そ、そうなんだ」

罰が悪そうに苦笑するナナギにシャオロンは一瞥だけくれて、店の奥を見た。

「店主に、貴女に合ってるものを見繕ってもらいたいですね」

「そだねー」

「…まあ、とりあえず希望は聞いておきますよ。どれが好みですか？」

シャオロンの言葉に、ナナギは早速扇の並べられた棚に近づいた。

「色々あるねー」

紅に碧に純白に。

装飾の施された華美なものもあり、ナナギは目をしばたたかせる。と、ナナギはある扇に目を止めた。

「これ、綺麗ー…」

「どれです？」

それは、玻璃で出来た透き通る扇だった。

玻璃なのに、何故かそれは柔らかさを帯びており、壊れそうに儂いに破れそうにはなかった。

光の加減で、それは幾重にも色を変え、様々な光を放つ。

降り積もったばかりの新雪のような、満ちた月を映した水面のような、侵しがたい張り詰めた美しさを持っていた。

「そうですか、確かに綺麗ですね」

「うん」

こくりと、ナナギが頷くと同時に背後で物音がした。

びくつとナナギの細い肩が跳ねる。

シャオロンが少し尖った耳を立てて振り返った。

「あの…お客様ですか…？」

鈴の音色のような、か細い声。

怯えたように立っていたのは、幼い少女だった。

銀の髪に、緑の瞳。

どこことなく、子猫のような印象を受ける。

そんな少女に、ナナギはほっと息をついた。

「なんだ…女の子かあ」

「えと、その扇…」

「買います。お代は？」

何故かシャオロンは即答した。

「え？ シャオロン、これに決めちゃうの？ いいの？」

「構いません。見たところ品も良さそうですし、相性もいいようにです」

「ありがとうございます。ではこちらに…」

少女が店の奥を指した。

二人は、少女の後を追った。

子猫のような（後書き）

こんにちは。

椎名です。

セルフィオネ編、第二話です。

ナナギの武器は決まったようですが、果たして使いこなせるのかな？
では。

瑞夏

不可解な現象

「ったりーな」

「こら、チサヤ。しつかりしろ」

くわあっと、大きく欠伸をしたチサヤを睨んで、クシナは言った。まるで父子のようだ。

「だーってよ、レイと女はぐーすか寝てんのに、何で俺は情報収集…」

「お前が決めたんだろ。あと、女じゃなくてリィーリア。仲間なんだから、名前くらい覚えろ」

「俺はまだ仲間だなんて、認めてねえ。うさんくせえんだよ」

忌々しげに吐き捨てるチサヤの目には、明らかな憎悪の色が現れている。

その瞳から視線を逸らす様にしてクシナは歩速を速めた。

「そーだな。お前、まだ引きずってんの…」

「うるせえっ！！！！」

「そうかつかするなよ。気にすることじゃ」

「だから、黙れっの！」

クシナの一言に、突然キレたチサヤは何故か真っ赤だ。

憤怒の形相で喚きだし、チサヤはずんずん進む。

「お、おい待てよ。怒るなよ！。…別に恋した女の子が実はオッサンだったとか」

「何か言ったか!？」

「いや、全く」

バリッ。

バリッ。

「んー。魔物ねえ」

音を立てながら、激しく煎餅を咀嚼する女性が頭をボリボリと掻いた。

大雑把に、シニヨンに編み込まれた赤茶けた髪は、所々白髪が目立つ。

でっぷり…否ふくよかな彼女の名前はジュリエットというらしい。名は体を表さない…。

「ふーむ」

首をかしげながら、ジュリエットは何もなかったはずの左手には、現在きつかりとクツキーが握られている。

「そのクツキーどっから出し…！もががっ」

不可解な現象に叫びかけたチサヤの口を、クシナが慌てて塞いだ。何するんだと睨みを効かせるチサヤに、クシナは首を振る。

「ああ、そうそう！最近越してきた女の子が、ちよつと噂になってるねえ」

「女の子…ですか？」

二人のやり取りも、全く気にせずジュリエットはのんびりと言った。

「うん。銀髪の可愛い娘でねえ」

「その子が何か？」

「んんん、よく分かんないんだけどね。ほとんど喋ろうとしないし、何か変わってるんだよねー」

ふーっ、とジュリエットは息をついてお茶を啜る。

「真夜中にね、その子に似た影が墓場でうろろろしてるんだ。それに、あの子が来てから、町の人は何人も行方不明になってるんだよ

…」

ジュリエットの声がだんだん小さくなっていく。

「も、もしかして旦那さんも…？」

「いや。あたいは生涯独身だよ」

即答だった。

「独身派って、出来ねえだけじゃ…もががっ」

「それで、その女の子はどこ？」

「ああ……」

ジュリエットの答えが返ってくるのと同時に、二人は駆け出していた。

不可解な現象（後書き）

メリークリスマス！（まだイブですけど）
椎名です。

クリスマスだけど、本編は全くクリスマス仕様ではありません・・・
。だつて、無理なんだもん！
では。

瑞夏

夕陽のせい

「あれ…？ 皆いない…」

ごしごしと目を擦りながら、ゆっくりとレイは起き上がった。いつの間にも眠っていたのだろう。

気付けば陽は傾きかけている。

ナナギの髪に似てるなー、なんて考えながら、レイは体を起こした。「皆行っちゃったのかなー？」

呟きながら、辺りを見渡す。

と、先ほどまでの彼と同じように気持ちよさそうに眠る、一人の女が目に入った。

瞼を閉じていても、その女の美しさは匂い立つように気高く、妖艶だ。

「……………ハサハ…」

小さく名を呼び、慌てたように口を押さえる。

今、何と言った？

血の気が引いていく。

まさか、まさか。

この女性とは、似ても似つかない彼女の名を呼んでしまっなんて。華奢な体も。

甘い香りも。

雪のように輝く真つ白な、長い髪も。

エメラルドのような、翠の大きな瞳も。

こんなに鮮明に覚えている。

思い出すたびに胸が高鳴り、同時に涙が零れそうになる。

そつと、レイは額に埋め込まれた翠の宝石に触れた。

『…許さないから。私は貴方を……許さない』

最期にそう言つて、この宝石を彼女は遣した。

最期の最期に、それを言わせたのは、この自分。

鏡を見るたびに、記憶が駆け巡る。
辛くて、苦しい。

この宝石は、自分にかせられた重い重い十字架。
甘く優しく、自分を縛る枷。

「レイ？」

ぎゅっと唇を噛み締めたレイに、控えめな声が聞こえてきた。

「どうかして？ ああ、それよりシャオロンは何処に行ったのかしら」

上品に首をかしげながら、リーリアはレイを見た。

「こんなところで寝たせいで肩が凝ってよ。ちよつとシャオロン！」

何処！？ 肩を揉んでよ！」

ヒステリックに叫び始めたリーリアに、レイは苦笑を浮かべた。

「皆出かけたみたいだよ」

「えっ？ シャオロンも？」

「みたいだよ」

心底驚いたように目を見開き、リーリアは声を上げた。

そして目を伏せる。

「…そう」

「リーリア？」

「喜ばなくてはね」

にっこり、とリーリアは満面の笑みを顔に浮かべて、言った。

「シャオロンはいい子なのよ。わたくしの傍にいなければ、きつと

幸せになれるの…」

「それは、違うと思うけど？」

レイは、間髪入れずに疑問形で返す。

「リーリア達がどういう関係かは知らないけど、別にシャオロンが不幸には、僕には見えないよ」

柔らかな銀髪が揺れた。

優美なその仕草は、老若男女問わず魅了して止まないだろう。

そして、それは魔物として例外ではない。

「そ、そう？」

微かに頬を赤くしながら、リーリアは顔を背ける。

「どうしたの？ 顔が赤い……」

「ゆっ、夕陽のせいではなくて!？」

顔を覗き込まれ、苦し紛れにリーリアはそうまくし立てる。

「ふうん。まあ、元気になったみたいだけど」

そう、レイが不思議そうに眉をひそめた瞬間、控えめに戸を叩く音がした。

「お、お入り！」

びくりと肩を跳ねさせた後、リーリアはいつもの高慢ちきな声色でそう言った。

ナイスタイミング！

表情がそう語っている。

「申し訳ありません。少しご忠告しておきたいことがあります……」
現れたのは、受付にいたはずの若い女将だった。

たおやかな黒髪といい、影のある顔立ちといい、艶を人間にしたような女性だ。

そんな女将の言葉に、レイが目を丸くした。

「忠告？」

「はい、最近町人が度々行方知らずになっておりまして。それが、どうやら越してきたばかりの少女の仕業ではないかと噂になっていきます。ですので、その少女の傍には近寄らないほうが……」

「肝心の、その少女の住み家はどこですか？」

珍しくリーリアがまともなことを口にした。

人には有り得ない、壮絶な美しさを持つリーリアに、女将は一瞬息を呑んだが、すぐにまた微笑を浮かべた。

「それは……」

『町外れの装備屋です』

夕陽のせい（後書き）

こんにちは。

椎名です。

皆さんサンタさんにプレゼント貰いましたか？

私も、一応もらえました。

で、今回の話もまったくクリスマス関係なし！

な感じのお話です……。

ちよつと暗くなつちゃうかな〜と思ったんですけど、レイ君の過去についてです〜。

昨日のチサヤ君の過去は、なんか軽い感じがしましたけどね〜。

あ、それと。

宣伝っぽくなつちゃうんですけど、クリスマスの企画で短編を書きました〜。

もし良かったら、読んでもらえると嬉しいなー、なんて。

すみません、厚かましくって……。
では。

瑞夏

変態を具現化

「え。ここが…レジ？」

きよるきよると、ナナギが辺りを見回しながら呟いた。

「そんなわけないでしょう。馬鹿ですか、貴女は」

ため息混じりにシャオロンが返す。

そう、二人が連れてこられたのは、どこをどう見てもレジではなかった。

薄暗く、埃っぽい。

おまけに、なんだか不思議な匂いがする。

今となつては、店内の薔薇の香りは、この匂いを隠すためだったのではないかと思える程だ。

「ていうか、あの女の子はどこ行っちゃったの？」

「そういえば、いつの間にか消えていましたね。まあ、彼女が黒幕なのでしょうが…」

二人は銀髪緑瞳の少女の姿を思い描く。

「どうしようかー」

のほほんと呟くナナギの声には、まるで危機感というものが感じられない。

玻璃の扇を手で遊ばせながら、ナナギはほう、とため息をつく。

「どうするも何も、まだ何も起きてませんしね。少女の目的も分かりませんし」

眉をひそめてシャオロンがそう言った瞬間だった。

「目的？ そんなの決まってるよ！ ルラのご飯になるの！」

きんとした高い声が響き渡り、同時にタトン、と心地よい音がした。

「…は？」

二人は一緒に振り返り、すっとんきような声を上げる。

振り返った先にいたのは、銀髪緑瞳。

そう、あの少女だった。

ついでさっきの、おどおどとした雰囲気は全く見せず、小悪魔よろしく微笑を浮かべている。

「ルラはね、世界一の…」

「そうですか。おめでとうございます」

少女の台詞を遮り、シャオロンが感情ゼロで手を叩いた。ぱちぱちと、乾いた音がやけに虚しい。

「どうしよ、もう帰っていいのかな…」

「構いませんよ」

おろおろするナナギに、シャオロンはきっぱり言い切る。

そのまま踵を返して回れ右しようとする。

が、さすがにそれは無理というもので。

「なに帰ろうとしてるのよ!」

甲高い叱咤が飛び、ルラが二人の道を阻む。

無視されたことが頭に来たのか、白い肌に青筋を立てている。

「この部屋に来た時点で、あんたたちはルラのご飯になるって、決まってるのよ!」

甘ったるい声で叫ぶと、少女ことルラは人差し指を、びしいっとシヤオロンに突き立てた。

明らかに迷惑そうな表情を浮かべたシャオロンにも動じず、ルラは尚も声高に宣言する。

「まずはあなたからっ!」

どこから取り出したのか、右手に持っていた小瓶をシャオロンに投げ付けた。

コントロールがいいのか、瓶はぶれることなくまっすぐシャオロンに向かっっていく。

「シャオロンっ!?!」

パシャン。

小さく音を立てて、小瓶の中身はシャオロンにかかった。

「……………」

悲しい沈黙が三人を取り巻く。

「…え、あの。何も起きないの？」

当たり前のように何か起きると思っていたナナギが、控えめに拳手した。

隣では、シャオロンも頷いている。

「うっ。ぶふっ。いい、いいわ！ 水も滴る良い男…！ あ、だめ鼻血が…っ」

頭から水を被ったシャオロンを見ると、ルラは鼻を押さえてのたち回り始めた。

その表情は恍惚に染まっており、変態を具現化したような感じになっている。

「どうしよ…。この子絶対危ない子だ…」

敵のことながら、少し心配だ。

「早々に撤収しましょうか…」

ぼたぼたと前髪から水を落としながら、シャオロンはまたも去ろうとする。

「うふ。うふふ。あー、お腹いっぱい！ …ごちそうさま」

「えっ!?!」

思わずナナギは目を丸くした。

それもそうだろう。

聞こえてきたその声は、先ほどまでの甘い声ではなく、色香を纏った大人びたもの。

驚いて振り返ったナナギの目に入ったのは…。

「誰、この人!?!」

「…ナナギ、もう早く帰りましょう」

「え、だってさっきの女の子と別人……」

切れ長の瞳。

ほっそりとした唇。

細身の身体。

そして、銀の髪の間からは大きな猫耳が生えていた。

「猫娘っ!」

「キヤットガールって呼んで？」

「は？ ナナギ何言ってる…」

いらいらと振り向いたシャオロンも、つい口を開けてしまう。

「ルラのご飯は、いい男なの」

につこりと笑ったルラの唇からは、白く輝く牙が覗いていた。

その瞬間、シャオロンはぐらりと傾き崩折れた。

変態を具現化（後書き）

こんにちは。

椎名です。

ルラが本性現しました。

シャオロン君は大丈夫なのでしょうか……。

感想いただけるとうれしいです。
では。

瑞夏

悲鳴時々謝罪の言葉

「え、うそっ！ シャオロン!?」

どざりと音を立てて地に伏したシャオロンに、ナナギは声を上げた。

「きゃふっ。効果バツグーン」

愛らしくルラが笑う。

ころころとしたその声色は、魅力的でひどく艶めかしい。

リイリアとはまた別の、違った色香にナナギはごくりと唾を飲み込んだ。

「シャオロンに、何したの？」

擦れた言葉に、迫力は微塵も感じられない。

それでも、これはナナギの精一杯の脅しだった。

「やつだあ、まさかただの水だとも思ってた？」

そう言つて、またルラは可笑しそうに笑う。

耳につくその甲高い声に、ナナギは顔をしかめた。

「ふふふう。大丈夫だよ？ 死んだりしないもん。目が覚めたら、

ルラの下僕になつてるだけ」

「だけ、つてそれ結構困る！」

拳を固めて猛然とナナギは抗議する。

「あはっ。あなたの事情なんて、関係ないもあんな」

「あるから！ シャオロン起こしてよ！」

「だーかーらあ、そのうち起きるつてばー」

「でも、その時はあなたの下僕になつてるんでしょ!？」

「んもうっ、煩いなー…」

引き下がるナナギに、ルラの表情が一変した。

ぞつとするほど冷たい視線をナナギに向ける。

背筋の凍るその瞳に、ナナギはヘタレ全開で、ひつと縮こまった。

「ルラ、女には興味ないしー。ウザイしー。邪魔だなー」

あからさまな嫌悪の表情に、ナナギは引きつる。

足元には、依然意識を失ったままのシャオロンがいるのだ。ルラの言葉が本当のことならば、目を覚まされても困るが。状況は圧倒的に不利。

「まあ？ あなたみたいないひよつ子ちゃん、ルラが相手する迄もないから？」

やたらと語尾を上げながらそう言って、ルラはぱちりと指を鳴らした。

ルラの姿が闇に掻き消える。

「ちよつと、待ちなさいよ！」

消えた方向に向かってナナギが叫ぶ。

もう一度、闇の奥から指の鳴る音がした。

どこからともなく聞こえてきた咆哮に、ナナギはぴたりと動きを止めると、礼儀正しく頭を下げた。

「ごめんなさい。待ってください」

「急がねえと！」

「分かってる！ シャオロンはともかく、ナナギはまだ戦い方も知らないのに……」

不安げにクシナが眉を寄せた。

万が一何かあったら、果たして対処できるのだろうか。

「……無理だろうな」

「ご名答。」

只今ナナギさん、ヘタレ発動中ですよ。

「あーもーっ！ 早く行くぞ！」

いらいらとチサヤが声を荒げ、歩速を速める。

「無事でいてくれよ……」

クシナが祈るように呟いた。

思った以上に、部屋は広がった。
走っても走っても端に辿り着くことはない。

これが吉なのか凶なのか、まだナナギには分からなかった。

魔物が現れた後、ナナギは迷わず戦略的撤退を選んだ。

もちろん、シャオロンを置いていくことは出来ず、抱えたまま、駆け出したのだ。

火事場の馬鹿力。

まさにそうとしか言い様のない、パワーだった。

ごくごく普通の少女が、一人の少年を抱えて走るの、常識的に難しい。

童顔だけど、シャオロンは立派な男だ。

「きゃーっ！ いやーっ！ ごめんなさーっ！」

それでも、ナナギは走っていた。

悲鳴時々謝罪の言葉を叫びながら。

ずるずると、シャオロンのズボンの裾が擦り切れていってるのは「愛嬌だ。」

「も……やだあっ……！」

悲鳴時々謝罪の言葉（後書き）

こんにちは。

椎名です。

・・・後書きすることがないですね。
なら書かなきゃいいなんて言わないでっ。

はい。

では、また。

感想いただけると嬉しいです。

瑞夏

かかってらっしゃい

「……装備屋に、行かなければいいのよね？」

小首を傾げて、リイーリアがレイを見た。

闇の色をした髪がふわりと揺れる。

「多分。でも……なんか嫌な予感がするんだよねー」

「まあ！ 予感だけで、わたくしに危険を侵せと仰るの!？」

レイの一言に、リイーリアは大袈裟なまでに声を上げた。

まあ、の部分でご丁寧にも、手を口に当てる。

どこぞの貴婦人よろしく驚くリイーリアに、レイは苦笑を浮かべた。

「危険を侵せとまでは言わないよ。ただ、少し様子見くらいしかないかな、と」

「それが危険と言うのよ！ もし何かあったらどうするっていうの？ シャオロンもないのに！」

「でも、僕達の目的は魔物退治だよね？」

ごもつともだ。

まさしく正論な意見に、リイーリアは言葉につまる。

しかも、柔らかな笑顔のオプション付きだ。

なんか、もう有無を言わせない感じがある。

「わ、分かったわよ。行くわよ、行けばいいのでしょうか？」

「分かってくれて嬉しいよ。さあ行こうか」

「…………… シャオロン探しも手伝うのよ？」

ふい、と顔を背けたリイーリアに、レイは今度は苦くもなく策略もない笑顔を浮かべる。

「仰せのままに。王女様」

「な……っ」

真っ赤になつたリイーリアに。

あ、リイーリアなら王女様じゃなくて女王様かな。

なんて、レイが思ったのは秘密だ。

「いぎやあつ!?!」

微妙に可愛くない悲鳴を上げて、ナナギは顔面から地面にダイブした。

ズツシャーッと、とてつもなく痛そうな摩擦音がして、ナナギは倒れる。

「つ……………」

「ひやおろんごめん…」

ついでに、未だ気を失ったままのシャオロンも、道連れに滑り込んだ。

……………。

「いひゃい…」

しばしの沈黙の後、ナナギはむくりと起き上がり、鼻をさする。

小さな鼻は赤くなり、なんだか痛々しい。

後ろの方からは、魔物の咆哮が轟いている。

びくり、とナナギの白いこめかみが動いた。

心なしか、頬も紅潮している。

「……………あーもーっ! 飽きた! 走るの飽きたっ!」

衝撃発言だ。

ナナギは声高にそう宣言すると、シャオロンから手を離れた。

ドサツとシャオロンが落ちる。

「う……………」

「分かったわよ。どーせ、埒あかないもんね」

妙に目が据わっていた。

しかも、呻いたシャオロンは無視だ。

徐々に近づいてくる叫び声を睨み付ける。

中指を曲げて、ナナギは不敵に笑った。

「全員まとめて、かかってらっしゃい」

……まともに戦ったことないくせに。
どこからか、そんな声が聞こえた気がした。

かかってらっしゃい（後書き）

こんにちは。

椎名です。

いよいよナナギちゃんが頑張りそうです！

はたして、ちゃんと戦えるのでしょうか？

では。

感想もらえると、うれしいです。

瑞夏

玻璃は水晶、水晶はクリスタル

「これ、どうやって使うのかな？」

首を捻ってナナギは悩む。

七色に光り輝く玻璃の扇は、見てる分には申し分なく美しさを発揮していた。

しかし、戦うとなるとその使用方法は謎に包まれている。

「こっつ？」

半信半疑に、ブンツと扇いでみる。

「……………いやー」

気休め程度に、ささやかに風が吹いた。

お世辞にも、これで魔物が吹っ飛ぶとは思えない。

「もしかして、こっつ？」

今度はバサリと振ってみた。

「……………うーん」

いや、これはないわ。

とナナギは肩を竦める。

「……………シャオロン〜！ これどうやって使うのか教えてよ〜っ！」

無茶な話だ。

気を失ったままのシャオロンの肩を掴み、ナナギは懇願する。

眉を下げた情けない表情に、先ほどの自信に満ち溢れたナナギの姿は見られない。

いつものヘタレ全開ナナギに逆戻りだ。

「ねえ、シャオロンってばーっ！」

もう一度ナナギがシャオロンを揺さ振った瞬間、大地が震えた。

さーっ、と全身から血の気が引いていった。

ナナギの顔色がみるみる青くなっていく。

「ちよっと待ってよー……………」

敵さん、お出ましのようです。

「ていつ!」

そよそよ。

「とつっ!」

そよそよそよ。

「やあっ!」

そよそよそよそよ。

「……………何これ!」

ぐだぐだ感溢れるナナギの攻撃に、魔物も戸惑ったように硬直している。

魔物が現れた瞬間、もしかして。

という一縷の望みをかけて扇を振るったナナギだったが、当然といつか残念ながらというか、結果は変わらなかった。

爽やかな風が巻き起こり、場を和ませた。

しかし、魔物とていつまでも待つてくれるつもりはないらしい。

「とつっ」

半泣きになったナナギと仲間を交互に見たあと、頷き合った。

「な、何目と目で通じ合ってたんのよおっ」

ナナギの声を合図に、躍り上がった。

手には色とりどりの鎌や斧。

おまけにごつくて不気味な形相をしている。

そして、魔物達の表情に色濃く浮き上がったものは…。

殺意。

「ひひひひひひっ!」

…死ぬ。

死ぬ。

死ぬうっ!

本格的に絶命を覚悟し、ナナギがきつく瞳を閉じたその時だった。

ピカリと、まばゆいばかりの閃光が辺りを包んだ。

「へ………?」

『もう、見てらんね! あんた、どうしてそんなに無知なんだ!』
その声は、耳というより頭に直接響いてくる。

「え。だ、誰……」

『今度の主人どんな方かと思えば、物知らずな小娘だし』
ぱ、と目を開けたナナギの視界に入ったのは……。

「……………」

年は…十を越すか越さないかだろうか。

まだその顔つきには幼さが色濃く残っている。

深紅と黒を基調とした、やたらとフリルの多い服。

頭には、これまたど派手なりボンがついている。

足元まである長い髪は、何色ともつかない、不思議な色合いで、華奢な身体を取り纏っている。

大きな吊り目がちの瞳は真珠を思わせ、小さな唇は摘みたての林檎さながらに赤く、瑞々しい。

肌は透き通るように白く、滑らかだ。

腕を組んだ仁王立ちも、何故か可憐に見えてしまうのは、美少女故の特権なのだろうか。

「ゴスロリ美少女……っ」

『誰がゴスロリだっ! …………… オレは神聖なる玻璃の扇の精霊だぞ?』

感嘆の声を上げたナナギに、ゴスロリ美少女はすかさず突っ込んだ。
美少女に対しての否定が見られないところを見ると、自分の容姿は理解しているらしい。

『全く、本当に……』

「そ、そんなことよりクリス!」

『は? クリス?』

ナナギの言葉に、ゴスロリ美少女は器用に片眉だけ上げた。

「ああ。気に入らなかった?」

『気に入るも何も、どういうことだ？』

「クリスはその扇の精なんでしょ？ 玻璃は水晶、水晶はクリスタル。だから縮めてクリス！」

自信満々にそう笑ったナナギに、ゴスロリ美少女はぽりぽりと白い額を掻いた。

『ん…まあ、悪くはないか……』

心なしか頬が赤い。

名前を付けてもらえて、まんざらでもないらしい。

「えへへ。でしょー？」

『そーだな…って、違う！ こんな世間話してる場合じゃない！』

へらりと笑んだナナギに、ゴスロリ美少女ことクリスも、つられて顔を緩めるがはっと我に返った。

「クリス、ノリツツコミも出来るんだ」

『まあな。って、だから呑気に話してる場合じゃねえよ！』

ぎろりとクリスは目を細めて正面を睨む。

その双眸に映っているのは、動きを止めた…魔物。

『…そろそろ限界だな。おい、小娘。…やるぞ』

玻璃は水晶、水晶はクリスタル（後書き）

こんにちは。

椎名です。

また新キャラ登場です。

なんかもう、登場人物多すぎですね・・・。

でも、主要キャラはこの子でラストですから！

では。

瑞夏

オレの全ては扇の主だ

『いいか。オレの言うとおりにしろ』

「う、うん！」

ゴスロリの美少女の凄味は、何だか微妙な迫力がある。

迫力に気圧され、ナナギは何度も頷いた。

『まったく、こんな小娘に何でオレが……』

「クリス！ 来た、来たよお！」

やがてゆっくりと動きだした魔物に、ナナギはパニックになる。

「ひいっ！」

『ちよ………』

「うわっ！」

クリスにしがみ付こうとして、ズシャーッ、とナナギは地面に滑り込んだ。

うつ伏せに倒れたナナギを、クリスが呆れたような目で見る。

『馬鹿か、お前』

「いたい……。クリス透けてたんだね……」

『当たり前だろ。オレは精霊だからな』

もう、今日はこけてばかり！

とナナギは憤慨するが、残念ながら全て自分のせいだ。

『いつまでも寝てんなよ。……来るぜ？』

嘲ったようなクリスの笑みに、ナナギは無言で起き上がる。

パンパンッと服についた土埃を払い落とし、ナナギは扇を構えた。

「準備オツケーです！」

ナナギの宣言と同時に、魔物の動きが早まった。

『念じる』

「はあ？」

突然の言葉足らずな命令に、思わずナナギは眉をひそめた。意味が分からない、そう言いたげな視線をクリスに送る。

「…オレが自分の意思で出来ることは、数少ないんだ。不本意ながら、オレの全ては扇の主に委ねられてる……」

何故か、そう説明するクリスは哀しげで、ぞっとする程綺麗だ。

「クリ……」

「だから、お前がしっかりとりにしてくれないと、どうしようもないんだよ」

『よ』
「わ、分かった」

こくり、とまた頷きナナギは拳を固める。

『そうだな』

呟き、クリスは値踏みをするように迫り来る魔物達を眺め回した。

『…雑魚か』

「え。雑魚？」

クリスの言葉に、ナナギは顔をしかめる。

『なんだよ、文句あるのか？ 小娘のくせに』

「……」

どう考えても、見た目はそっちの方が年下じゃん！

あえて言わないが。

『こんな雑魚共に大技決めてやる義理はない。小娘、目を閉じる』

「は、はい」

『扇をしっかりとって』

「こっつ？」

言われるままに、ナナギは目を閉じ扇をぎゅっと握り締めた。

『次が大事だ。イメージしろ。風が渦巻き、暴れる様を』

「風が渦………難しいね」

『あれだよ、台風。ハリケーン？』

クリスが指をくるくると回す。

「えと…えと…。あ、多分出来た！」

『んじゃ、最後。復唱しろよ?』
「らじゃ」

『あー、今日は略したの教えてやるよ。普段はこれで十分だ。しっかり覚えるよ? ……我、玻璃扇の主也。我の想いを汲み取り、示されよ……はい』

「えーっと……我、玻璃扇の、主……也。我の………想いを? 汲み取り……示され……」

『イメージ忘れんなよ!』
「……よ!」

ナナギの声が響き渡った。

『よし、扇を振れっ!』

「はいっ!」

思い切り扇を振り抜く。

先刻とは違い、身体中を風が吹き抜けるような感覚にナナギは襲われた。

ギユウンツ、と風が巻き起こる。

『目、開けていいぞ』

クリスの声にナナギがそつと目を開いた。

「……っ」

そして、息を呑む。

渦を巻き、風が辺りをおおっていた。

中心部にちらちらと見え隠れするのは、深紅の布で。気付けば傍にクリスはいない。

「う、そ………」

力が入らず、腰が抜けそうになる自分を叱咤しながら、ナナギは光景を目に焼き付ける。

迫ってきていた無数の魔物は、いつのまにか一匹もいなくなっていた。

『何ぼけっとしてんだ?』

しゅるしゅると、少しずつ力を失っていくつむじ風を惚けたように

眺めるナナギに、クリスが声を掛けた。

「え、あ……」

『ん？』

その声に、慌てて振り向いたナナギの瞳に映ったのは、前髪一つ乱さずに先ほどと全く変わらない様子で立っているクリスだった。

『なんだ』

「いや、今のあたしがやったの？」

ナナギの問いに、クリスは数秒黙った後ぶつと吹き出した。

『小娘、お前自分の力に驚いたのかよ』

「そ、そういうわけじゃないけど……」

『そーだよ、お前がやったんだ』

くすくすと笑いながら、クリスはナナギの頭を掻き回した。

「ひゃあつ。何すんのよ」

髪崩れるじゃない、と眉を上げるナナギを面白そうに見る。

『気に入った。お前に仕えてやるよ、小娘』

「あたしの名前は小娘じゃなくて、ナナギ」

『ただし、条件がある』

「無視ですかー？」

『オレを置いて、いなくなるな。これだけは、絶対守れよ、小娘』

ナナギの言うことを丸無視して、クリスは勝手に約束を取り付ける。

「分かったわよ。それは守るから、しっかり仕えなさいよ？ じ

ゃじゃ馬ちゃん」

先ほどの光景を皮肉ったつもりだったのだが、予想以上に効き目があつたらしい。

クリスはびくりとこめかみを動かし、眉をひそめた。

『オレ、男なんだけど……？』

「……ええっ!？」

オレの全ては扇の主に（後書き）

こんにちは。

椎名です。

ナナギちゃん頑張りますね〜。

クリスマスに言われながら頑張っています！

では。

感想いただけるとうれしいです。

瑞夏

ご主人様に負けられないように

『……………』

「ごめんってばー」

『……………』

「だってそんな格好してるんだもん」

「がくがくとクリスの肩を揺さぶりながら、ナナギは言い訳を口にする。

先ほどの女発言に、クリスは分かりやすく不機嫌だ。

『この服は、オレの趣味じゃない！』

「なら脱げばいいのに…」

『それが出来たら、とつくに脱いでる！』

「あわわ。そんな叫ばないでよ。頭痛い」

脳内に直接響いてくる声に、慣れはしたものの大きい声を出されると頭痛がする。

「誰が着せたのよ、それ」

ナナギの問いに、クリスが一瞬黙り込んだ。

不自然な沈黙に、ナナギは首をかしげる。

『……………前の、扇の持ち主のジジイだよ！』

「前の持ち主？」

『そっだよ。つたく、あいつ野郎じゃ和めないとか勝手言いやがって…』

忌々しく吐き捨てるが、表情は不思議と穏やかだ。

「仲良かったんだね」

昔を思い出し、それを愛でるような顔付きに、思わずナナギは溢す。

『はっ。まさか。こき使われてただけだ』

肩を竦めるクリスの頬に、ナナギは手を伸ばし触れた。

びくっ、と仰け反りかけたクリスを見て、笑う。

「あたしも、前のご主人さんに負けられないように、頑張らなきゃ」

目を細めて微笑むナナギを、クリスは眩しそうに見て、それからそっぽを向いた。

『ま、せいぜい頑張んな』

長い髪の間から覗く小さな耳が、ほんのり赤かったのは秘密だ。

そんなほのぼのした空気をぶち壊したのは、この部屋の持ち主だった。

「そろそろ、終わったかなあ？」

艶のある声で、幼稚な口調を使う少女の再登場に、ナナギは眉をひそめた。

「……来た」

『何がだ？』

「ボス、だよー……」
ボス？

とおうむ返しにクリスが呟いた瞬間、ボスことルラは現れた。

光を反射し輝く銀髪に、エメラルドの瞳。

リイリアとはまた別に、完璧なプロポーションを持つ彼女は、涼しげな笑みを浮かべている。

「ルラ、女の肉は好きじゃないんだけどねー」

この際我慢、と可愛らしく小首を傾げたルラに、クリスが訝しげな視線を送った。

『なんだ、この女』

「シャオロンを元に戻しなさいよー！」

「へっ？ え、ええっ！？ なんで生きてるの？」

ナナギの言葉に、ルラは猫目を見開き声を上げた。

『生きてちゃ悪いのか』

「うそ、嘘っ！ まさか、あいつら全部倒したの？」

クリスの声は聞こえないのか、ルラは続ける。

『無視しやがった…』

無然とした表情でクリスは言い、ルラを睨んだ。

「ていうか、ルラと戦うのかな…」

『ふん。こんな馬鹿女敵じゃないね』

「そういう問題じゃないのよ。あたし戦うの嫌いなんだってば…」

「あんだ、誰と話してるのよ!？」

ひっ、と顔をしかめながらルラは金切り声を上げる。

それを見て、ナナギは何か思いついたのか、ヒロインらしからぬ笑みを浮かべた。

黒いです。

未だかつてない黒オーラがナナギを取り巻いています。

「あら、見えてないの？」

「な、何がよ!？」

「わたくしの傍にはね…」

「い、いつやあああああ!!！」

何だかりーリアが乗り移ったようなナナギの口調に、ルラはすっかり騙されたのか、顔を強ばらせると耳の痛くなる絶叫を響かせた。
「…ふふ。怖かったら、シャオロンを戻して、それから町から出てお行きなさい」

「は、はいいいっ」

あっさり落ちました。

土下座をし出しそうな勢いでルラは腰を抜かすと、ぼろぼろと涙を落とした。

「ひっく、っく」

嗚咽をあげながら、ルラはシャオロンに近づくと額に触れた。

シュー…と音がして、煙が小さく上った。

「こっ、これでっ、もう大丈夫っひくっ」

「あ、ありがとう…」

涙でぐちゃぐちゃなルラに、さすがに罪悪感を感じたのか、ナナギは視線を逸らしながら曖昧に礼を言った。

「うええええん！」

それを聞くや否や、ルラは銀髪を振り乱し、ぱ、と消えてしまった。

『本当に、あいつボスなのか…？』

後に残ったのは、クリスの疑問だけだった。

ご主人様に負けないように（後書き）

こんにちは。

椎名です。

突然ですが、ここでちょっと重大発表です。

えっと、私事情によって明日から四日間ほど更新をお休みさせてもらいます。

もし、読んでくださってる方がいたら、本当にすみません。

一月五日に、次話を投稿しますので、その際にはまたぜひ読んでください。

では。

瑞夏

感動の再会

『なんだよ、あいつ』

「よ、良かったあ〜…」

拍子抜けしたように肩を竦めるクリスは、何故か物足りなさそうだ。その横でナナギは安堵のため息をつき、それからガクツとへたり込んだ。

一拍遅れて、茜色の髪が波を打つ。

『どうした？腰でも抜けたか』

目だけでナナギを見下ろしながら、クリスは笑った。

「当たり前…」

うるうる瞳を輝かせて、ナナギが何度も頷く。

その様子に、クリスは少し面食らったように瞬きを繰り返した。

『あ……………』

何か言い掛けて、口をつくむ。

『……………あのさ』

もう一度言い直そうとしたその声は、激しい爆発音にかき消された。

「ナナギ！」

「無事か!？」

「シャオロン〜ッ!」

「あ、いたね」

同時に、四つの叫び声も。

声に覚えのあるナナギはパアツと顔を輝かせると、暗くてどうせ見えぬのに手を大きく振った。

「無事だよー!ここにいてー!」

『お仲間さんか?』

「うんっ」

満面の笑みを浮かべて答えるナナギに、クリスはそうか、と小さく相槌を返す。

数秒もすると、次第に足音が近づいてきた。

「ナナギ！」

足音が止まると同時に、耳元で聞こえた声に、またナナギは顔を綻ばせる。

「クシナー！」

「なんだよ、ぴんぴんしてやんの」

「ちよつとチサヤ、それどういう意味よ！」

「そのままの意味」

しれつと言われて、ナナギは眉をひそめた。

懐かしい黄金の髪も、一瞬にして憎らしく思える。

「またそんなこと言う！」

「言われるほうが悪いんだよ」

「んな訳ないでしょー！」

お決まりの口論を始めた二人を余所に、隣でも感動の再会が果たされていった。

「シャオロン、シャオロン！ 大丈夫！？」

大声で名を呼ぶ主に、シャオロンの瞼がぴくりと動いた。

「ん……。リーリア様……？」

微かに漏れた声に、リーリアの瞳が潤む。

「シャオロン！ 気付いて？ 体は痛くなくって？ ああ、一体何が起きてたのかしら？ 説明なさい」

「リーリア、一個ずつ聞いたほうがいいよ」

一気に質問を並べ立てるリーリアの肩を、レイが苦笑しながら叩いた。

「大丈夫です、答えられますから」

その光景をぼんやり眺めながら、シャオロンがいつもの無表情で言う。

「リーリア様。気付きました。体は痛くはありません。少し怠いんですけど。何があったのかは、後でゆっくり説明するので、少し待って下さいね。それと、涙が落ちてますよ」

「…泣いてなどいなくってよ！」

ぐしゃぐしゃの泣き顔でそんなことを言われても、説得力がまるで感じられない。

そんなリーリアを眺めながら、シャオロンは何を思ったのか微笑を浮かべた。

「そうですね。それは、汁なんでしたっけ。得体の知れない」

「そ、そそそそうよ！ 何かいけないかしら！？」

半ば痾癢を起こしながら、リーリアは浮かんだ涙をこすった。

「馬鹿チビライオン！」

「黙れノーコン人參頭！」

「こら、チサヤもナナギもやめろ！」

ぎゃあぎゃああと傍で聞こえてきたわめき声に、レイは曖昧な笑みを浮かべる。

「クシナは大変そうだねー……」

「あー、ナナギ。良かったらチサヤと喧嘩する前に、状況説明をしてもらいたいんだが」

がしがしと頭を掻きながら、クシナがため息混じりにそう呟く。

すると、その言葉に我に返ったのか、ナナギはもう一度チサヤを睨むとにこやかに笑った。

「うん。分かった。あのね、すごいんだよ！ 見て見て！ 扇の精霊がね…」

所在なさげにたたずむクリスを指さし、ナナギは嬉しそうに顔を綻ばせる。

そんなナナギに、メンバーは不思議顔だ。

『ばーか。見えるわけないだろ』

「え？ そうなの？」

『当たり前だろ。まあ、お前の能力が上がれば話は別だがな』

「それって難しい？」

『さあな。人それぞれじゃねえのか？ ジジイは最初っから出来てたし』

遠い目をするクリスが見ているのは、目の前にいるナナギではなく、きつと過去ののだろうか。

それが何となく悔しくて、ナナギはむう、と眉をひそめた。

「なら、あたしもやってみるから教えてよ」

「お、おいナナギ。誰と話してるんだよ？」

おそろおそろ、という感じにクシナがナナギを覗き込んだ。

それを無視して、ナナギはクリスに詰め寄る。

『あー、分かった分かった。教えてやるから、好きにしな』

お手上げポーズのクリスはナナギから一方下がって、ため息をついた。

『簡単だよ。……やり方はな。オレの媒体に魔力を注ぎ込むんだ』

「媒体？」

『今は頭のリボンだよ』

とんとん、とクリスは頭上の派手なりボンを指す。

『注ぎ方は、自分で掴みな。教えてもらおうような、あまちゃんには出来っこないから』

その言い方に、むかつときた。

ナナギは挑戦的に片眉を上げるクリスを睨むように見ると、顎を上げた。

「見てなさい。見事にやつてのけるから」

言いながら、リボンをむんずと掴む。

クリスが顔をしかめたのは、無視の方向で。

「魔力を注げばいいのよね。よーし……」

きつく目を瞑り、空いた手で握りこぶしを作る。

魔力魔力魔力魔力……。

脳内でその二文字を思い描き、ナナギはイメージを膨らませた。

「いつけえっつ！」

感動の再会（後書き）

お久しぶりです。
椎名です。

予告どおり、帰って来れました。
良かったです。

ルラに勝ったので（？）セルフイオネ編終わり！
と言いたい所なのですが、もう何話が続いちゃったりします。
クリス君とメンバーの顔合わせですつ。

別にどきどきの展開とかはありませんが、ほのぼのと進められたら
いいな、なんて思っています。

では。

また明日。

瑞夏

元気をわけて

『……………で?』

「あ、あれ?」

威勢よくあげた掛け声に反し、目の前のクリスは白けた表情でナナギを見ている。

もちろん、姿は半透明のままだ。

「おかしいな…。出来たと思ったんだけどな!」

決まり悪げに頭を掻くナナギに、クリスは呆れ顔だ。

『ばーか。そんな簡単に出来るかよ』

「いや。ま、待って! ちょっともう一回…」

そう言つて、ナナギは再度クリスのリボンを握り締めた。

「てやーっ!」

「ナナギ…。少しいいですか?」

かれこれ十分は経つただろうか。

無駄に意気込んでは失敗して、クリスに馬鹿にされる、といったパターンを繰り返していたナナギに、シャオロンが控えめに声をかけた。

「なに?」

うつすら涙を浮かべナナギは振り返り、悔しそうに眉をひそめる。

横ではクリスが、ほら見るとでも言うつようにナナギを見下ろしていた。

「一体何がしたいのかは分かりかねますが、魔力を受け渡したいのでしたら、こうするのですよ」

ゆっくりとシャオロンは立ち上がり、ナナギの手に自分の手を重ねた。

「あ、待つて待つて！ 教えてもらつちや駄目なの！」

先ほどのクリスの言葉を思い出し、ナナギは首を振つて拒む。

そんなナナギに首をかしげながら、シャオロンは薄く微笑を作った。「では、私がナナギに魔力を送つてみますから、感覚を掴んで下さい」

ナナギはクリスに確認をとるように目をやる。

『そのくらい、いーんじゃないの？』

「じゃあシャオロン、お願いしていい？」

「承知しました」

シャオロンはナナギに手を重ねたまま、軽く目を閉じた。

すると、数秒もしないうちに重ねた手が光りだし、やがて熱を帯び始める。

「わ、わわ…」

どくん。

と、何かが体のなかに流れ込んでくるような不思議な感覚に、ナナギは思わず手に力を込めた。

まるで血液が逆流しているみたいだ。

でも、何故か力が満ちてくる。

心地よい。

「と、まあこんなものですね」

「ふあ…」

シャオロンは早口にそう言つと、またいつもの無表情で離れた。

『どうだよ？ コツは掴めたのか？』

クリスの声に、ナナギはまだふわふわとした意識を必死で呼び起こし、彼に近づいた。

無言でクリスのリボンに手を置き、瞳を睫毛の奥に隠す。

よく分かんないけど。

魔力の譲渡つて、つまりは元気をわけてあげるって事だよね？

だから、相手を思いやつて…。

それで…。

考えを巡らせるうちに、段々と手のひらが温かくなるのをナナギは感じた。

『いい感じじゃん』

クリスが柔らかく呟く。

その声に小さく頷きながら、ナナギは神経を集中させた。

目を閉じているのに、目の前に光球が見える気がする。

……………行け…っ！

元気をわけて（後書き）

こんにちは。

椎名です。

もうすぐ冬休みが終わっちゃいます〜・・・。

宿題ピンチのくせに、ちゃっかり更新しちゃいました。

学校始まって、しっかり更新できるように頑張りますね。

では。

感想とかもらえると、嬉しいです。

瑞夏

またの名を

不思議な色合いの長い髪は、実体化すると透けるように薄い水色だと分かった。生意気に吊り上がった大きな瞳は、不機嫌な気持ちを表している。

「へえー。女みたいな奴だな」

じろじろと遠慮なくクリスを眺めながら、チサヤが感心したように呟いた。

「オレは正真正銘男だよ！ 勘違いすんな、ばーか」

「な…っ」

その言葉に苛立ちを隠せず、クリスは細い眉をひそめた。

「この子が、その扇の精霊なのね？」

そう言つて、リーリアは長い髪を掻き上げた。

視線の先には、忘れ去られたように地面に転がされている扇がある。

「うん。そうみたいー」

慌てて扇を拾いながら、ナナギはそれをぎゅっと握り締めた。

「クリスがいなかったら、あたしもシャオロンも多分ここにいなかったんだよ。だから、感謝しなきゃだねー」

「…使いこなせたナナギも凄いいんじゃないですか？」

興味なさげにシャオロンが言う。

彼はクリスが実体化した姿にも特に興味はないらしく、先程までまだ鼻を嚙っていたリーリアを宥めていた。

宥めていたというよりも、毒舌で追い打ちをかけていただけのような気がするが。

「そういえば。この扇貰っていいのかな」

「さあ。どうなんだろう。カウンターに代金を置いていくか」

答えながら、クシナはきよるきよるとレジを探す。

だが、それらしいものは見当たらず、ただどこまでも薄暗い空間が広がるばかりだ。

「置いていっても、出ていけって言ったから、ルラ帰ってこないよ、多分」

「そうか…」

泣きながら去っていきましたからね。

自分は魔物のくせに、お化けは怖いんでしょうか？

「どうするかな」

困ったようにため息をつくクシナに、レイはにこりと笑った。

「代金は、また会ったときに渡せばいいよ。会わなかったら、縁が無かったって事で。なんだったら、他の商品もそうしようか」

「レイ、それって……」

「またの名を、万引きとも言うね」
いい笑顔です。

清々しいほど爽やかな笑顔で、仮にも勇者である彼が絶対口にしてはいけないことを、レイはあっさりと言ってるのける。

「でも、そうするしかないと思いますよ？」

ここでシャオロンもレイに同調してきた。

これは手強い。

「だ、駄目だ。勇者が法に触れるなんて…」

「ルラは私達（主にナナギ）を殺すつもりだったんですよ。これは立派な殺人未遂です。だから、むしろこれは慰謝料の代わりなんですよ」

「そう考えるのが妥当だね」

「だ、だが…」

「クシナは何ですか？ 犯罪者を庇うのですか？」

「そういうつもりじゃ…」

口籠もるクシナの隣で、レイが手を叩いた。

「じゃあ、決まりだね。さ、とつとと宿屋に戻ろうよ。町の人にも教えてあげなきゃ」

「いなくなつた人達、みんな戻つてるといいね」

大丈夫かな、と心配そうに呟いたナナギに、リーリアは笑った。

「戻ってるはずよ。今この町にはわたくしとシャオロンの魔力しか感じられないもの。支配する力が消えれば、自然と呪は解けるわ」

いつになくまともな事を言うリイーリアに、ナナギは目を丸くする。

「：リイーリアさん、ちゃんとしたことも言えたんだー」

「え？」

「だな、俺も少し感心した」

「あらあら？」

「ふーん。ま、確かに役にはたったな」

「ちよつと？」

「すごいよ、リイーリア」

「あの？」

「伊達に数百年生きた年増だけありますね」

「年増!？」

当たり前のことを言っただけなのに、皆手放してリイーリアを褒め称える。

「お前の評価、どれだけ低いんだよ……」

ぼつりと溢したクリスの言葉は、的確にリイーリアの急所を突いていた。

お礼の品々

「ふうー。お布団気持ちいい」

敷かれたばかりの布団にダイブして、ナナギは頬を緩ませた。

あの後、ルラの巣窟から町へと帰った七人を待っていたのは、町人達からの熱烈な感謝だった。

行方不明になっていた人は、皆無事に戻ってきたらしく、涙を流して喜ばれた。

「これ、何かしら」

卓上に並べ立てられたお礼の品々を物色していたリイーリアが、その中の一つを摘み、言った。

「…」

残念ながら、返答は返ってこない。

昼寝をしていたリイーリアとは違って、他の人はそれなりに働いていたのだ。

質問に答えてあげる気力はなかった。

しかし、それで引き下がるようなリイーリアではない。

「ねえっ、シャオロン！ 答えなさい！」

ぐったりと寝転んでいるシャオロンに、はた迷惑にも詰め寄り、例の物を突き出す。

たぶん、と液体が波打つような音がした。

「…あー、林檎じゃないんですかー…？」

「見もしないで何を言うの！ ていうか、林檎くらいならわたくしでも分かってよ！」

「そうでしたか。林檎と石ころの判断もつかないかと思っていました」

「シャオロン!？」

顔も上げずに答えたシャオロンにリーリアは甲高い声を上げた。どうやらリラックス時間を妨げられた怒りは、思いの外深いらしい。いつも三割増しほど、毒が強い気がする。

疲れている他の人も、助け船を出すことなく二人のやり取りを聞いている。

「ちよつと！ シャオロン！ 聞いていて!？」

「年増の五月蠅さは耳につきますね。少し黙っていて下さい。もしくは樹海で肝試ししてきて下さい」

「死ねること!？」

「違いますよ。一年程飲まず食わずで彷徨っていてほしいだけです」

「それを死ぬと言うのよっ！」

鬱陶しげに、しかも静かに言うシャオロンに、リーリアは余計に声を荒げる。

「はあ…。喧しい方ですねえ。どれですか？」

喧しくさせたのはシャオロンのだが、彼は悪怯れることなく言い、目線だけリーリアに向けた。

深いため息のおまけ付きで。

見るや否や、ああと小さく頷く。

「酒、というものですよ。魔界ではあまり見られませんからね」

「さ、け？」

「酒っ!？」

「ええ。アルコールの入った飲み物です。貴女とうに成人しているのだから、飲んでみたらどうです？」

不思議そうに目を丸くするリーリアの後方には、まだまだたくさん酒が置かれている。

ちなみに嬉しそうな声を上げたのはクリスだ。

どうやら見た目はともかく実年齢はけっこういつているらしい。

七人で飲んでも一晩なら、優に楽しめる量だ。

「酒……」

二三度首を傾げた後、リーリアは妖艶に唇を曲げた。

「決めたわ。皆でこれを飲みましょう！」

「嫌ですよ。寝てたい……」

「ちなみに、反対意見は認めなくてよ」

酒は飲んでも呑まれるな

桜の間。

セルフィオネの宿屋の中で、一番いい部屋とされている。

今日の客は、魔物を町から追い返してくれた勇者様ご一行だ。

始めは何ランクか下の部屋を貸していたのだが、感謝の意を込め、この部屋に移ってもらった。

さて、そんな桜の間に入って万人が、現在最初に思うであろうことはただひとつ…。

酒臭い。

これに尽きる。

つい数時間前は、本当にいるのかと疑いたくなるほど、怖いくらい静かだったこの部屋なのに、きんとした女の声が響くと共に、そこは宴会場と化した。

それでは少し、中の様子を見てみようと思う。

「きゃっはっはっ！クシナ真っ赤っ赤なの〜っ！」

けたたましい笑い声をあげ、クシナを指差すのは今日大活躍のナナギ。

そう言う自分も真っ赤である。

「うっうっ。どうせ俺はトマト顔だよー…っく」

指差された我らがリーダークシナ。

どうやら泣き上戸のようだ。

先ほどから飲んでは誰に言うでもなく、ぶちぶちと一人愚痴を言っている。

まあ、気苦労多そうですね。

「ひやはははは。まものがなんら！ おりゃあゆっしやさまだぞう

っ！」

呂律の上手く回ってないのはチサヤで、酒瓶を振り回して暴れている。

この人は酒乱の気があるようだ。

「……………」

無言で空になったグラスに酒を注いでシャオロンは、一気に飲み干す。

しかもそれ、アルコール度数25のブランデーなんですけど…。

無言なところが余計に怖い。

据わった目は何故か畳を睨み付けている。

リイーリアの宣言で酒を飲み始めて早数時間。

貰った酒が強いものばかりだったせいもあるのだろうが、吞まれないのは最早クリスとレイだけだ。

「ジジイに付き合つてがばがば飲んでたからな。多少は強いぜ？」

そう言いながら瓶ごと酒を煽るゴスロリの美少女。

何だか力オスな感じがする。

でも、確かに本人が言うとおり白い顔には、朱ひとつ見られず言動もはつきりしている。

「へえ。僕は初めて飲んだんだ。けっこう美味しいね」

「…初めてでこれかよ。未恐ろしいガキだな」

「見た目はクリスの方が年下だよ」

にこっ、と笑ってみせるレイにクリスは苦笑を浮かべた。

万引き発言といい、今の状態といい、レイ最強説がクリスの中で確立しつつある。

「何でもいいが、初めてなら加減はしろよ？ 明日が怖いぜ」

ふ・っ・か・よ・い、と一文字一文字区切りながら言つて、クリスはまた酒を含んだ。

さらさらと揺れる髪は妖艶で、幼いということを差し引いても、十分に色を感じる。

まあ、外見こんなでも中身男ですからね。

「どうせ皆そうなるでしょ？ なら構わないよ」

「まあーな。出発は延期だな」

けらけらと陽気に声を上げるクリス。

強いとはいえ、やはりテンションは上がっているらしい。

「ていうか、言い出しっぺの年増が最初に潰れるってどうなんだ」

年増ことリイリアは、最初の一杯で吞まれ、二杯で壊れ、三杯目で酔いつぶれた。

弱いにも程がある。

他のメンバーは、吞まれてはいるが一応まだ意識はあるのに。

「年増つて、それリイリアのこと？」

「ん？ ああ、名前覚えるの面倒臭いからな。イメージで呼ぶことにしてんだ」

「ふーん。他の人はどんなの？」

興味が湧いたらしく、レイはクリスの顔を覗き込んだ。

「そうだな。…小娘、ガキ、苦勞人、毒舌男、つてところだな」

言いながら、それぞれを指差す。

「僕は？」

「お前は……」

尋ねられて、クリスはレイをちらりと見た。

それから、口角を上げる。

「魔王だな」

クリスの言葉に、レイは少し目を丸くして二三度瞬いたのちに、ふわりと笑んだ。

「なにそれー？」

「イメージだよ、イメージ。さ、まだいけるんだろ？ ほら飲むぞ

ー！」

夜は長い。

明日の頭痛を考えると眉が下がるが、まだ飲み足りない。

そっと頷きながら、クリスはまた酒を注ぐ。

『酒は飲んでも吞まれるな？ ばーか。吞まれるほど飲まなきゃ漢

じゃねえな！ おら、お前もまだ飲め！』

ずっと昔を思い出しながら、クリスはまた喉を動かした。

…うっかり口癖、引き継いちゃったな。

酒は飲んでも呑まれるな（後書き）

こんにちは。

椎名です。

えっと、今回の話でセルフイオネ編完結でございます！
さて、次の話はどんなのにするか……。
行き当たりばったりなので、まったく考えてませんよ。

では、また明日。

瑞夏

ゆーれーじょー

「あう。まだ頭痛い…」

こめかみを押さえながら呟いたナナギに、隣のチサヤも頷く。

「つーか、俺記憶ねえんだけど」

「あたしも…」

どよーん、と暗雲立ちこめる表情で二人は同時にため息をついた。覚えてはいないが、なんかいやな予感がする。

そんな感じだ。

「俺、朝起きたら目が真っ赤に腫れてたんだけどなんでだろう？」
悩ましげに首をかしげるクシナ。

泣いたからです。

それは泣いたからです。

「クリスとレイはぴんぴんしてるよね」

「ん？ はっ。お前とオレを一緒にするな」

ナナギの言葉ににやりとするクリス。

どうやら本当に強いらしく、次の朝も元気いっぱいだった。

見た目子供なのに…。

むう、と眉をひそめたナナギの思いを汲み取ったのか、クリスは鼻を鳴らした。

「オレは生憎、お前みたく頭の中までガキじゃないんでな」

「まで…って、それじゃあたしが見た目も頭もお子様みたいじゃないの！」

「違っつけ？」

「もっつ！」

失礼しちゃう、と頬を膨らませてナナギは憤慨する。

それを可笑しそうに眺めながら、クリスは横を歩くレイに言葉を投げた。

「おい、次はどこに行くんだ？」

「さあ？　そういう事はクシナに聞いたほうがいいと思うよ」
「そうか」

にっこりと首をかしげたレイにサンキュ、と片手を上げクリスは後ろを振り向く。

「クシナ！　次の目的地どこだ？」

クリスの声に、まだ悩んでいたクシナが顔を上げた。

「え？　あー…」

まだ決めかねていなかったのか、クシナは二三度考え込むように頭を捻り、それから少し笑った。

「この先に、幽霊城があるって聞いたことあるんだ。周辺を通る人が不気味がつてるから、様子見でもどうだ？」

「「ゆーれーじょー…」」

何故か、二つの声が重なる。

「ん？」

「く、クシナ…その幽霊城って…」

「本当に幽霊出んのか？」

「多分。何人が襲われたりもしてるらしい」

クシナの言葉に、ナナギとチサヤの顔が分かりやすく青ざめていく。

「ちっ、ちなみにどういうお城…だったりするの？」

「詳しくは知らないが、昔栄えていた王族の城らしい。だが、ある時家臣の裏切りにあったらしくな、しかもそいつが少しいかれた野郎で、王、女王、姫、そしてその姫と愛し合っていた町の男を残酷に殺したらしい」

「へえ。町の男？」

興味があるのか、クリスはクシナの傍に近寄った。

「ああ。こっそりとだな。丁度その日も逢瀬の約束をしていて、城に姫を迎えに来ていたらしい。それで…」

表情を曇らせ、クシナは苦しそうに瞳を伏せる。

人情に厚い彼だ。

話しているうちに感情移入してしまったのだろう。

「ど、どうしても行かなきゃ駄目？」

ナナギが控えめに口を挟んだ。

体どころか、茜色の髪の手先まで震えている。
よっぽど苦手らしい。

「な、なんだよナナギ。お前怖いのか？」

「チサヤこそ、顔っ青いよ？」

「こ、これは元からだ！」

そんなわけないだろうよ。

青人なんて聞いたことない。

苦しい言い訳を並べ立てながらも、チサヤはやっぱり青ざめている。

「…んじゃ、ま幽霊城に行くとしますか？」

クリスの宣言に、二人が猛反発したのは言うまでもない。

ゆーねーじょー（後書き）

こんにちは。

椎名です。

今話から新章突入！（？）

（幽霊城編）となっております。

前回はほとんどナナギ以外活躍できなかったもので、今回はオールキヤストでいこうと思います！

では。

瑞夏

怖くないっ！ 怖くないからな！

おどろおどろしい暗雲がかつた三角屋根。

元は城だったと予測される壁は、灰色で埃や蜘蛛の巣が一面に見られる。

頭上にはぎゃーす、と非常に可愛くない鳴き声を上げるのは、これまた薄汚れた鳥と……何だろう。
選別不可能な奇妙な鳥だ。

そう、ホラーポイントを忠実に押さえたこの建物こそ、今回の目的地。

「すごいな。お化け屋敷みたいだ」

「ひいひいっ」

「怖くないっ！ 怖くないからな！」

「懐かしい感じですね、リーリア様」

「わたくしの家はもっと趣味が良くてよ」

「おおっ！ わくわくするな」

「すごいね。まがまがしい……」

各々好き勝手感想を言いながら、一步また一步と城に近づいて……。

「やだあっ！ あたしここで待ってる！」

「お、俺は別に怖いわけじゃねえけど、ナナギ一人残すのは心配だから、一緒に残っててやる！」

……いくのはこの二人以外。

ナナギとチサヤは、がたがたと震えながら縮こまっている。

なんかもう、情けなさ爆発ですね。

「何言ってるんだ。ここに残ってても、出るときは出るんだから、一緒にいた方が心強いだろ？」

な？

と優しく声をかけて手を差し伸べるクシナに、ナナギの瞳が潤む。

「うっ……」

おそろおそろも、その手を掴むナナギの横で、裏切り者！とチサヤが喚いている。

「チサヤ……」

困ったように眉を下げるクシナに、クリスが小さくため息をついた。こつそりと目配せをして、口を開く。

「ほら、ガキもびびってないでさっさと行くぞ！」

「ガキってなんだよ、ゴスロリめ」

「見たまんまだよ、ばーか」

「あだ名ですか？　ぴつたりだと思えますよ」

「そうか。ちなみにお前は毒舌男だ」

「まあ。シャオロンにぴつたりだわ！」

「……リイリア様？」

「……ごめんなさい」

「僕魔王だったよ？」

いきなり騒がしくなってきた。

悪態をつきながら、つかつかと歩き始めたクリスに、チサヤが顔をしかめたままついていく。

ぎゃあぎゃあと言い返すことに気を取られているのか、先ほどまで拒んでいたことも忘れていようだ。

「鳥頭め」

「あ？　何か言ったか！」

「……何でもねーよ」

「その訳知り顔が鼻に付くんだよ！」

「そりゃあ、すみませんねえ」

ひよいと肩を竦めてみせるクリスに、チサヤは更に苛立ちを募らせる。

この二人はどうも反りが合わないらしい。

「うつつ。クシナ〜レイ〜シャオロン〜…服掴んでてもいい〜？」

「はいはい」

「いいよ」

「どうぞ、ご勝手に」

「だっ、駄目よ！ シャオロンはわたくしの傍についてなさい！」
ナナギの頼みを受けるシャオロンに、リーリアが慌てたように声をあげた。

「はあ？ いい年して何を仰っているんですか」

「口答えなんて生意気よ！ シャオロンは黙って傍にいればいいの
！」

「年増のツンデレは可愛くないですよ。見苦しい」

「んまあっ！」

「し、シャオロン。いいよ、リーリアさんについてあげなよ…」
半泣きで唇を噛むリーリアを見兼ねたように、ナナギは苦笑を浮かべた。

「そうですか。気を遣わせてしまってすみません」

「ううん、気にしないで。よく考えたらシャオロンはリーリアさんの付き人だしね」

「全くの不本意ながら」

「シャオロンっ！」

おいおい、と口を挟み掛けるクシナの耳に、前方から

「ちくしょうオカマ野郎め！」

「…ぎゃんぎゃん吠えるのは弱い証拠だぞ？」

「俺は犬じゃねえっ！」

そんな会話が聞こえてきて、彼は頭を抱える。

また胃痛が増えそうだ。

ぎゃーす、と可愛くない鳴き声にかき消される程小さい声で、クシナは呟く。

「何でこんなやつばっかなんだろ…」

ヘタレ同盟

ぎぎぎ…と立て付け悪く、戸は音を立ててゆっくりと開いた。ちなみにベルはありがちな、悪趣味なブロンズの悪魔の顔のようなものだった。

「は、離しちゃ駄目だからね！」

そう言つて、ナナギは隣に立つ人物の手をぎゅうつ、と握り締めた。「分かつてる！ お、お前に頼まれたから繋いでるんだからな！

俺は別に平気なんだからな！」

結局、ナナギはクシナ達の服を掴むのではなくチサヤと手を握ることになった。

クシナはリーダーとして一番前を歩かし、逆にレイは最後に行くことになっていたので、まあ妥当な方法だろう。

「埃臭くて嫌だわ。掃除はしているのかしら」

「してるわけじゃないでしょう。ここ、幽霊城ですよ？」

まあ不潔、とあからさまに嫌悪を示すリイリアに、シャオロンは何か言いたげに口を開けるが、そのままつぶむ。

騒がれてもうざいな、みたいなニュアンスが漂っている。

と、不意に後方で今しがた聞いたばかりの鉄がこすれるような音がした。

「ひいやああっ！」

「…っ！？」

思い切り叫ぶナナギと、小さく息を呑むチサヤに、クシナは苦笑を浮かべた。

「落ち着け。戸が閉まったただけだ。風でも吹いたんだろっ」

「…あ。ドアもう開かないや。閉じ込められたみたいだね」

妙に冷静なレイの声に、空気が凍った。

さー、と分かりやすいくらいにナナギの顔から血の気が引いていく。

「やー…っ！ むぐぐ」

「またも叫び声を上げようとして、その口を隣のチサヤに押さえられた。」

「不満そうにチサヤを睨むナナギに、口角を上げる。」

「別に原因潰すまでは帰る気なかつたんだし、どっちでも変わんねえだろ？」

「余裕な態度がむかつく。」

「何急に落ち着いてるのよ……。さっきまでヘタレ同盟だったくせに！」

「パーティにヘタレは一人で結構。あいにく俺はお前とは違うんで」

「ふーん。とか言つて、手は握つたままだけどね」

「な……。これはお前が！」

顔を真っ赤にして反論するも、繋いだ手は離そうとしない。

「残念ながら、強気なのは口だけらしい。」

「はいはい。そこまでにしとけ。先進むぞ」

「はい」

「分かつてるよ」

クシナの一言に、ぴたりと口論を止めると二人は口を揃えて頷いた。先頭からクシナ、シャオロン、リイーリア、チサヤ、ナナギ、クリス、レイの順で七人はずらずらと連なつて歩き始める。

クシナとレイはルラの店から頂戴した燭台を手にし、行く道を照らしている。

薄ぼんやりとした橙の灯りは、足元だけを忠実に照らしていた。

「皆、ぶつからないように気を付けるよ」

「大丈夫大丈夫……。ぶつ！」

ぶつ、という声に重なるようにゴンツ、と痛そうな音がある。言わんこつちやない。

浅くため息をついてクシナが様子見に行こうとするが、それよりもほんの少し早くチサヤがレイから燭台を受け取ってナナギを覗き込んだ。

「ぼやあつ、と光がナナギの顔を照らす。」

「大丈夫かよ？」

「つう…」

うつすら涙を浮かべながら、ナナギは顔を上げチサヤを見た。

「痛い…」

「だろうな。何やってんだか」

転けた拍子に離れた手をもう一度差出し、チサヤは呆れたように笑う。

躊躇いなくその手を掴み立ち上がると、ナナギはもう片方の手でぶつけた額をさすった。

「何にぶつかったんだよ？」

「確かここら辺の…」

ナナギの視線の先に燭台を向け、チサヤは目を細める。

「…これ、かな？」

指差す先には、壁から出っ張った銀の棒。

埃を被ったランプが先頭に付いている。

「電気か…？」

首をかしげて呟くチサヤに、ナナギはさあ？、と肩を竦めた。

直後、短く声を上げる。

「どうした？ もう行くぞ」

「あ…うん。別にたいしたことないから」

チサヤに促される様にして足を運ぶ。

その瞳は、何故か憂いを微かに帯びていた。

へタレ同盟（後書き）

こんにちは。

椎名です。

いきなりですが、すみません！

更新遅れてしまいました・・・。

冬休みが終わってしまったので、前ほどこまめに更新できないかも
しれません・・・。

でも、愛想を尽かさずに読んでくださったらな〜、と思います。

多分遅くても三日に一回は更新できると思います！

では。

瑞夏

願ったのは再会

薄汚れた床が一度波を打つ。

思わずその衝撃にふらつきながら、一同は目を丸くした。

床は一瞬動きを止めたのち、今度は沸騰した湯のようにぼこぼここと泡立つかのごとく、うねる。

「な、な、な、なんなの!？」

「わ、分からない! と、とりあえず気を付ける!」

無意識にチサヤの手を掴む力を強めながら、ナナギは尻餅を付く。

当たり前のように巻き添えをくらったチサヤが、不満そうに眉をひそめた。

「魔物かしら?」

「恐らく。もしくはトラップの一種かと」

「どつちにしても、平和的じゃねーな」

平静を保ったまま会話をするのは、翼もしくは浮遊の力を持つ三人だ。

床から離れているのだから、大地が揺れようが捻ろうが全く関係ない。

リーリアに至っては、呑気に欠伸などしながら下界の様子を見ている。

「ずるいつ! クリス! あたしも助けてよー!」

「それは無理な話ってやつだな。オレよりスリムになってから出直して来るんだな」

「ムカーツ! ちょっと! それどーゆう意味よ!」

「言葉のまんま」

ふふん、と華奢な肢体を見せ付けるように腕組みするクリスに、ナナギは声にならない怒りを露にする。

脅しを含んだ瞳で睨むも、いかんせん尻餅を付いたままなので迫力がない。

「ふ、ふんだ。男のくせにゴスロリが似合うなんて、ちっとも自慢にならないんだからね」

「好きでゴスロリ着てんじゃねーよ!」

ナナギの苦し紛れの言葉に、クリスは予想外にも声を荒げてきた。気にしていたらしい。

クリスの態度に強気になったナナギは揺れる床からどうにか腰を離し、悠然と仁王立ちをした。

「やっぱ男は男らしくなくなっちゃ。フリフリのスカート着て喜んでるようじゃ、まだまだ…」

「そこまでにしてくれるか？ ナナギ、クリス」

「…クシナ」

割って入ったクシナに、ナナギは若干不平を漏らしかけるが、そうもいかなくなったようだ。

次の瞬間動いていた床が色を変え、そして球を形取って跳ねた。球が生まれては宙に浮かぶ。

七個程出来ただろうか。

息を呑んで展開を待つ七人の目の前で、それは形をまた変えた。

ぐにやぐにやと、まるで粘土を捏ねるように歪み伸びして、少しずつ完成に近づいていく。

「これ……」

ナナギが小さく零した。

他の人も、声こそ出さないものの、目を見開く。

バサリ、と翼のはためく音が止まり、飛んでいた三人が地に落ちた。ナナギとチサヤの手が離れる。

いつのまにか球は、意味を持たない粘土玉から、それぞれの見覚えのある物になっていた。

せつかく立ち上がったのに、ナナギはまた座り込む。

力なく首を振り、逃げるように目を閉じ、それでももう一度開く。背けたくても、背けられない。

何度も願ったのは再会ではなく、忘却。

見たくなかった。

会いたくなかった。

忘れてしまいたかった。

胸をよぎるたびに、渦巻くのは絶望と罪悪だけだから。

「父さん、母さん……」

震える声で、ナナギは呟いた。

俺が今許可する

永遠とも呼べる長い沈黙を最初に破ったのは、轟いた爆発音だった。弾けるような響きと共に、茶色い飛沫が散る。

「進まなきや」

小さくてもよく通る声でレイが言った。

先ほどの爆発も彼の魔法だろう。

右手に杖を掲げ、薄く微笑む。

しかし体は震え、目尻が淡く光っている。

恐らく、行動を起こすのにはかなりの葛藤があったのだろう。

「行こう?」

その言葉に、一人また一人と頷いて前を見据えていった。

「すまない。レイ、皆の分も頼んでいいか?」

目を伏せたまま、クシナが呟く。

自分以外の粘土がどうなったのかは分からない。

ただの球のままに見えた。

だからか、レイは迷いなく杖を向けて一つ一つ破壊していく。

その表情に、自らの粘土を爆発させた時のような強ばりは見られない。

「終わったよ」

そう言ったときには、確かに一つ残らず消え去っていた。

「んじゃ、ま行きますか」

「ええ。ご苦労だったわ、レイ」

「リーリア様、お手を」

「驚いたな...」

「さつさともう行こうぜ...。ナナギ...?」

もう一度手を差し出しかけて、チサヤが目を丸くした。

それから、今度はそれを見開く。

二三度瞬いたのちに、チサヤは小さく息を付くとクシナの耳に顔を

寄せた。

「悪い。すぐ追い付くから、先行つてくれるか？」

チサヤの頼みに、訝しげに首を傾げたクシナだったが、幼なじみと
いうこともあって、信頼はしているのだろう。

軽く頷くと、持ち前のリーダーシップを存分に発揮して残るメンバ
ーを促した。

「どーしたんだよ」

五人の足音が微かにも聞こえなくなると、チサヤはしゃがみこみナ
ナギと視線を合わせた。

儼然とした表情ではあるが、それが不器用故であることくらい分か
っていた。

それでもナナギは語るうとはしない。

床に手を付き、少し前屈みに正座をしている。

今にも崩れそうに不安定ではあるが、決して揺らぐことはない。

代わりに、その瞳は雫を浮かべ光っていた。

「言いたくなきゃ言いたくないでいいけどさ。そのままであいつら
に顔合わせるとか言わねえよな」

「チサヤ：チサヤは何が見えた？」

「は？」

予想とは違った反応に、チサヤは眉を上げた。

「あー、んー……。…魔物」

「魔物？」

「ちょっとしたトラウマってやつだよ。だっせえの。未だ引きぎ
ずってんだよな」

「ださくなんかない！」

突然、ナナギが声を荒げた。

その剣幕に、一瞬チサヤは怯む。

それを見て、慌てたようにナナギは口をつぐんでまた黙り込んだ。ナナギを訝しげに眺めながらも、チサヤは続けた。

「別にそんな深刻な話じゃねえんだよ。昔好きになったやつが、魔物でしかもおっさんだったってだけ。…それだけなんだよ」

嘘。

ほとんど直感的にナナギは感じたが、口には出さない。

口出したところで、否定されるのが関の山だろう。

「ほんと、くだらねえだろ？ 少なくとも、お前に比べたら」

黙っているナナギの茜の髪を、困ったような苦笑を浮かべてチサヤは一房掬った。

何をするでもなく、ただその柔らかな感触を確かめるように触れている。

そんな仕草が余計に胸に来た。

「くだらなくなんかないもん…。人の思い出にくだらないことなんて一個もないもん…」

俯いたまま呟けば、重力に耐え切れなくなった雫が零れ落ちた。

「見たくなかった…」

懇願するように言葉を紡ぐ。

チサヤも一転、表情を引き締めた。

「会いたかったよ。これは本当だよ。だけど、だけど…まだ今は会いたくなかったの」

「うん」

「まだ駄目なの。まだ吹っ切れてない。悪者になりきれない…。心のどこかでまだ期待してる、あたしだけが悪かったんじゃないなんて思ってる！ あたしは泣いちゃダメな人なのに…泣きたくなるもつと一緒にいたかったなんて思っちゃう！」

その言葉に、チサヤはナナギの顔を掴んで正面を向かせた。

しっかりと顔を合わせる。

「馬鹿！ 泣くのは自由なんだよ！ 誰に何言われたか知んねえけどさ、指図されてんじゃねえよ」

「でも…っ」

「でももへつたくれもあるか！ よし、分かった。なら俺が今許可する。お前は泣いてよし！ ほら、泣け！」

無茶苦茶すぎる。

理由も知らないくせに…。

内心唇を噛み締めようとするが、それよりも安堵の思いの方が少し大きかった。

次第に視界が歪み、唇が震える。

濡れていく頬に、自分がどんな顔をしているか想像できて、情けなくなる。

落ちた雫は、乾いた床に吸い込まれた。

「…お前の過去は知らねえよ。無理に聞き出そうなんて思ってねえ。でもよ、そーだな。たまにならまた肩貸してやる。だから…、泣きたくなったら俺に言え。泣くななんて言わねえからよ」

照れているのか、がしがしと髪を掻き毟る音がする。

それに密かに笑みを零しながらナナギは口を動かした。

「ねえ、チサヤ？」

不思議と声は、ぶれることも嗚咽が交じることもなくあった。

それに自分で驚きながら、ナナギは続ける。

「なんだよ」

「また。手、繋いでてくれる？」

「じゃあねえなあ。」

そう言うかのようにチサヤは肩を竦めた。

「別にお前のためじゃ、ないからな」

微妙にツンデシな台詞を吐きながら、チサヤはそっとナナギの手を包み込んだ。

俺が今許可する（後書き）

こんにちは。

なんか、うわ〜！な展開でした。

キーワードに恋愛と入れておきながら、少しも甘い会話とかがなかったのたまには、と思いつく歯が浮く思いで書きました。

ナナギを慰めるのは当初シャオロン君だったんですけど、なんかチサヤがでしゃばってきました。

ツンデレのくせに…！

はい。

しょうもない後書きでしたね。
では。

瑞夏

じゃあ、目指すは

「やっと追い付いたか。ほら、危ないからそんなに急ぐな」

ばたばたと響いてきた二つの足音に向かつて、クシナは優しく声をかけた。

別に理由を聞くつもりもないし、そんな必要はないだろう。

だんだん近づいてくるナナギの表情は明るい。

先ほどのナナギの様子は誰から見ても明らかにおかしかった。

チサヤが名乗り出なかつたら、他の誰かが行っただろう。

そう信用できるという意味では、このパーティーはなかなかの物だとクシナは密かに自負している。

「んで？ さつきからとにかく進んでるけど、何かあてでもあるのか？」

一人頷くクシナに不審そうな視線を向けながら、クリスがかつたるそうに言った。

細い腕は頭の後ろで組まれている。

「ああ。いや、確信はないんだがどうも最上階が外から見た時怪しかったんだ」

「怪しい？」

クシナの返答に、今度はレイが首をかしげた。

「それはわたくしも思ってたよ。変だわ、あんな高い所に鳥が飛んでいるなんて」

ぼむ、と手を叩いて同調したリーリアの言葉に、一同は苦汁を飲んだような顔をした。

シャオロンに至っては、何言っただこの年増は、みたいな顔をしている。

「何仰っているんですか、これだから年は、取りたくないですね」
訂正。

シャオロンはもっと厳しかった。

微妙に言い得ているところが、余計にぐさりとくる。案の定、リーリアは切れ長の瞳を潤ませ始めた。

「いいですか？ リーリア様。これを御覧下さい」

先ほどよりも随分と優しい声音でシャオロンは語り掛けると、リーリアを覗き込んだ。

手にはどこから取り出したのか、空を飛ぶ鳥と地面を歩く鳥の描かれた紙を持っている。

「なによ？」

「いいですか。鳥は本来空を舞う生物なのですよ。飛べないのはペンギンや鶏など、ごくごく一部の種別なんです」

「……ええっ!？」

シャオロンの丁寧な説明に驚きおののくりーリア。

その瞳には、驚愕の二文字がはつきりと浮かんでいる。

「し、知らなかったの？」

ナナギがリーリアを覗き込んでそう言った。

「ま、ま、ま、まさか!このわたくしが知らないはずはないでしょう!」

「知らなかったんだな」

「お、お黙りっ!」

クリスの言葉に分かりやすく動揺して、リーリアは声を張り上げ首を振る。

「知らないことは恥ずかしいことではありませんよ」

「シャオロン! そう言われると虚しさが増すわ!」

「存じております」

「まさかの確信犯!？」

「いえ。どちらかと言えば快樂犯ですね」

「んまあっ! 人を玩具にしないでちょうだい!」

「おや、違っただんですか」

「シャオロンッ!」

コントみたいな口論を繰り広げる二人に、クシナはため息をつき、

それからもう一度口を開いた。

「二人共それくらいにしてくれ。俺が言いたかったのは……」

「オーラがまがまがしかった、ってことだろ？そーだな、確かにあれは妖しかった」

クシナの言いたいことを先読み、クリスは続ける。

漢字違いの妖しいに、皆は少し首をかしげた。

「要するに、だ。ボスがいるとしたら、そこが可能性高いって言うてんの」

「そうなんだ」

「じゃあ、目指すは最上階なんだな！」

「よし。そうと決まったのなら、さあレッツゴーよ！」

泣いていたはずのリーリアの声高な宣言と共に、一同は歩速を速めた。

じゃあ、目指すは（後書き）

こんにちは。

このお話昨日投稿するつもりだったんですけど、ちょっと諸事情がありました…。

このごろリーリアが確実に初めよりも、幼児化しつつある気がしてなりません。

それに比例するようにシャオロンも、口が悪くなってるような…。

では。

感想とかもらえたらうれしいです。

瑞夏

引き際と自分の力量

「なんか、音がしないか？」

歩くのを再開して、少し経った頃クシナがふと足を止めた。

釣られて後続の皆も立ち止まる。

「言われてみれば……」

「ん。微かだがするな」

「な、何の音がしてるの!？」

同調するシャオロンとクリスに、ナナギは小さく首をかしげた。

幽霊じゃありませんように幽霊じゃありませんように……。

心の声が見事にただ漏れた。

クリスにもそれが伝わったのか、彼はにやりと口角を上げる。

「さあーな？ ゾンビかな、ミイラかな？」

「ひいひいっ!!!!」

まだクリスの予測の段階だというのに、ナナギは顔を思い切り引きつらせた。

またそれを面白そうに眺めながら、クリスは声を上げる。

「ゴスロリ、ナナギからかうのやめるよな」

「お？ なんだ正義の味方気取りか？」

「ちっげえよ！ 俺の手が痣だらけになるっつってんだ!」

確かに、ナナギが怯える度に繋いでいる手にめいっばい力を込めていた。

だからと言って、所詮はナナギの力だ。

痛いとは思ってもさすがに痣までは出来ないだろう。

明らかな嘘に、クリスは目を細めた。

「ほー。…だとよ？ ナナギ」

「う」

クリスの問いかけに、ナナギが決まり悪げに苦笑した。

それから隣のチサヤを見上げる。

「…離れた方がいい？」

子犬のように縋るような瞳に、チサヤが少したじろぐ。

「べっ、別にもういい！」

ちくしょーゴスロリ、覚えてやがれ！

口パクで悪態をついてから、チサヤはふんつとそっぽを向いた。

「…緊張感の欠けらもないな」

ぼそつとクシナが呟く。

仰る通り。

「こんなのでいいのか？」

クシナはぶつぶつ悩んだ後、まあいいかと気を取り直した。

徐々にこのお気楽メンバーに懐柔されつつある。

唯一の常識人である彼まで変人になってしまったら、果たしてこのパーティーはどうなってしまうのだろうか…？

「よし。俺が様子を見てくるから、みんなはここで待っていてくれ」

そんな一抹の不安を残しながらも、クシナはリーダーらしくそう言っつて、皆の顔を見回した。

「一人で大丈夫かしら？」

ふとリイリアは心配そうに声を上げる。

「大丈夫だよ。これでも、一応冒険者一家だからね」

「そーそ。引き際と自分の力量は心得てんだよ」

安心させるように笑ったクシナの言葉にチサヤが続け、二人は顔を合わせてまた笑った。

「そう？　なら…気を付けてね」

「リイリア様にしては珍しく、気の利いたことをおっしゃいますね」

控えめに手を振ったリイリアに、シャオロンが目を丸くする。

一体シャオロンの中でリイリアはどういう存在なのだろうか。

「まあっ！　シャオロンはまたそんな事言っつて！」

「事実ですから」

まさに悪びれないの図。

憤慨するリイーリアにシャオロンは飄々と言つてのけ、形のよい唇を三日月にした。

「あ……。じゃあチサヤ」

「なに？」

「行つてくるけど、何か怪しいものがあつたら戻つてくるからそれまで動くなよ。あと、五分……いや三分経つても俺が帰つてこなかったら、こつちに来てくれるか？」

「はいはい。オーケーオーケー」

言わなくても分かつてる、とばかりにチサヤは両手を顔の前で振つた。

「そうか。じゃあ、また後で」

「気を付けてねーっ！」

ナナギの声に押されるように、クシナは身を翻して闇に消えていった。

たった百八十秒

「…っ！」

踵を返し、角を曲がった瞬間クシナは自分の甘さを呪った。
駄目だ。

そう思ったときにはもう遅くて、クシナは観念したように振り返ることをやめた。

刹那後ろにあったはずの角、すなわち壁がぐにやりと歪み、とおせんぼするかのごとく後ろを阻んだ。

逃げ道はない。

助けも呼べない。

遠くから微かに響きだした咆哮に、クシナは覚悟を決めた。

それなら…。

「やるしかない」

三分、三分持ち堪えればナナギ達が来てくれるだろう。

壁の異変にも気付き、どうにかしてくれるはずだ。

たった百八十秒。

されどたった一人の百八十秒。

クシナは大剣の柄を固く握り締めると、目前まで迫る魔物に向かって大きく振りかぶった。

数は、到底数えられる程ではないが優に五十は超えているだろう。

それらはナナギが懸念した通りの姿形をしていて、もし彼女が此処にいたら、違わず絶叫しただろうとクシナはひそかに思った。

そのグロテスクさは、見慣れい者としてはやはりかなり辛いものがある。

片目が飛び出て、腐敗した腕で器用に武器を操るゾンビらしきもの。

黄ばんだ古い包帯で体をがんにがらめにされたミイラ男は、包帯の隙間から濁った瞳が覗いている。

骸骨もいれば、甲冑男もいる。

下手なお化け屋敷よりもよっぽど怖い。

本当にナナギがいなくてよかったと僅かに安堵して、クシナは今度こそ表情を引き締める。

気付けばその魔物達は目の前にいた。

振り落とされる武器は剣だろうか。

いなすようにしてかわし、伸びた腕の間から大剣で切り付ける。

ゾンビが倒れるその間に、誰がどんな武器を持っているかを確認する。

ゾンビが剣、ミイラ男が棍棒、甲冑男は勿論剣、骸骨は…自分の骨らしき物を振り回している。

飛び道具はない、とひとまず安心してからクシナは二番手、懐に飛び込んできたミイラ男の棍棒を力任せに払い落としてそのままの勢いで大剣をふるった。

一度切り捨てれば、あっさりと消滅してくれる。

一人一人の実力はそこまで高くないようだ。

そう高を括ったのがいけなかった。

クシナの迷いのない剣捌きに、魔物達は一瞬怯んだようだったが同時に今度は、五匹程がかたまって襲い掛かってきた。

「っ!?!」

嘘だろ!

その言葉は金属音に掻き消された。

耳に痛いその音と共に、クシナは半歩下がる。

一番近いものから、確実に。

弾いては突き、避けては裂き。

日頃の鍛練のおかげか、どうにか五匹共倒すことが出来た。

「よ、良かった…」

ため息をついたのもつかの間、クシナは目を見張った。

膝をついて何もかも投げ出してしまいたくなる。躍り出てきたのは、十匹の魔物だった。

思わず愕然としてしまい、慌てて剣を構え直す。諦めるな、まだ。

自分を奮い立たせて、しっかりと魔物を見据える。

一匹、剣を跳ねとばした。二匹、棍棒は避けた。

三匹、カ一杯刃を叩きつけた。

ああ、腕が痛い。

畜生魔物め。

無駄に頑丈な皮膚しやがって。

四匹、剣を喉に突き付けた。

五匹、危ない剣が当たりそうだった。

六匹、切っ先が頬を掠めた。

鋭い痛みが走り、生暖かい雫が肌を撫でた。

七匹目を相手にする前に、クシナは顔を歪めた。

空間に魔法も掛かっているのかもしれない。

体力の消耗が激しい。

たった三分が、こんなに長いなんて。

疲れを吐息に変えて吐き出して、クシナは瞬いた。

同時に、何かが振り上げられる音。

やばい。

本能的に感じる。

無意識に飛びずさるうとして、クシナはがくりと腰から落ちた。

力が…入らない。

見上げれば、スローモーションに銀の輝きを放つ刃が自分目かけて降ってきている。

腕も足もびくともしない。

クシナは眉をひそめ、刃を見つめた。

死ぬ。

これまでだ。

どうせなら、一発で決めてくれ。
後に引かない方が嬉しい。

なんとも不毛なことを考えながら、クシナは唇を引き結ぶ。
全てを覚悟し、目を固く閉じた。

「穢れた存在よ。清き紅蓮に燃え尽くされる」
静かな呟きが聞こえた。

目蓋の裏が明るくなり、真横を熱風が通り過ぎていく。
そっと、クシナはしばみ色の瞳を覗かせた。
笑みが零れる。

目の前にいるであろう彼らに何と言おうか？
信じてた。

そう口にするには、まだ日が浅すぎるだろう。
でも、

「少し期待してた」
これくらいなら、いいんじゃないか？

自覚があたりですか？

烈火が辺りを包み込み、一瞬にして目の前の魔物が消し飛んだ。

「大丈夫？ 一応きっかり三分だったんだけど」

炎の創者であるレイは軽やかに銀髪を揺らして、首をかしげた。

右手には細身のロッド。

華奢で簡素なそれは、今しがた熱炎を発したとは思えないほど冷たく光っている。

「あーあー、無様にしりもちついちゃって」

悪態をつきながらも、チサヤはクシナに手を差し出した。

走って来てくれたらしい。

額にはうっすらと汗が浮かび、ナナギと繋いでいたはずの手も離れている。

「好きでついたんじゃない」

返しながらチサヤの手を借り、クシナは立ち上がった。

軽く服に着いた埃を払って、もう一度大剣を構え直す。

まだ終わっていないのだ。

レイの魔法で倒したのは、クシナの前にいた数匹だけだ。

後ろにはまだ控えがいる。

「皆、手伝ってくれるか？」

数分後、夥しい数いたはずの魔物は跡形もなく消え去っていた。

一人ではあれ程でこずったというのに…。

レイとリイリアの魔法、チサヤの銃を後援にしたクシナ、シャオロンの前衛は、見事なものだった。

特に元から戦闘スキルが高く、実戦経験も豊富なシャオロンのサポ
ートはまさに圧巻そのもので、的確な補助にクシナは安心して剣を

ふるうことが出来た。

状況判断もそつなくこなし、それを元にメンバーへの指示を仰ぐ。片親の魔物は、よほど戦闘に優れた種族だったのかもしれない。

「さすがだな、シャオロン。とても助かったよ」

「いえ。クシナの戦闘センスが良かったおかげで、かなり捗りました」

「そんなことない。シャオロンは強いんだな」

ストレートな誉め言葉に、シャオロンは微かに顔を赤くしてはにかんだ。

あまり誉められたことがなかったのだろう。

珍しく感情を顕にしたシャオロンに、隣で乱れた髪を整えていたりイーリアが驚いたように言った。

「まあっ！ シャオロンが照れるなんて百年ぶりくらいに見たわ。

いつも仏頂面で、本当喜怒哀楽がないのよ」

「なくて結構です。あまり表情を変えていると、皺が出来ますから」

「なんですって!?! ちよっとシャオロン！ わたくしはまだ皺なんかはなくてよ!」

「…誰もイーリア様の事などとは申ししていませんよ。自覚がおりですか?」

「なっ、ないわよ!」

ふうん、と意味ありげに頷いてシャオロンは会話をやめた。

悔しそうにイーリアは地団駄を踏みかけ、そついえば、と声音を変えた。

「ナナギとクリスはどこにいて？ 見当たらないけど…」

「ああ、待機」

「待機?」

間髪入れずに返ってきた答えに、イーリアはまた首をかしげる。

「あいつお化け苦手だって言ってただろ。嫌な予感してたから」

「そう。気が利くのね。確かにこれ見たら卒倒しかねないわ」

ふんわりと破顔してイーリアはチサヤを覗き込んだ。

「…別に。倒れられたらこっちが迷惑だし」
リーリアの視線から逃れるように、不自然に体をよじらせてチサ
ヤはそっぽを向いた。
儼然とした表情にほのかに朱が走っているのは、阿呆な年増とは言
えど絶世の美女に微笑まれたからなのか、それとも別の理由からな
のかは定かではない。

乙女の欠片

「終わったー…？ えっ、ひゃっなになに！？」

角を曲がると同時に誰かの手で視界を覆われ、ナナギは声を上げた。焦ってその手を引き剥がそうとするが、思いの外力が強くどうにもならない。

「ぎゃあああつ！ クリスウツ！ クリスウツ！」

「馬鹿。俺だよ俺！」

慌てふためいてクリスの名を連呼するナナギの頭をもう片方の手で叩いて、チサヤは名乗った。

途端、ナナギはびたりと抵抗をやめる。

「え？ チサヤ？」

「そ」

「な、何してるの？」

理解不能な突然の行動に、ナナギは目を塞がれたまま首を傾げた。

「あー、見ないほうがいいと思うけど…」

「なにそれ、どういう意味」

「うわ。こりやすげーな。消滅追いついてないじゃん」

と、ナナギの後ろからひよっこり顔を出したクリスがさも楽しげに言った。

本当に怖くないらしい。

クリスの言葉に、ナナギはまたも硬直する。

「クリス。もしかしてそこにいるのって…」

恐る恐る聞いてみる。

「あ？ 見るも無残なお化…」

「ぎゃあああああつ！」

案の定というか何というか、ナナギは全く可愛らしくない叫び声を上げた。

せめて、『いやーっ』とか『きゃーっ』ぐらいにしときましようよ。

乙女の欠片もないです。

一通り叫び終わると、ナナギは自分の目を押さえているチサヤの手を掴んだ。

「っ!?!」

「ちよつとチサヤ! お願いだから離れないでっ!」

「はい」

お願いと言っよりかは、命令と言ったほうが正しい剣幕でナナギはまくし立てる。

「…って、いつまでこのままでいるつもりだよ!」

「うっつ。だつてー」

「いい加減覚悟決めろつて。腕が痺れんだよ」

「あ、あとちよつと! ていうか、ならなんで最初に隠したのよ」

「あれはいきなり見たらびびると思つて…!」

「ごによごによとチサヤは呟く。

「どうやら、深い意味はなかったらしい。」

「…良ければ私の背中でもお貸ししましょうか?」

「へ?」

「見たくないなら、背中に顔を押しつけて下さつて構いませんが?」
「シャオロンの申し出に、ナナギは顔を綻ばせた。

「本当!?!」

「ええ」

「ありがとう! シャオロン!」

明るく言つと、ナナギは目を閉じたままシャオロンの背中に飛び付いた。

「どうやら翼はしまっているようで、人間の背中と変わりはない。」「ちよつとシャオロン、わたくしにはそんな親切なことなくてよ。」「リーリアが横で不服そうに声を漏らす。

それに対し、シャオロンは黒そうな笑みを浮かべた。

「あーあー、毒舌攻撃のフラグ立つちゃいましたよ。」

「それは申し訳ありません。しかし、貴女が弱い女性らしく怯え

てる姿は記憶にないのですが…？」

「んまあっ！ それはわたくしが図太いと言うの！？ 大体怯えたことくらいあつてよ！」

「まさか。怯えていても、保護欲をそそられないだけです」

「シャオロンくっ！」

ぎゃあぎゃあとお決まりの口論を始めた二人に、周りのメンバーはまたかとはかりに肩を竦めた。

「…なんだよ」

そんななか、チサヤは一人慄然とした表情で小さく溢し、少し頬を膨らませた。

「っーかさー、ナナギが目閉じてりゃいいって何で気付かないかなー」

クリスの尤もな呟きに気づいた者は、残念ながらこのパーティーにはいなかった。

まるで世界の真理のように

ひと悶着はあったものの、何だかんだで無事に角を越えることができたナナギご一行。

いつ魔物が出てくるかとシャオロンの背中に引っ付いていたナナギだったが、さすがにいつまでもこのままじゃいけないと思ったのか、礼を言っただけ離れた。

「クリス、もうちょっとこっち来なよ」

しかしやっぱり怖いらしい。

へらへらと情けない笑みを浮かべて、ナナギは猫なで声でクリスを呼ぶ。

「はあ？ 面倒くさいんだけど」

「そう言わずに」

「ったく、なんでオレが」

突っぱねるクリスだったが、何となくナナギには甘いのか肩を竦めて隣にやってきた。

「これだから女は面倒臭いんだよ」

「…クリスも見た目は可愛い女の子だよ」

「ほお？ オレにそんなこと言うのか」

クリスのぼやきに間髪入れずにつっこんだナナギに、彼はにやりとした。

直後、軽やかに長髪を靡かせてナナギの傍から離れていく。

「ああ」

慌てて伸ばした手も虚しく空を掴んだ。

「ごめんなさい！ 失言でした！ お願いだから戻ってきてクリス
っ！」

「…クリスう？」

「クリス様！」

訝しげな口調に、様を付け加えてナナギはクリスを呼び直した。

ふふん、とクリスは小さな唇を三日月に曲げて満足そうに笑う。

「仕方ねーなー」

肩を竦めると、細い足を優美に動かしナナギに寄り添った。

「次はねーからな？」

その言葉にナナギが何度も頭を揺らすのを見て、クリスはまたもにやにやと笑ったのだった。

「この…ドアだよな」

「多分」

確認するように呟いたクシナに、隣のチサヤが欠伸を噛み殺しながら答えた。

長い睫毛に縁取られた瞳の端には、拭いきれなかった涙が浮かんでいる。

相当に眠いらしい。

その後は別段変わったこともなく、魔物にも遭遇もしなかったため七人はただ頂上を目指し、薄暗い城内を徘徊して回っていた。

「…チサヤ。まあいいか。皆準備はいいか？」

チサヤを嗜めるように言ってから、振り返ったクシナは頬を引きつらせた。

それもそのはず。

振り返った先にいたのは、未知の部屋に踏み込むことに不安と緊張を覚える仲間ではなく、呑気にへらへらしている仲間だったからだ。

「お前ら緊張感を何処に落としてきたんだ…」

悲痛に呻いたクシナに、隣のチサヤはまた欠伸を返す。

「落とすも何も、ナナギには元から備わってねえよ。そんな大それたもん」

「…ちよつとチサヤ！ それどつという意味よ！」

突然悪口を振られたナナギは、一拍遅れて応戦する。

予想通りの反応に、チサヤはにやりとした。

「そのままの意味だよ。平和ボケした頭には伝わらなかったか？」

「失礼ね！ そんなの分かってるわよ！ 何よこのヘタレチビ！」

「へ、ヘタレはお前も同じだろ！」

いつものようにぎゃあぎゃああと口論を始めた二人に、クシナはまたも深くため息をつく。

「…チサヤもシャオロンに似てきたのではなくて？」

「何処がですか」

「突然嫌味を言ってくる場所に決まってるじゃない」

「……………ほっ」

まるで世界の真理のように言い放ったリーリアに、シャオロンは冷やかな笑みを浮かべた。

「そうですね。お言葉ですがリーリア様、私は突然皮肉を述べたりは致しませんよ？」

「まあ！ 思い切り述べてるわよ」

「いいえ、まさか。私は高尚で気高いはずの主が、低俗でみすばらしく思えたときに初めて、口になっているつもりですが」

「低俗でみすばらしく思えずぎよ！」

「私もそう思います。最早高尚のこの字も貴女から感じられません」
もうひとつのお約束口論が、勃発しそうだった。

まるで世界の真理のように(後書き)

お久しぶりです！

テスト終わりました！

前触れなく更新ストップさせちゃったんですけど、また再開しますよ。

なるべく多く書けるように頑張りますね。

感想とかいただけたらうれしいです。
では。

瑞夏

プリンセスルーム！

バアンツ！

重厚そうな見た目の割に、意外とあっさりドアは開いた。

かなりの力が必要だと思い込んで、クシナが力一杯押したおかげでドアは激しく音を立てる。

「ぜ、全然重くないな…」

拍子抜けしたようなクシナの呟きに、またも緊張感が削がれる。

「よし、んじゃ入るとしますか」

「そうだね」

「だーからー、目玉焼きには醤油だつてば」

「いや、塩が一番だ」

「リイリア様、目から汁出てますよ」

「…うっ、ぐすっ。出てなくてよ…っ」

何故か目玉焼きの論議に発展したヘタレペアと、何時も通り目から汁を垂れ流すリイリア。

相変わらずどたばた騒がしく、パーティは進む。

そして

「塩なんて淡白だよ」

「そこがいいんじゃないか…」

チサヤの声を遮るように小さく音がして、見かけ倒しなドアが閉まった。

「ふわあ…綺麗な部屋だね」

きらきらと瞳を輝かせてナナギは惚けたように言った。

豪華なシャンデリア。

ベロアのカーテン。

天蓋付きのお姫様ベッド。

これぞまさにプリンセスルーム！

とばかりに飾り立てられた部屋は、女の子ならば誰でも目を光らせる程にゴージャスだった。

「確かに、綺麗ではあるけど……」

いつの間にか泣き止んだリイリアがぼつり、溢す。

躊躇ったように視線を彷徨わせて続けた。

「……何だか息苦しいわ」

深く息を吸い込むリイリアは、どこことなく顔色も悪い。

「そうですね」

「えらく辛気臭い空気だなー」

ふんふんと部屋を物色していたクリスマスも、肯定の意を示す。

「うん。嫌なオーラだよな」

「……でさあ、何をどうすんだよ」

若干話がずれ気味になったことに焦れたのか、レイの言葉に被せるようにチサヤが言った。

部屋に入れば何かしら展開があると思っただらしい。

肩をすくめてチサヤは意味なく部屋を歩き回る。

「ねえクシナ」

同じようにうろちよろしていたナナギが、ふと足を止めて尋ねた。

「お姫様って、剣とか部屋に飾るもの？」

「剣？ 何かあったのか？」

「いやね、何か所々壁とか床に剣が落ちてるなーって」

ナナギの言葉に、クシナは辺りを見回す。

言う通り、部屋の至るところに物騒にも鋭く光る剣が飾られている。年頃のお姫様が置くには、いささか不穏すぎるインテリアだ。

「何か意味あるのかなー……」

興味本意に、ナナギはひよいと手を伸ばす。

それを見たクリスが、顔をしかめて声をあげた。

「ば……っ。不用意に触るな……！」

「…え？」

時すでに遅し。

クリスの静止を命ずる声に首を傾げたナナギの小さな手の平は、微かに銀の剣に触れていた。

「っ…っ」

瞬間、ナナギは指先に痺れるような強い痛みを感じ、慌てて手を引っ込めた。

じくじくと痛む指先からは、一筋の赤い線。

その傷に驚く間もなく、次の異変が起こる。

触れた剣が何かに引き寄せられるように小さく震えると、勢いをつけて天井に向かって跳ね上がった。

「ひゃああっ！」

何が起きているのか飲み込めず、思わずその場にへたり込んでしまふナナギ。

そのまま、剣先から発せられる光に縫い止められたように硬直した。嫌な予感がする。

意志を持ったように動きだした危険物が取る行動といえば、映画や本ではお馴染みだろう。

「ナナギっ！」

クシナの声がした。

「いいいいいっ…!!」

相も変わらずまた訳の分からない、全く可愛くない悲鳴を上げて、ナナギは尻餅をついたまま青くなった。

どうしようどうしようどうしよう。

その五文字だけが頭を音速で駆け巡り、ナナギは目を固く塞いだ。さよなら皆さん。

ナナギが心の中で主人公らしからぬ諦めの速さで別れの挨拶を呟いたその時、

「目開けてる馬鹿ナナギ！」

チサヤの声がした。

乙女ちつくです。

チサヤの声に吊られるようにして目を開けたナナギの視界に広がったのは、さらりと揺れる黄金の髪だった。

切羽詰まった状況に反して、優美に流れるその髪に、思わずナナギもぼんやりしてしまう。

黄金と言うよりは太陽みたいな色だな。

ふとそんなことを考えていたナナギがその髪の持ち主がチサヤだと理解したのは、一拍遅れてからだった。

そしてそれから更にもう一拍遅れて、鼻先を撥る柔らかな髪の毛の感触から、チサヤが覆い被さるように自分を抱き締めているのだと気付く。

「え、ええっ!? チサヤ!？」

驚きよりも幾分か困惑のほうが強い声音でナナギは叫んだ。

「黙って腕にでもしがみ付いてる!」

有無を言わさぬ口調でチサヤは言い放つ。

混乱気味のナナギは言われるがままに、自分の体の前で交差している腕を掴んだ。

それと同時に、チサヤが立ち上がり走りだしたのだろう。

「うわああっ!」

ナナギは抱っこちゃん人形よろしくチサヤにくっついたままその場を離れた。

ドスッ。

直後、鈍い音がして絨毯が裂ける。

勿論床には剣が深々と刺さっている。

そこはまさに今までナナギがいた場所から寸分の狂いもない位置だ。ほんの一瞬でもチサヤの動きが遅かったなら、あの絨毯のようになっっていたのだろう。

「……………」

タッチの差での回避に、一同は思わず息を呑む。

クリスに至っては元から白い顔を蒼白にして、両手を血の気が失せるくらいに握り締めていた。

「あ、ありがと……」

「……おう」

呆然と呟いたナナギに、チサヤもまだ緊張が抜け切らないのか、小さく頷いた。

固まること数秒。

ナナギははっとした。

「こ、この体勢は……！」

よく考えてみれば、腕に抱きついたままだし抱き締められたままだ。もしこれが少女マンガならば、多分点描の一つや二つ付いていてもおかしくない。

そんな恥ずかしい体勢だった。

意識した途端急に羞恥が襲ってきた。

ぐわあーっと顔を真っ赤にさせて、ナナギは俯く。

「……チサヤ」

「なんだよ？」

「どうやらチサヤはまだ気付いていないらしい。」

口にするのも少し恥ずかしかったが、いつまでもこの体勢でいることの方が少し上だったので、ナナギはぼそぼそと言った。

「あの、そろそろ離してもらっていい？」

「へ？……！！」

言うが早いかチサヤも顔を赤くさせ、光の速さにも劣らぬ程のスピードでナナギから離れた。

「……」

「……」

中途半端に距離の開いた二人の間に、何とも言えない微妙な空気が

流れる。

ナナギも可愛らしく頬を染めたりなんかしちゃって、珍しく乙女チックです。

「…何この少女マンガ的展開」

その初々オーラを中断させたのは、クリスだった。

周りのメンバーが安堵のため息をつく。

ちょっと見ていられなかったらしい。

すっかり顔に血の氣を戻らせたクリスが、いつものけろりとした態度でその魅惑(?)のスペースに歩み寄る。

二人の間に流れる空気を、その華奢な体を持って断ち切ると、にやり笑った。

「青春するのでもいいけどな。お二人さん、周りをよく見てごらん」
「周り？」

こてん、と首をかしげてナナギが辺りを見回す。

同じように目を丸くして見渡したメンバーは、同時に顔を引きつらせた。

「どうやら、トラップはあれ一つじゃねーようだな」

言葉の通り、部屋中の物騒な物は重力引力その他諸々を無視して、天井に集結していた。

お年頃ですから

四方八方を剣に囲まれたナナギ達。
まさに絶体絶命。

その数は優に三十を超えていて、到底避けてかわせる数ではない。

「面倒くせーなー」

舌打ちしながらクリスが眉をひそめた。

その様子に焦りは見られない。

見た目は可愛い少女でも、かなりの時を生きてきた彼だ。

越えた修羅場の数も相当なものなだろう。

「どうするの〜っ？ こんな避けれないよ！」

早くも諦めモードなナナギは、泣き言を言う。

いつ自分に向かって落ちてくるか分からない剣に、鼻を齧る。

「誰も避けるなんて言ってるねーよ」

「ちよつと無理があるよね」

「だな」

「…どういうこと？」

脳内をハテナマークで埋め尽くしながらナナギは首をかしげた。
にこにここと、レイは楽しそうに笑っている。

さすが通称『魔王』。

こんな時でも焦るところか笑顔とは。

侮れませんね。

「避けらんねーなら」

指を鳴らしながら、クリスが不敵に口角を上げた。

天使のような容貌にはいささか不釣り合いなはずのその表情だが、
ミスマツチさが敢えていいのか、目を見張る程に美しい。

「倒すまでだろ？」

「倒せばいいでしょ？」

ぴつたりと重なった二つの声に、一同は覚悟を決めたのだった。

「無理無理無理…絶対無理…」
約一名のヘタレを除いて。

一本目の剣が落ちてくるのを合図に、各々は武器を構えた。
全員揃ったの戦闘は久しぶりというか初めてなので、ここでちょっと武器の説明をば。

ナナギはルラの店で貰った玻璃の扇。

これはまあ知っての通りですね。

クシナは大剣、ついさっきもこれで頑張っていましたね。

チサヤは銃。

一番最初のボスらしきものを倒したやつですね。

シャオロンはレイピア、貴族的な見た目がいい感じですよ。

レイとリーリアは魔法要員なので、似たようなロッドを装備しています。

最後にクリス。

彼は素手です。

精霊ですしね、ちょっと痛そうですけど大丈夫なのでしょう。

「よっ」

小さく声を漏らしてクリスが背を仰け反らせた。

直後、垂直に剣が横切る。尋常じゃない動体視力を以てして、クリスは正確に柄の部分の部分を細い足で蹴り飛ばした。

見かけこそ華奢だがその威力は凄まじく、鉄で出来た剣はいとも簡単に真っ二つに折れた。

柄を蹴ったのに何故刃先が折れるのかは分からないが、やはり不思議な波動でも有るのだろうか？

「烈火よ環を成して魔を焼き払え！」

「黒き闇の力よ主の元へ集いなさい」

同時にレイとリーリアが叫んだ。

レイのロッドからは紅き炎が。

リーリアの指先からは闇の波動が。

それぞれ実体を持つて形を作る。

「行け」

「行きなさい！」

合図を送ると、それらは勢いをつけて解き放たれた。

各々魔力を発しながら、落下してくる剣を包み込む。

炎に巻かれた剣はどろりと形を失い、鉄の塊となり。

闇の波動に襲われた剣は強い魔力に耐え切れず、音を立てて弾ける。

「意外と呆気ないのな」

拍子抜け、とばかりにクリスが肩を竦めた。

横で剣をいなしては叩き落としながら、クシナが苦笑する。

「何で残念そうなんだよ」

「…お年頃ですから」

「危機を回避して残念がるなんてどんな年頃だ？」

「ピンチを楽しむお年頃」

妖艶に微笑みながら、幼女の姿をした精霊は唇を細い指でなぞった。

大方の剣は破壊し尽くしただろうか、という頃。
事態は急変した。

それは、ナナギの可愛くない悲鳴から始まった。

「ぎゃあああつ！」

耳の痛くなるような声に、一同は顔を一瞬しかめてからナナギを見た。

「…どうしたんだよ」

刃先の部分だけを銃で正確に狙い続けるという、何とも神経の疲れ

る作業で疲れ切ったチサヤが、さも面倒くさそうに尋ねた。

「あ、あれ……」

ぱくぱくと、金魚のように口を開閉させるナナギに、チサヤは焦れたように舌打ちをする。

「どれだよ……よ!？」

ナナギの指差す方向を見て、チサヤは目を見開いた。

最後のよ、は自分への確認だろうか。

「……」

事態を飲み込んだナナギとチサヤだけが顔を青くし、瞬間黙り込んだ。

飲み込めていない他の五人はきよとんとした顔で首を傾げる。

「うわああああっ!」

今度は二人揃って大絶叫だ。

盛大な声に残りのメンバーが周りを確認した。

さーっ、と音がしそうなほど顔が白くなっていった。

青い紋章

「無理無理無理無理……」

うわごとのように呟き続けるナナギ。

丸い瞳に映るのは、銀に煌めく物体。

「マジかよ……」

げんなりとクリスも呟いた。

彼らの周りを取り囲むのは、たった今叩きのめしたはずの剣達。

ため息もつきたくなる。

だって、へし折ったはずの刃先すらまたも自分たちを狙っているのだから。

「キリがねえ……」

「そういう問題じゃないけどねー」

さすがのレイも今度は苦笑を浮かべ、頭を抱えるクリスの肩を叩いた。

「これは……」

ひくり、とクシナは頬を引きつらせる。

「……どうすんだよ」

「ドアは開きませんよね」

「開くかよ」

シャオロンですら、いつもの無表情を崩して困り顔だ。

それもそのはず。

宙に浮かぶ剣の欠片達は、見事なまでのチームワークを見せて付けるように、ナナギ達を取り囲み円を描いているのだ。

先ほどまでとは明らかに違う団結っぷりは、とてつもなく嫌なことを予感させる。

「これって……あれよね？」

「あれで分かるはずがないでしょう。貴方は物忘れの激しい中年ですか。ついに身も心も年増ですね」

「ちよつと！」

苛立ちからか、シャオロンの毒舌も二割増しだ。

「一気にドバーツて来る奴だよね！？ わーって、ごーって」
涙目になりながら、ナナギはまくしたてる。

身振り手振り必死だが、擬音語だらけなので大変分かりにくい。

つまり、ナナギの言葉を訳すところということだ。

『これって一斉に落ちてくるフラグだよね！？ 勢い良く』

ナナギの言葉に、微妙な表情でクシナが頷いたその時だった。

一本の剣がゆらり、揺らめく。

それを合図にするかのように、他の全ても小さく震えた。

七人の顔が蒼白に染まる。

怖いくらいに美しく銀が輝き、狙いを定めるかの如く切っ先がナナギに向いた。

最早誰も何も言えず、ナナギががくりと膝を折った。

瞬間、風を切る音が微かにした。

キーン…ッ。

頭上で響いた金属音に、ナナギはうつすらと目を開けた。

予想された衝撃はなく、どうやら血も出ていないようだ。

直後、ガチャンと目の前に剣が落ちてくる。

「…へ？」

間の抜けた声と共にナナギは顔を上げた。

つられるように他の者も視線を上げる。

そこには、ナナギ達を守るように掲げられた、大きな盾があった。

青い紋章の刻まれたその盾には、傷一つ付いていない。

固く重そうなそれに、ナナギが目を丸くした。

「え？ なんて…」

性懲りもなくナナギが安易に触れようとした瞬間、部屋中に高い声

が反響した。

『レイク！ どうして！？ 何故私の邪魔をするの！』

あまりにきんとしたその声に、クリスが分かりやすく顔をしかめた。

「は？ 誰…」

チサヤが惚けたように零す。

『ソフィア。邪魔をしたわけじゃないんだ』

『私はただあれを盗んだ泥棒を懲らしめたいだけなの！』

『落ち着くんだ。彼等が犯人だとはまだ分からないだろ？』

『でも…っ！』

自分達を無視して繰り返される会話に、七人は困惑する。

一つは女声、もう一つは男の物のようだ。

どうしよう、とおろおろするナナギの横で、クシナが控えめに声を上げた。

「あの…もしかしてあなた方は…」

時の流れ

クシナの声に反応するように、部屋の一部分が揺れた。

直後、誰もいなかったはずの空間に、一つの人影が現れる。

細い腰を覆う、長く波打つ金髪は黄金というよりかは、薄茶に近しい色をしている。

長い睫毛に縁取られた瞳は深い青色をしている。

裾の広がった淡い色合いのドレスには、至るところに繊細なレースや控えめな装飾が施されていた。

ウエスト部分を彩る金のチェーンには、真つ赤な宝石がはめ込まれている。

それと対になるように、金髪を飾るティアラだけが何故かくすんでいて、時の流れを一身に背負っているようだった。

「ええ。私はこの城の王女、ソフィアよ」

凜とした声音は、先ほどよりも随分落ち着いている。

「さっきの剣つてあんたがやったの？」

悠然とした態度でクリスが問うた。

その口調には、別に怒りが込められているわけでもなく、ただ純粋な質問だった。

「そうよ」

短く、簡潔に返ってきた答えにクリスがにやりとした。

「ふーん。あれさあ、完璧にオレらの息の根止めるつもりだったろ？」

「当たり前よ」

少しも悪怯れることなく言って除けるソフィアに、後ろでリーリアが鼻を鳴らした。

「まあっ。あなたの勘違いで殺されたのでは割に合わなくてよ？」

その一言に、ソフィアも眉を上げた。

「あら、不法侵入者には当然の制裁だと思うわ」

「不法侵入者？ このわたくしが？」

一応プライドは高いリーリアだ。

不法侵入者はお気に召さなかったらしい。

「まあ。自覚なかったの？」

「…おあいにく様。わたくし、こんな薄汚れた小屋にお邪魔する趣味はなくてよ？ シャオロン、この小娘にいつもの毒舌をはいておやりなさい！」

びしいっと人差し指を伸ばしてシャオロンをけしかける。

精一杯の悪態をつけて、あとはシャオロンにバトンタッチらしい。

確かにシャオロンにかかれれば、口で勝てる相手はいないと思いますけど。

でも…

「嫌ですよ。何故私が貴方などのために、毒舌をはかないといけないんですか。自分の矜持位、自分で守って下さいよ」

シャオロンが易々とリーリアの命令を聞くわけ、ないですよね。はん、と鼻で笑いながらシャオロンは一刀両断で断る。

「…」

綺麗に伸びた指が虚しいです。

「あー。いつまで不毛な言い争いを続けるつもりなんですか、リーリアさん」

困ったようにクシナが助け船を出した。

助け船かどうか微妙だが、ソフィアが我に返ったのは事実のようだ。

ほんのり頬を赤くして咳払いを一つすると、口を開いた。

「そうね。本題に入らせてもらおうわ」

「そうしてもらえると嬉しいですよ」

「…私の過去は知っているわよね」

ひくり、クシナの頬を引きつる。

さすがにへヴィーな過去ですからね。

「は、はい」

「謀反にあつたんだろ。クシナ、八つ橋に包んでちや話が進まねえよ」

ソフィアよりも濃い金の髪を掻き上げながら、チサヤが一步前に出た。

にやりとソフィアが口角を上げる。

「分かつているじゃない。そうよ、遠回しな言い方は面倒くさいの。だから単刀直入に言わせてね」

「どーぞ」

チサヤの返事に、ソフィアは満足そうに頷いた。

「私の捜し物を見つけてほしいの」

壊してもしたら…

「捜し物？」

小さくナナギは首をかしげた。

ええ、とソフィアは頷き笑みを浮かべる。

「それを見つけて持ってきてくれたら、おとなしくあなた達を帰してあげるわ」

「ちよつと！ どうしてわたくしが貴方なんかの捜し物を手伝わないといけないの？」

上から目線が気に食わなかったのか、リーリアが鼻を鳴らした。

「あら。まあまあ」

ソフィアはきよとんとした後、さも可笑しそうに笑った。

ころころと声を上げて笑うソフィアに、リーリアは眉間の皺を深くする。

「いやだ。あなた、自分の立場分かってる？ さっきももう少し遅かったら、死んでたのよ？ …どちらが上か、分かるわよね」

確かに。

先ほどレイクの助けがなければ、全員あの世行きだったのだろう。それを思い出してか、リーリアは悔しそうに唇を歪めた。

「あんなの…っ、本来の力があれば蟻ほどにも怖くないというのに

…！」

「本来？ って、じゃあリーリアさんもつと強いのか？」

リーリアの言葉に、ナナギが目を丸くした。

「当たり前よ！ わたくしを誰だと思っでいて？」

「えーと……誰？」

生憎ナナギは魔界について詳しいわけではない。

しかし、間の抜けた返事にもリーリアは自慢げに豊満な胸を反らした。

「シャオロン、言ってあげて」

「自分で言えば良いじゃないですか…」

「…言つてあげて！」

「…」

再度繰り返したリイーリアに、シャオロンは白けた視線を送る。

深いため息でもつきそうな何とも言えない表情をしてから、シャオロンはゆっくり口を開いた。

「魔界でリイーリア様の名を出せば、少なくともこの世界で言うところの貴族階級の人なら、簡単に頭を垂れるでしょうね」

「貴族…」

「ほー、そりやすげーな」

横からクリスが茶々を入れる。

にやにやとした笑みは、真意を汲み取れない。

「すっごーい！ リイーリアさん凄い人だったんだ！」

「おーっほほほほ！ それほどでもなくてよ！」

「ですよね。こちらの世界では力発揮できないんですからね。ただの役立たずな年増に変わりはありませんよ」

「…シャオロン、最近貴方わたくしに冷たくないかしら？」

「…気のせいですよ」

言いながらふいと視線を逸らすのは、多少は自覚があるからかもしれない。

「ま、そういうことね。貴方が魔界ではどれだけ偉いか知らないけど、ここでは私が一番なの。ね？」

「…そろそろ、その搜し物を教えてもらえるかな？」

今まで黙っていたレイが言った。

流石レイ。

会話の流れを丸無視です。

「そ、そうね」

これにはソフィアも一瞬たじろぐ。

が、すぐにまた口角を上げると囁くように言った。

「私が見つけてほしいのは、ペンダントよ」

「ペンダント？」

「そう。もうくすんでるかもしれないけど、元は銀のペンダントなの。あまり装飾はないと思うわ」

「…それを、見つければ良いんですか？」

クシナが確認するように尋ねた。

返事の代わりにソフィアは笑みを深くする。

「ただし…見つけられなかったり、壊しでもしたら…即殺すから」
何ともいい笑顔で宣言したソフィアに、一同は表情を凍らせたのだ
った。

とつても大事な物

「そつえば！」

部屋に広がった微妙な空気を払拭したのは、ナナギの明るい声だった。

なんだなんだとばかりに、六人はナナギを見る。

嬉しそうに一人一人の顔を見返しながら、ナナギは人差し指を立てた。

「あたし、多分そのペンダントの場所分かるよ！」

「えっ!？」

皆を代表してクシナが声を上げる。

その後、クリスが胡散臭そうに言った。

「本当かよ？　ぬか喜びなら御免だぜ」

「た、多分！」

「多分って何だよ……」

呆れたように眉を下げるクリスに、ナナギはでもでも、と続ける。

「あたし見たんだよ！　えーとあのー、そう！　あたしが電気にぶつかって転けたところで！」

「転け……。あー、そんなこともあったなー」

比較的今日の出来事の中では平和な事件だ。

あまりにも濃いイベント尽くしな一日に、メンバーはどことなく遠い目をする。

何なんだ今日は。

厄日なのか？

そう問いたくなるほどに、危険が多い日だった。

「……で？　そこで見たのかよ？」

今度はチサヤが口を開く。

その問い掛けにナナギは大きく首を振った。

「うん！　銀のペンダント！」

自信満々なナナギの返答に、チサヤはクリスと顔を見合わせる。

「じゃ、行くか」

誰からともなくそう言つと、勇者ご一行は足を進めた。

『ソフィア』

部屋に響いた声に、ソフィアは少し目を見開いた。

しかし、すぐにまた不機嫌に眉根を寄せる。

「…なあに？」

『まだ怒つてるのかい』

苦笑気味に咳かれた言葉にソフィアは鼻を鳴らす。

「別に。レイクのお人好しは昔からだし」

『お人好しなわけじゃないけど…。それより、ペンダントって？』

「…」

ソフィアは何も言わずに少し俯いた。

拍子に薄金の髪が波打つ。

「私、いつまでもこんなところで幽霊やりたくないのよ」

『へえ？』

興味深そうにレイクが相槌を打てば、ソフィアは続ける。

「さっさと成仏してしまいたいの」

ふ。

ソフィアは自嘲するように薄く微笑んだ。

何もない部屋の一角を見つめ、今度はにっこりと笑う。

「あのね、私今でもあなたのことが大好きよ」

『と、唐突にどうしたんだよ』

戸惑ったような声にソフィアは目を細めた。

「だから、ペンダントがないと成仏できないの」

『…？ごめん、よく分からないんだけど』

「でしようね」

ソフィアの原因の抜けた返答に、レイクは不満げに言う。

『教えるつもりは？』

「ないわ」

『…』

ばっさり切り捨てたソフィアに、レイクは何ともいえない沈黙を作った。

『まあいいや。でも、ペンダント一つで満足できるのかい？』

「ええ」

はつきりと言い切ってソフィアはそっと瞳を閉じた。

「とつても、とつても大事な物なの」

『…見つかるよ、いいな』

言い残し、微かに感じていた気配さえも消え失せる。

完全に一人となった部屋で、ソフィアはぼつりと溢した。

「大切なものなのよ…」

父親が娘の恋の話を書きたくないのと同類？

「あつたあ！」

薄暗い城内に、嬉々とした声が響き渡った。

「ね、ね？ ほら、言ったとおりでしょっ？」

今だかつてないほど誇らしげに、ナナギは床に広がるそれを指差した。

まあ、今まで胸を張れるような活躍してないですしね。

「あー、よかつたなー」

「何でそんなどうでもよさそうなのよ！」

クリスの薄い反応が気に入らなかったのか、ナナギは頬を膨らませる。

「でも、偶然だったよな。ナナギがここで転ばなかったら、多分見づからなかっただろう」

くそ真面目な顔でクシナが呟き、真面目二号のシャオロンがそれに頷く。

「えっへ…」

「えっへんとか威張りやがったら頭はたくかな」

「なんでよ！」

にまにまと胸を張ったナナギにチサヤが隣で釘をさした。

「つたりめえだろ。今回は偶然役立ったけど、普段転げまくられても困るんだよ」

「まあ、そうだけどさあ…」

「…危険な所で転んだら危ねえだろって言ってんだ」

「…？」

まだ不満そうなナナギに、チサヤが視線を少し反らして付け加える。しかし、ナナギは首をかしげて眉をひそめるばかりだ。

「チサヤなりに心配してるんだ」

ぶっきらぼうに言われすぎて、素直に言葉を受け取れていないナナ

ギを見兼ねて、クシナが耳打ちした。

途端、ナナギの眉が開く。

「そつなの？」

嬉しそうに目を細めてナナギはクシナを見る。

「ああ」

それに笑みを返しながら肯定を示し、クシナはシャオロン達の方に
向き直った。

見つけたペンダントについて話しているようで、リーリアとシ
ヤオロンが屈み込んでいる。

「古いわねえ」

「…リーリア様程ではないでしょうがね」

「シャオロン、何か言ってる？」

「いえ、別に」

恒例の年についての言い争いが勃発しようとしている二人の傍で、
レイがにこにこ笑っている。

この状況でその聖母のような微笑みは、胡散臭く見えるほどだ。
密かに苦笑をして、クシナはレイに歩み寄った。

「楽しそうだな」

「…そう見える？」

「いや、あまり」

きつぱりと首を振ったクシナに、今度は小さく声を上げて笑う。

「嘘だよ。ちよつと楽しいよ。仲いいよね、あの二人」

「喧嘩するほどつてやつだな。…あー、それを言うならナナギとチ
サヤ、あとクリスも同じかもしれないな」

「そうだね。羨ましいかも」

「…そうか？」

まだ言い争いを続けるシャオロンとリーリアを眺めながら呟いた
レイに、クシナは眉を上げた。

そんなクシナに、レイは意味深に目を細める。

「あれ？ クシナは好きな人とは甘い会話を交わしたいタイプ？」

「っ!？」

レイの言葉にクシナは目を見開いた。

「な、な、な、何を言いだすんだ! しかもその言い方だとあいつらが…その…」

「好き合ってるみたいだつて?」

真っ赤になつてどもりまくるクシナとは対照的に、レイは涼しい顔。

「違うの? まあリーリア達は違うかもしれないけど、チサヤつてあれ典型的なツンデ…」

「わーっ! 言っな! それ以上言っな!」

「何で?」

レイの言葉を、クシナはオーバーに両手を振りながら遮った。

遮られたレイはきょとんと首をかしげ、素直に疑問を口にする。

「何でつて…。幼なじみのそういう面はその…あまり耳にしたくない…」

「それつて、父親が娘の恋の話を聞きたくないのと同類?」

ごによごによと決まり悪げに言つたクシナに、レイは笑顔で一閃。

案の定、クシナは雷を受けたかのように固まっている。

まあ、そりゃあねえ。

誰でもそんなものに例えられたらシヨックですよね。

ましてや、まだクシナは若いですしね。

娘と同じ年代のはずですよ。

「ま、まあ、何はともあれ良かったな」

「無事に帰れそうだよね」

咳払いをひとつ、声音を少し変えて言つたクシナに、レイはまたにっこりしてみせた。

父親が娘の恋の話聞きたくないのと同類？（後書き）

お久しぶりです、椎名です。

最近私生活が何かと忙しく、かなり間が空いてしまいました。お待たせしてしまっていたら、すみません。

話を変えまして。

サブタイの長さが以上です…！
しかもあまり本編と関係ない！

あと、ユニークが一万いってました！
超びっくりです。

もう感謝感謝です…！！

可愛いは正義

そんな気はなんとなくしてた。

誰からともなく、ため息が漏れる。

真っ青になったナナギの手から、鎖の欠片がさらさらと零れ落ちた。

「…どうしよう」

「まつさか、ここまでボロだったとはなー」

重苦しい雰囲気にはうささか不釣合いな、能天気な声でクリスが笑った。

けらけらと、微かに乾いた笑い声が壁に反響する。

「あたしの…せいだよね…？」

半泣きで尋ねたナナギに、ちょうど目が合ったシャオロンが首を横に振ってみせた。

「いいえ。誰が持つても壊れたでしょうから」

無表情のままだが、その響きは柔らかい。

「そうだ。ナナギのせいじゃない。そんなに泣きそうな顔をするな」

「ていうか、いつまで地面に座り込んでるつもりだよ。さっさと立て。服が汚れんぞ」

「あらあら、何故頬に土がついているの？ どうやったらそんな所に付くのかしら」

「鎖で怪我したりしてない？ 大丈夫？」

クシナが頭を撫で、チサヤが引つ張り起こし、リイーリアが頬を拭い、レイが手を握った。

一人で責任を感じるナナギを慰めているのだろうか。

心なしかいつもよりも皆優しい。

「さあ。それよりもこれからどうするかだな」

立ち上がったナナギが涙を擦ったのを見ると、クシナは真面目な顔つきに戻った。

「何か意見はないか？」

学校の先生よろしく、辺りを見回すクシナにちらほらと手が挙がった。

「じゃあ、チサヤ」

「逃げちまおうぜ」

「あいにく、扉は閉まってるだろうな。シャオロン」

「ネットレスを修理してみては？」

「駄目だ、時間が足りない」

「というか、鎖はほとんど風化していてよ。到底直せる状態ではないわ」

「…次、レイ」

パーティーの中でも、微かに良識の残る二人の意見が却下され、半ば諦めモードに入りながらも、クシナは残る二人に期待を掛ける。にっこりと、レイは微笑んだ。

隣のクリスも、顔を見合わせると口角を上げる。

どうでもいいですけど、清楚な美少女の不敵な笑みってシユールでもありますね。

「城ごと燃やしちゃうってのは…」

「却下だ却下!!!」

「えー？ 何でだよ？」

いい案じゃん。

ぶーぶーとクリスが口を尖らせる。

「じゃあ爆破…」

「なんでそうなる!？」

「おわっ！ それいい！ 爆破かけー！」

「よくない！」

珍しく見た目どおりの子供のようにテンションの上があった、クリスの頭をクシナは軽く叩いた。

いや見た目どおりと言っても、美少女が爆破に興味津々つてのもどうかと思っただけだね。

「……」
しばし、叩かれた頭に触れて黙り込んでいたクリスだったが、にやりと唇を曲げた。

「痛い……」
聞いたこともないくらい細かい声でそう言うと、がくりと膝を折る。何事かと凝視する皆の真ん中で、クリスは上目遣いにクシナを見上げた。

しつかりと大きな瞳に涙を湛えて。

「ひどい……痛いよ……」

うるうるとチワワのように瞳を潤ませながら、クリスのか弱い少女ぶる。

「クシナ……」

そんなに強く叩いたのかと、クリスには同情の、クシナには咎めの視線が集まった。

ただ一人、ナナギを除いては。

さすがにご主人様は違うのか、なお演技を続けるクリスを白けた目で見ている。

むしろ、クシナに同情的なくらいだ。

「クシナちよつとやりすぎたんじゃ……」

「違うよ。クリス嘘泣きだもん」

「あ、てめっ、ナナギ！」

「なに乙女ぶってんのよ、ちよつと美少女だからってズルい！」

「お？ 嫉妬か？ オレの美貌に」
うっふん。

細い腰に手を当て体をくねらせ、いわゆるセクシーポーズをとるクリスに、ナナギは頬を膨らませる。

「そんなんじゃないもん！ 大体あんた男じゃないの！」

「それがどーした。可愛いは正義なんだよ」

気の抜ける喧嘩に呆れを浮かべながら見守っていたメンバーだったが、ナナギの一言にはっとした。

「そうだ、クリスは男だった、と。」

見た目に騙されてしまったが、彼はれっきとした男だ。

多分同じことをチサヤか誰かがやったら、気持ち悪いと一蹴されて終わりだっただろう。

それを考えると、ある意味クリスの言葉は真理なのかもしれない。

「あー、もうそろそろ二人ともやめろ。それよりこれからどうするか…」

ため息混じりにクシナが仲裁に入った、その時だった。

薄暗い廊下の向こうに、ヒールの響く音がした。

面白いくらいに、揃って顔が青ざめていく。

ナナギに至っては、ほんの数瞬前まで言い争っていたはずのクリスにしがみついている。

「タイムアップよ。見つかった？」

静まり返った部屋に、その声は幾度も反響した。

誤魔化したって

「ソフィアさん……」

クシナが乾いた声を出した。

じつとりと手のひらには汗をかいている。

シャオロンが逃げ道はないかと辺りを見回すが、あいにくとそんなに親切ではない。

まさに絶体絶命か。

おそらくほとんど砂と化したペンダントを見れば、彼女は迷わず剣を振るうだろう。

同情の余地もないソフィアの潔さは、こんな場面でもなければ好ましいくらいだ。

そう、あくまでもこんな場面でもなければ、だが。

「さあ、見つかったかしら？」

可憐にソフィアは微笑んだ。

さすが生粋の王女というべきか。

清廉な中にも気高さの見え隠れする、まさに王族の笑みだった。だが、今のナナギたちに見とれている余裕はない。

「見せてちょうだい。早く」

「その高飛車な言い方が気に入らないのよ」

ふん、とリーリアが鼻を鳴らした。

この状況下でも不遜さをなくさないリーリアの気性も、やはり魔界の上層部という立場所いか。

もしかすると、危機には慣れていいのかもしれない。

「あなた、自分の立場分かってる？ 私の機嫌ひとつであなた達なんかいちころなんだからね」

ソフィアも負けずに眉をひそめる。

どうにもこの二人は折り合いが合わないらしい。

しかし、この状況で分が悪いのは明らかにリーリアの方だ。

ソフィアの言葉に、リーリアは紅色の唇を噛んだ。

「リーリア様、むやみやたらと相手を挑発しないでください」

「だって…」

「同じことを何度繰り返させるつもりです？ 出来れば一度で理解していただきたいのですが」

にっこりと、シャオロンが絶対零度の笑みを浮かべる。

その笑みには何か有無を言わせないものが感じられ、あっさりとりリーリアは引き下がった。

「私、そんなに気が長い方じゃないの。見つかったの、見つかったの？ 早く言って」

つんと、顎を上げると、ソフィアは白い手をナナギたちに伸ばした。

「どうしよう…」

「どうしよーもねーよ」

ソフィアとは対照的に、弱々しく伸ばされた手をクリスはとった。

小さいけれど、少し骨張った手にナナギは少しだけ目を見開く。

「クリス？」

「誤魔化したってどーにもなんねーんだよ。さっさと終わらせてやるーぜ」

「え。でも…」

「大丈夫。皆一緒だ。この手だって、離さねーよ」

クリスは不安そうに瞳を揺らすナナギに口角を上げてみせると、粉々になったネックレスを掻き集めていたレイを見た。

やっぱり動じずに、レイもまた微笑みを返す。

「そうだね」

立ち上がって、両の手のひらをソフィアの方に差し出した。

くすんだ銀の欠片が覗く。

「…」

片眉だけを器用に上げて、ソフィアは訝しげな顔をした。

「すみません。見つけはしたのですが、持ち上げた際に壊れてしまいました」

「あ、あたしが悪いんです！ だから…！」

「お前は黙ってる」

一歩前に踏み出そうとしたナナギを、繋いだ手を引くことでクリスが引き止める。

「余計なこと言ってるじゃねえよ」

チサヤもナナギを背に庇うようにして、代わりに前に出た。

「…はあ」

ナナギが微妙な顔をしてチサヤの背中をまじまじと見る。

二、三度首を捻ってから、ナナギはぼそりと尋ねた。

「あのさあ、何で二人してそんなに過保護なの？ そこまで庇ってもらわなくても」

「…」

「…」

ナナギの質問に、クリスとチサヤは揃って固まった。

おまけに、近くにいたクシナもとぼちりて苦い表情になる。

こいつ、分かってね…！という空気が三人の中に漂った。

「…てめえがふらふら変なこと口走るからだよ、ばーか！」

「馬鹿！？ 失礼ね！ あたしが悪いんだから、当たり前のこと言っただけでしょー！」

「だからお前は悪くねえつつってんだろ！ 話はちゃんと聞け！」

「聞いているもん！」

「…これだけ？」

頬を膨らませてチサヤと争うナナギに被せて、ソフィアの声が響いた。

ぴたりと、皆の動きが止まる。

焦ったようにソフィアの方を向き、そして目を丸くした。

細い腕を組み、微かに脚を開いたソフィアは、今にも泣き出しそうな顔をしていた。

等身大の女王様

「…っ、どいて！」

泣きそうな表情から一転、ソフィアは柳眉を上げるとクシナを押し
のけた。

肩を押され、さしてダメージはないものの、突然のことにクシナは
よろけるようにして道を譲る。

レイの傍、つまりネックレスの落ちていた場所にしゃがみこんで、
ソフィアは床に手を付いた。

ドレスの裾が汚れるのも気にならないようで、ただ埃に塗れた床を
睨みつけるようにしている。

「お探しのものは、これでしょうか？」

静まり返った廊下に、シャオロンの声は静かに、しかしはっきりと
響いた。

「…」

まるで聞こえていないかのように反応を見せないソフィアに、苛立
ちを見せることもなくシャオロンは続ける。

「随分古い写真ですね。貴女と隣にいるのはもしかして…」

「見せて！」

「早っ」

光の速さで飛んできたソフィアに、思わずシャオロンがつっこむ。

「あ、なに、どうしたの？」

ナナギが声をあげて、シャオロン達の所に駆け寄った。

宣言通り手を繋いだままだったクリスも、引きずられる様にして近
づく。

「ソフィアさ…え？」

名を呼びかけて、ナナギはぽかんと口を開いた。

振り向いたソフィアの青の双眸からは、透明な雫が流れていた。

後ろでは、シャオロンが戸惑ったように困惑の色を浮かべている。

ほっそりとした手には、大事そうに古びた金の小さなロケットが納まっていた。

元はあのネックレスに付いていたのだろう。

上部の錆びた輪には、鎖が一端日引っかかっている。

中には、幸せそうに肩を寄せ合い、微笑んだ二人の男女。

一人は今と全く変わらないままのソフィア。

もう一人はきつと…。

「レイク…」

ぼつりとソフィアは零す。

ロケットを両手で強く握り締めて、ソフィアは俯いた。

細い肩が、微かに震える。

「…ごめんなさい。あなたは何も悪くないのに…私といたせいで…

私が王女だったせいで…」

ソフィアは嗚咽を堪えようと、切れる程にきつく唇を噛む。

嗚咽の代わりに、とうとう唇から血が流れた。

思わずナナギはクリスの手を振り払うと、ソフィアに走り寄り、そ

の唇を撫でた。

ねつとりと、口紅か血か分からない赤いものが指を染めたが、気にも留めずにナナギは何度も撫でる。

「泣いても…いいんですよ…?」

「泣いても…いいんですよ…?」

そう言ったナナギの瞳からは、すでに涙が落ちている。

「…泣く? 私が? レイクを自分勝手に道連れにしたこの私が?」

「はい。ソフィアさんです。誰も咎めたりはしませんから」

「まさか。許されないわ、そんなこと」

自嘲気味に頬を緩めたソフィアの握られた手を、ナナギは両手で包

んだ。

「じゃあ命令です。ソフィアさん、泣きなさい」

「馬鹿馬鹿しい、あなたが私に命令なんて…っ」

ぶわりと、瞳に涙が盛り上がった。

重力に逆らいきれずに、一際大きな雫が零れる。

つられて、既に緩んでいたはずのナナギの涙腺も崩壊したようだ。
「レイク、ごめんねえ…っ！ 痛かったでしょう？ 私を恨んだでしょう？ 私のこと、嫌いになつたでしょう！？」

「きつ、聞いただけでも悲しいよう…っ。畜生、犯人の馬鹿野郎…っ！！！」

「そうよ、そうよ！ 一体私が何したつて言うのよ！？ ああもう、もっと生きたかったのに！ レイクと一緒にいたかったのに！ レイクのこと、愛してるのに！！！」

声を揃えて子供のように泣きじゃくる二人に、周りは何も言えない。この叫びは騒がしくとも、聞いていてあまりに心に痛かった。

等身大の王女様の願いは当たり前のことだった。

家族恋人、大好きな人も自分も理不尽な理由で殺され、悔しくないわけがない。

無念がないわけがない。

ソフィアの痛みが胸に流れ込んでくるようで、皆は目を閉じた。先ほどまではあんなに反発していたリーリアも、年甲斐もなく顔を真っ赤にしている。

ただ声の限りに泣き叫び続ける二人を、止める者はいなかった。

等身大の王女様（後書き）

どうも。

最近更新再開しました。

もうすぐ幽霊城編も完結です！

次を何編にするかは、ぼんやりとしか考えてませんが、とりあえず一段落したら人物紹介したいです！

君がいない世界

一通り泣き続け、そろそろ涙も出尽くしたただろうという時だった。

『ソフィア』

聞き覚えのある声が辺りに響いた。

ぴたり、とソフィアが動きを止める。

「…レイク？」

ソフィアがそう問い掛けると、部屋のある一点がぐにやりと歪んだ。ちよとど熱せられた硝子が溶けて形を変えるように、景色もそこだけ伸びたり縮んだりする。

やがて空間がゆらゆらと頼りなく揺れ、下の方から徐々に別の色彩を映し始めた。

「わ…」

ナナギ達は息を呑み、突然視界に現れた人物を凝視した。

優しい顔つきに穏やかな笑みを浮かべた青年。

話の流れから言っても、彼がレイクなのだろう。

「初めまして。レイクです」

「え…あ、こちらこそ」

曖昧に笑ってナナギは会釈をする。

それに右手を上げることで返すと、レイクはソフィアに向き直った。

「…なによ」

赤く泣き腫らした瞳が彼を捉える。

その言葉に答えることなくレイクは無言でソフィアに歩み寄ると、

そのままぎゅっと抱き寄せた。

「な…っ」

驚いてソフィアは腕を突っ張ろうとするが、レイクは構わず抱きしめる。

「ヒュー」

「黙りなさい！」

面白そうに茶々を入れたクリスを一喝し、ソフィアは今度は間近でレイクを睨んだ。

「あのねえ、レイク…」

「うるさいだまればか」

「は？ ちよつといきなり何なのよ」

「ばかばかばか。ソフィアのばーか」

更にきつくレイクが回した腕を強めた所為で、ソフィアからは彼の顔が見えなくなる。

「本当…馬鹿だよ」

呟いた声が微かに震えていた。

困惑したように眉をひそめるソフィアの旋毛を見下ろしながら、レイクは続ける。

「誰が誰を恨んでるって？ 僕が？ まさか。疑われるなんて心外だよ。あーあ、僕の気持ちは伝わってなかったか」

「だって、私の所為で。あの日私があなただを呼んだりしなければ」「君の所為なわけないだろ。第一、もしあの日僕が城に行つてなかったとしても、僕は死んでたよ。毒でも飲んでさ」

「何だよ。あなたが死ぬ理由なんて…」

「逆に生きてる理由なんてある？ 君がいない世界に生き続ける意味なんかないよ」

一筋、止まったはずの涙がソフィアの頬に伝った。

嬉しくて、切なくて、色んな思いの籠った涙がはらはらと落ちる。言葉にならない思いが喉の辺りを締め付け、ひゅーと音が鳴った。

「レイク…っ」

抱き付くと言うよりは、しがみ付くと言った方が正しいような勢いで、ソフィアはレイクの背に腕を回し返した。

レイクも答えるように、一層力を込めてソフィアを抱き締める。

もう鳴らないお互いの心臓の音すら聞こえてきそうなほど強く抱き締め合い、二人はただ時の止まった空間に佇んでいた。

君がいない世界（後書き）

次話はかなり蛇足です。

あんま話に関係ないと思います。

でもちよつとラブコメ仕様になっています…多分。

愛しています

「ロマンチックだね…」

「えらく情熱的なことで」

「…歯が浮く。よくあんなことと言えるよな」

「言おうと思えば、案外言えるものですよ」

感動的なワンシーンを繰り広げる二人から少し離れて、ぼそぼそと話す四人組。

やはり年頃の少女だけあって、そういうものに憧れはあるのか、ナナギは顔を赤らめながらもソフィア達を見つめている。

「へー？ よし、じゃあ言ってみるよ」

先ほどのシャオロンの発言を聞き逃さず、クリスがにやにやとした笑みを浮かべた。

「…構いませんが、私は幼女に愛を囁く趣味はありませんよ」

「ぶはっ。そりゃそーだ。頭に口の付く変態野郎でもなきやな」

「ええ。しかも貴方中見男ですしね」

「んじゃ、ナナギに言えよ。それなら問題ないだろ？」

「まあ、そうですね」

特に動じることなく、いつもの無表情で頷くと、シャオロンはナナギに向いた。

「えっ！ 何であたし！？ リーリアさんでいいじゃん！」

「あんな年増は論外ですよ。準備はいいですか？」

「いいですか、ってちょっと待ってよー！」

淡々としたシャオロン相手に騒いでいると、自分ひとり気にしすぎているように思えてくる。

いや、実際にただの演技なんだけどさ。

そう、これは演技演技演技…。

「…分かった。ドンと来い！」

半ば自分に言い聞かせるようにして覚悟を決めると、ナナギは顔を

上げた。

「ではそうします。ナナギ」

「は、はいっ！」

手を握られて、声が裏返った。

至近距離で見つめられ、早くもナナギは覚悟が折れそうになる。

思わず顔が引けそうになるナナギの頬を、反対の手で撫で、シャオロンはいまだかつてないくらい柔らかく微笑んだ。

これだけ見ると、かなり甘酸っぱい赤面シーンなのだが、少し視界を広げてみると胡坐をかいて可笑しそうに笑いを噛み殺しているクリスがいるので、何かもうそれだけで雰囲気ぶち壊しである。

しかも、軽く空気と化しているチサヤが胡散臭そうなものを見るように、顔をしかめている。

しかしそんなことは塵とも気にせずに、シャオロンは続ける。

「愛しています。貴女が傍にいてくだされば、私は他には何も望みません。今、貴女をここから連れ去り、私だけのものに出たらどんなによいのでしょうか。それが出来ないのならば、せめてこの瞬間だけでも、私のものでいてください……」

「へ。えと、その」

「すっげー！ シャオロンかっけー！ 惚れる！」

「幼女に惚れられても……」

「いや、冗談だったの」

かああ、と顔を真っ赤にしてもるナナギを差し置いて、クリスはげらげらと笑い出した。

「今の台詞即興か？」

「いえ。以前読んだ本からお借りしました」

「て、照れるね。演技って分かっても恥ずかしいよ」

「寒い。やっぱ俺は絶対言えねえ」

有り得ねえ、と腕をさすりながらチサヤは繰り返す。

そんなチサヤに、ナナギは不思議そうに首を傾げた。

「じゃあ、チサヤは好きな人にどうやって告白するのさ？」

「はあ？ んなの、別にそんなこつぱずかしいこと言わなくても、十分出来るだろ」

「そつかなあ…。ちよつと試つてみてよ」

「絶対ヤダ」

断固拒否。

とばかりにチサヤはきつぱりはつきり断言し、ついでに首も横に振つた。

途端、ナナギは不満そうに唇を尖らせる。

「えー！ 聞いてみたいのに。あ、別にあたしに向かつて言えつてことじゃないよ？ クリスにでいいんだよ」

「もつとやだよ、馬鹿！」

「オレを巻き込むなつーの。オレだつて嫌だよ」

「大体なあ…」

ふい、とチサヤは視線を逸らす。

面白がつて、わざと背けた顔を覗き込んでくるクリスに、思い切り顔をしかめてから、チサヤは続ける。

しかしクリスもわざわざ逃げているというのに追いかけてくるとは、大概いい性格をしている。

「そついうのは、好きなやつの前でだけ言えばいいんだよ。べらべら言いまくるもんでもねえだろ」

「お。いっちょ前にかつこいいこと言つちやつて」

「茶化すなよ！ 折角いいこと言つたのに！」

にやにやといつもの意地の悪い笑みを浮かべるクリスに、チサヤは眉を吊り上げる。

そんな二人を背に、シャオロンは一人小さくため息混じりに呟いた。「躊躇なく言つた私の立場はどうなるんでしょうね…」

愛しています(後書き)

予告通り、くだらない会話。

このパートはいらなかった気がしなくてもない…。

実用性も活用性もない

「本当、色々ごめんなさいね」

幾分か目の周りが腫れてはいるものの、ソフィアは笑った。

苦しみや悲しみ、多くのものが落ちてすっきりした笑みに、一同も自然と頬を緩ませる。

「全くだわ。何度謝ってもらっても足りないから…もう謝らなくていいわ」

「リイリア…」

素直じゃなくとも優しい言葉に、ソフィアは嬉しそうに目を細めた。二人の仲も、どうやら一件落着のようである。

「天邪鬼ですね。素直に言えばよいものを」

「でも、結果オーライだよね」

「まあその通りですけど…」

和やかな空気が流れた所で、唐突にソフィアが手を叩いた。

「そういえば！ ナナギにあげたい物があったんだっただわ」

「あ、あたしにですか？」

「ええ。そうよ。何かお礼をしたいなーって思ってね」

につこりと、ソフィアは破顔した。

その笑顔につられてナナギもへらりと笑みを浮かべる。

「はい、どうぞ」

「うわっ」

言葉と共に、どこから取り出したのかソフィアはナナギの頭に何かを被せた。

鼻や口、顔の至る所に当たる細い感触にナナギは慌てるが、それは周りのメンバーの声にかき消された。

笑い混じりの歓声に、ナナギは目を丸くする。

「えっ。なに？ 何が乗ってるの？」

「鏡で実際に見てみたらどうかしら？」

リイリアが軽快に指を鳴らすと、ナナギの目の前に大きな全身鏡が現れた。

そのつるりとした鏡面に映っているのは、普段と別段変わりはない……いや、あった。

トレードマークの茜色の髪が、鮮やかな金髪に変わっている。

シャンデリアの光を受け、きらきらと輝くその金髪に、ナナギは瞳も負けじと輝かせた。

「ブロンドのウィッグだ〜！」

「これくらいしか、あげられそうな物がなかったの」

「すごい嬉しいです！　ありがとうございます！」

「実用性も活用性もないけどな」

「クリスうるさい！」

ナナギに睨まれ、クリスはあまり気にしてもなさそうに、ひょいと肩をすくめた。

確かにクリスの言うとおりだが、人間の世の中口に出すべきことと出さずにいるべきことがあるのだ。

そこら辺を精霊にも分かっていたらだきたい。

そんな微妙に人間の空気の読めない精霊、クリスの失言にもソフィアはおおらかに笑みを保っている。

怒って剣とかを持ち出してこないあたり、本当にもう先ほどまでとは別人のようです。

「いいわ。本当のことだし」

「あの……」

「ん？」

傍らに立っていたクシナが控えめに挙手した。

ソフィアはクシナに視線を向けると、首を傾げる。

「これからソフィアさん達はどうするんですか？」

「ああ。そうね、もうしばらくだけ二人でこの城に住ませてもらうかと思ってるの。本当は写真が見つかったら、すぐにでも成仏するつもりだったんだけどね」

いたずらっぽく、ソフィアは唇を持ち上げた。

クシナも柔らかく笑みを返す。

「そうですか」

「だから、いつでもまた遊びに来てね」

「ちなみに…レイクさんが見当たりませんか？」

クシナの問いに、ソフィアは顔をしかめた。

「寝てるわ。久しぶりに実体保ったら疲れたそうよ」

「そうなんですか。挨拶しておきたかったんですけど…」

「無理ね。彼、一度眠ったら、てこでも起きないから諦めて。ほら、

それに永遠の別れでもあるまいし、ね？」

鼻を鳴らすソフィアに苦笑して、クシナは頷いた。

そして、がやがやと落ち着きのないメンバーを見渡すと、皆を代表して頭を下げた。

「では、そろそろ出発しますね。色々のご迷惑をかけてすみませんでした」

「いやね。急に改まっちゃって。まあいいけど、なら私もちゃんとさせてもらうわ。…こちらこそ感謝していますわ。満足な御持て成しも出来ませんでした。お許しを。またのお越しを心よりお待ちしております」

王族らしい高貴な雰囲気。漂わせ、美しくソフィアは礼をする。

さらりと髪が細い肩を撫で、滑り落ちる。

予想外にかしこまった言葉を貰ったクシナは、他の皆にもしっかりと挨拶をさせるべく、後ろを振り返ったのだった。

実用性も活用性もない（後書き）

これにて幽霊城編は完結です。

…が、次の編に入る前に三話程挟みます。

ちよっとシリ阿斯も含みますので、ご注意ください。

命短し恋せよ少年

「色々あつたけど、とりあえず良かったね」

ナナギがまた少し小さくなつた城を振り返りながら、呟いた。

歩き始めてそんなには経っていないが、聳え立っていたはずの城はもう普通の民家と同じ位のサイズに見える。

ナナギを挟むようにして両隣を歩く、クリスとチサヤが揃つて肩をすくめた。

「ま、切ないっっちゃ切ないけどな」

「そりゃ仕方ねーだろ。過去が薄暗いんだから」

「でも、二人とも笑つてたから」

確かに。

寄り添つた二人は幸せそうに微笑んでいた。

それでも素っ気無い二人の言葉に不安になつたのか、ナナギは微かに眉を下げた。

「大団円とまではいかなくてもさ、バッドエンドでは…ないよね？」

「そーだなー」

「誰かさんのドジのおかげで、あいつらも救われたんじゃないの？」

「たまにはドジも役に立つもんだ」

「そうそう、たまにはな」

自信なさげなナナギの肩をクリスとチサヤは叩き、にんまりと笑つた。

女の子の慰め方としては、いささか手荒な気もするが、ナナギには効果覿面だったようだ。

「ドジドジ言わないでよー！」

反撃しながらも、その表情は明るい。

「っーかさー、いつまでお前そのヅラ被つてんの？」

べしべしと頭を叩くナナギの腕を掴んで止めると、クリスは指差す。先にあるのは、トレードマークである赤毛ではなく、代わりにチサ

ヤと揃いの金髪。

ソフィアに貰ったウィッグがきらきらと輝いていた。

そんな華やかな髪に不釣り合いに、ナナギは顔をしかめる。

「ヅラって…。ウィッグって言ってよ」

「呼び名なんざどこでもいいだろ」

「ってかさあ、あの王女もなんでわざわざ金髪の持ってたんだろうな？」

「…」

チサヤのもっともな疑問にナナギは黙り込んだ。

言うとおり、確かにソフィアは見惚れるほどに美しい金の髪をしていたはずだ。

謎だ。

しばし視線を彷徨わせ、たっぷり思案した後、ナナギは言い放つ。

「知らないわよ!!!」

効果音が流れていたなら、ドーン!

とでも付きそうな勢いだ。

気迫はいいのだが、なんとも言えぬがっかり感が漂う。

だが白けた目をする二人に、少し恥ずかしくなったのか、ナナギは決まり悪そうに付け加えた。

「そんなことはソフィアさんに聞いてよね」

「阿呆か。なんでわざわざ折角抜けてきたとこに戻んなきゃなんねー

ーんだよ」

「もう、ならいいじゃん。それよりさ、どう? 似合う?」

くるりと、その場でターン。

滑らかな金髪がふわりとなびく。

珍しく乙女な行動に、チサヤとクリスは二人して言葉を失った。

違いは、心境であろうか。

「おーおー。別人みたいだな。どこその令嬢に見えないこともねーぞ」

にやにやと歩み寄り、金髪を掻き回すクリスの隣で、チサヤは微妙

な表情を浮かべている。

何と言っていていいか分からない、そんな顔だ。

「髪が絡むってば！」

クリスの手から逃れようとナナギは身を振り、それから少し前方を歩くクシナ達の方に走っていく。

揺れる金髪が遠ざかると、クリスはまたも意地悪く笑った。

いまだ呆然としているチサヤの肩を叩き、耳元で囁く。

「せいぜい足掻け、青少年」

「はあ？ なんだよ、それ」

「命短し恋せよ少年、ってな」

親戚の親父のようなことを言っ、クリスは後を追うように駆け出した。

「ちよっ、クリス！ 待て！ 今のどついう意味だよ！」

濁った瞳

しれは、突然の出来事だった。
まるで地震のように嵐のように、何の前触れもなく始まった。

「なえ。『ナナギ』を知らない？」

和やかに談笑しながら旅路を歩んでいた一行の目の前に、少年が現れた。

謎の質問と共に。

「え…と、どちら様で？」

突然のことに動揺を隠せず硬直したメンバーを代表して、クシナが少年に問い掛けた。

少年は目を細めて微笑む。

すらりとした長身に、赤いメッシュの入った茶色の髪。

緑と青のオツドアイ。

柔らかに整った顔立ちを除けば、その雰囲気も含めて何となく狼のようなイメージを持たせる。

鼓膜だけでなく、脳まで震わせるような深い声に覚えがある気がして、ナナギは少年をじつと見た。

頭の前からつま先まで見回し、記憶を巡る。

嫌な予感がした。

考えるのをよそうと思った時にはもう遅く、ナナギの脳内は思い当たる人物を探し当てていた。

「…っ」

ナナギは息を呑んだ。

まさか。

そんなはずはない。

でも…。

一瞬で顔を真っ青にして、ナナギは隣にいたリーリアの腕にしがみ付いた。

「きやつ。…どうしたの？ ナー…」

名を呼びかけて、慌ててリーリアは口をつぐむ。

この状況で、ナナギがナナギだとばれてはいけない。

さすがにそれくらいは分かる。

明らかに様子のおかしいナナギの身体を抱き寄せ、リーリアはさりげなく後ろに下がった。

入れ代わりに、クリスがナナギ達の前に立つ。

「いきなり何だよ。名前も言わずに、それはちよーつと無礼なんじやねーか？」

依然、にこにこしたままの少年を容赦なく睨みつける。

「やだな。そんなに警戒しないでよ。僕はシーカ」

「…どういう用件で、私達に声をかけたんです？」

シャオロンも警戒心を剥き出したが、しかし口調は冷静なままだ。

「だから、『ナナギ』を探してるんだ。知らないかな？ くるくるした真つ赤な髪に、金色の目をした女の子」

くるくると文字通り指を回して、少年ことシーカはまんまナナギを説明した。

「で、その少女とやらの貴方は何の用事があるのでしょう？」

「それを君に言う必要がある？」

「いいえ、ありませんよ。ただの興味、というものです」

につこりと微笑んでシャオロンは首を振る。

胡散臭いまでの完璧な笑みに、シーカはゆるりと頬を緩ませた。

「いいね。そういう、何考えてるんだか分からない濁った瞳、大好きだよ」

「ほう。それは光栄で…」

「訂正なさい！」

張り詰めた空気を壊すように、リーリアの高い声が響いた。

驚いて振り向いたシャオロンの瞳に、拳をきつく握ったリイーリアが映る。

ナナギがしがみ付いたままの腕を震わせ、リイーリアは怒りに頬を赤く染めている。

「なに？ 急に」

「訂正しなさいと言ったのよ。今の言葉を撤回して…っ」

「どうしたのさ。そんなに怒って」

「シャオロンを侮辱することは許さなくてよ。貴方に何が分かるの。一目見ただけでシャオロンの何が分かると言っの！」

「リイーリア様」

牙を剥き出しに声を荒げるリイーリアに、シャオロンが名を呼ぶことで静止をかけた。

「気にしてませんから。大丈夫です」

「でも…」

「大丈夫です。ありがとうございます」

尚も引き下がろうとするリイーリアをやや強引に押さえて、シャオロンはシーカに向き直った。

リイーリアの剣幕にも全く動じていないようで、シーカを笑みを絶やしていない。

「申し訳ありませんが、私には心当たりがありませんね」

怖いくらいの笑みにも怯まず、シャオロンはそう微笑んだのだった。

濁った瞳（後書き）

うーん。

我ながら、このサブタイはどうかんだと思います。

ありがとう

「そうなの？」

確認するようにぐるりと視線を回すシーカに、クシナを始めメンバーは頷いた。

ナナギの頭にはまだウィッグが乗ったままだ。バレはしないだろう。

「すまない。他を当たってくれないか？」

そう判断してクシナはきっぱりと言い切った。

シーカは残念そうに眉を下げる。

「そっか。それは残念」

もう一度、一人一人の顔をシーカは見渡した。

そして、ぴたりと未だ俯いているナナギに焦点を合わせる。

一瞬、メンバーの間に緊張が走った。

「じゃあ仕方ないか」

しかし、それも束の間、シーカはあっさりとナナギから視線を外した。

安堵のため息が漏れそうになる。

「手間取らせてごめんね」

「いや。役に立てなくてすまない」

クシナがそう言ったところで、シーカの笑顔が消えた。

怖いほどの無表情になると、シーカは右手を横にまっすぐ伸ばした。

指の先には、青々と広がる草原。

「でもまさか：嘘はついてないよね？」

何が始まるのだと首を傾げる一同に、表情をなくしたシーカは声低く言った。

す、と瞳が細まり指先がぴんと伸びる。

皆の視線がその指先に向いたその瞬間だった。

目の眩むほどの強い光が差し、続いて風の唸る音がした。頬を、熱い風が通り抜ける。

目を指先からその先に広がるはずの草原に向けた時には、もう全ては終わっていた。

「え……？」

「嘘だろ……」

驚きを隠し切れず、クシナとチサヤが声を漏らす。

草原は、焼け野原と化していた。

シーカの指から広範囲に渡って、草が焦げるどころか炭となっている。

「ついてないよ……ね？」

黒ずみになった草原に視線すら向けずに、シーカは繰り返した。

その瞳はまっすぐナナギに向けられている。

ナナギは、ぎゅっとリイリアにしがみ付きなおした。

無意識に、手がウィッグを強く押さえつける。

「まあ……いつか。邪魔してごめんね？」

またシーカは笑みを張り付けると、音も立てずにナナギに近寄った。周囲が止める暇もなかった。

小さく、ナナギが息を呑む。

間近になった緑と青の瞳に身を竦ませ、ナナギは俯いた。

それに対し、シーカは少し切なそうな表情を浮かべる。

「今度は声聞かせてね？ 赤ずきんちゃん」

「あ……」

ナナギがはつと顔を上げると嬉しそうに笑うと、シーカは霧のように掻き消えた。

なんの余韻も残さず。

何故かナナギはそれを追うように手を伸ばす。

その手が届くことはなく、虚空を掴み力なく落ちた。

「ナナギ……？」

リイリアが心配そうにナナギを覗き込む。

その視線にナナギは深呼吸をしてから、二、三度何かを噛み締めるように頷いた。

「うん。大丈夫、ありがとう。行こっか」

しがみ付いていた手を離し、まるでこの話は終わりとばかりにナナギは歩き出そうとする。

そんなナナギにクリスとチサヤは眉を吊り上げた。

「ちよつと待て。勝手に話完結させんな」

「そーだよ。お前は良くても、オレらは意味も状況も分かんねーんだ。説明、しろよ」

「…」

躊躇うように、ナナギは瞳を伏せた。

ずるりとウィッグが滑り落ち、いつもの赤毛が現れる。

「言うよ。絶対全部話す。だけど今は…」

「分かった」

「へ？」

「いいよ、分かった。今言いたくないなら別に構わない。いつか話してくれるなら、俺は待つよ」

柔らかな笑みを浮かべて、クシナはナナギを見つめた。

そして、一人一人を見回す。

「ナナギが絶対いつか話すって言ってるんだ。それじゃ駄目か？」

それとも、今無理に聞き出さないといけないのか？」

クシナの言葉に、一時置いてから一同はため息をついた。

「その言い方はズリーよ、クシナ。それ以上何も言えねーじゃん」

「ったく。ホントお前昔っから人に甘いよな。このお人好し」

がしがしとクリスは乱暴に髪を掻き毟る。

盛大にもう一度ため息をついてから、困惑して曖昧な表情を浮かべているナナギに向き直った。

いつものように、にやりと口角を上げる。

「仕方ねーから、もうちよつとだけおとなしく待っててやるよ」

「クリス…」

「あ、でもオレ気は短い方だからな。あんまり焦らすよーなら、白剤飲ませてでも白状させるからな」

「あまり一人で抱え込んで駄目よ？」

「相談くらいは乗るからね」

「またあいつが来ても、必ず貴女は守りますから、安心してください」

口々に掛けられる優しい言葉に、ナナギは目を細めた。

反芻するようにまばたきを繰り返して、ナナギは小さな声で呟く。

「ありがとう…」

ありがとう（後書き）

次話からは、次の編に入りたいと思います。

一応幽霊城編はオールキャラのつもりで書いたんですけど、今回はクリス多目になるかもです。

半分狼

「もうすぐ着くな。この坂を上りきったらすぐだ」

「次の目的地ってどこだっけー？」

「ええと…」

クシナは手元の地図に目を落とした。

図面と周りの風景を見比べた後、小さく頷く。

「正式な村名ではないが、狼の里、と呼ばれているそうだ」

「狼の里ー？」

訝しげにクリスが眉をひそめて聞き返す。

ああ、とそれに対して生真面目に返事をしてから、クシナはマニユアルでも読むように説明を始めた。

「狼人間、って聞いたことあるだろ？ ほら、満月の夜に狼に変身するやつ。彼らの村らしい。すぐ近くには人間の村もあるな。まあ狼人間とは言っても、進化を遂げて今は別に満月じゃなくても変身できるし、逆に満月でも変身せずにいられるみたいだけだな」

「ふーん」

咄嗟にここまでの説明が出来る所は、やはり流石としか言いようがない。

冒険者の一家だけあって、この手の知識は幼い頃から叩き込まれてきたのかもしれない。

「お、襲ってきたりしないよね？」

そんなかつこいいクシナの横で、ナナギは例に違わず情けない表情を浮かべた。

「どーだろーな？ 半分狼だからな、理性がどこまで発達してるかわかんねーし」

「えっ！」

楽しそうに唇を半月型にして、わざわざ不安を煽るような事を言うのだから、クリスも大抵いい性格をしている。

クリスの言葉にぎよつとして身を竦ませたナナギだったが、ふと思
い立ったように態勢を立て直した。

ナナギの変化にクリスは不思議そうに首を傾げる。

「お？ どーしたよ」

「クリスはすぐ意地悪言うけど、それって大体ちゃんと安全だつて
分かってる時だけだよな？」

「…へ？」

「ちょっとでも危険がある時は、あたしが聞く前から注意しろ、つ
て言ってくれるもん…多分」

最後は余計だと思う。

やっぱり確信はないのか、へらへらと意味ない笑いを振りまいてい
るナナギに、クリスはため息をついた。

それも、かなり長いものだ。

小さな手のひらでこれまた小さな顔を覆うと、クリスは俯いた。

長い髪の間から覗く耳は真っ赤だ。

「あー…やだやだ。なんかすげー恥ずかしい」

「クリス褒められるの弱いんだ」

「うっせーばーか。外見ならまだしも、中身褒められんのもってなん
かむず痒いんだよ」

したり顔のナナギをぎろりと睨んで、クリスはやだやだを繰り返す。

「ぎゃああああ！」

そんな時、どこからか叫び声がした。

どうやら坂の上から聞こえてきているらしい。

「なんだなんだ…うおっ」

「な、なんか転がってきてるぞ！」

チサヤが斜面を指差す。

確かに言つとおり、坂の上の方からごろごろと何かが転がり落ちて
きている。

それも、一つや二つではない。

十は軽く超えているだろう。

「なに？ 何が転がってるの!？」

「…りんご、だな」

目を眇めてクリスが呟いた。

言われてみれば赤い物体が段々大きくなっている。

放っておけば、そのうち転がりきって止まるだろうが、りんごは多分小石や何やらで傷だらけになってしまつのは目に見えている。

「まったく、仕方ねーな」

「え？ クリス？」

首を傾げるナナギには答えず、クリスは音も立てずに飛び上がった。流石精霊。

羽でも付いてるかと思うほどの跳躍力です。

空中でクリスはりんごをじっと見つめて目標を定めると、くるりと一回転そて急降下した。

「よ…つと」

地面に辿り着くと、転がり続けるりんごを素晴らしいスピードと動体視力をもってして拾い上げていく。

見事取り残しなく全てのりんごを拾うと、クリスはナナギ達の所へと舞い戻った。

半分狼（後書き）

狼の里編突入です！

前話は割と暗めにしてたので、今回はくだらない感じに明るくしてみました。

わだかまりなさすぎだろ、と自分でも思いました。

乙女的な何か

「すっごーい！」

「賞賛はいーからちよつと持て。落とす」

ぱちぱちと拍手を送るナナギの手にクリスは三個ほどりんごを握らせる。

それでも小さなクリスの手にはまだ多いくらいで、見かねたチサヤが半分受け持った。

「サンキュー」

「ちつちやいと苦労するな」

「一言余計なんだよ馬鹿。大体お前も大概チビだろーが」

「それでもお前よりはでけえっつの」

「オレは本当はデカいからいーんだよ」

そんな軽口を遮るように、坂の上から足音が響いてきた。

「す、すみませーん！」

どたどたと騒がしい音を立てながら聞こえてきた快活な声に、クリスもチサヤも口を止める。

駆けて来たのは、一人の少年だった。

見たところ年の頃はナナギ達よりも、クリスに近いかもしれない。変声期を迎えていないだろう少し高い声はまだ幼い。

飴色の髪と上手くマツチした緑の瞳はわりかしつり気味で、やんちゃな小動物のような印象を与える。

「おー。お前か、りんご落とししたの。ほらよ」

「あろがとうございま…す」

余程急いできたのだろう、微かに息が乱れている。

クリスからりんごを受け取りながら、少年は頭を下げた。

「あの…さっきのすげー！…ですね」

敬語は使い慣れていないらしい。

たどたどしいその言葉遣いにクリスは苦笑した。

「そりやどーも。別に敬語とかいーから」

わしゃわしゃと犬にするように頭を撫でるクリスに、少年は不思議そうな顔をする。

それはそうだろう。

見た目にはクリスの方が少し年下に見えるくらいなのだ。

それなのに大人びた言葉で、しかも頭を撫でられれば誰だって何だか妙な気分になる。

「まだこっちにもあるんだけど、持てる？」

「あ、うん。大丈夫、袋あるから…って底破けたんだった！」

「阿呆だ」

あああ、と頭を抱えた少年にクリスが喉の奥を鳴らすように笑った。「こら。失礼でしょ」

くつくつと声を出すクリスを軽く小突いて、ナナギは顔をしかめる。

「村の子だろう？ 俺達も今から行くつもりだったんだ。りんごは持つよ」

「紳士だな、クシナ」

ナナギから少年に渡されかけたそれを、クシナが代わりに受け取る。茶化すチサヤは無視した。

「なんだ、お客さんだったのか。でもまた何しに？ 何にもねえよ？」

「あー、説明がむずかしーな」

「そんな複雑な理由で…!？」

「どこが難しいんだ。説明するのが面倒くさいだけだろ」

「ばれた？」

ぺろつと舌を出して肩を竦めてみせるクリスは文句なしに可愛い。

そんな可愛いクリスのせいで、嫌な目に遭った事のあるクシナはげんなりとするが。

何の返事も出来ず、クシナは結局少年に向き直る。

「俺達は一応勇者なんだ。聞いたことないか？ 各国から一人ずつ勇者を選んだんだけど…」

自分で勇者と名乗るのが少し恥ずかしかったのか、クシナははにかんだ。

「勇…者」

「あ、いやでも本当にそんな大した勇者じゃないんだ！へろへろだし無茶苦茶だし、初恋が魔物のやつだってっているんだぞ！」

「クシナ余計なこと言うな！」

チサヤが怒鳴る。

しかし全くもって正論だ。

最後の一言は蛇足以外の何物でもない。

「すげーっ！聞いたことある！魔物退治するんだよな！」

目を輝かせて興奮する少年に、クリスがまた笑う。

心底可笑しそうに、目尻を下げて。

「おつまえおもしろーなー」

クリスをじつと見て、少年が微かに頬を染めた。

途端、それを目撃したナナギの乙女的な何かが反応する。

顔を赤くした少年と笑い転げているクリスを交互に見ると、ナナギはにまあと頬を緩めた。

「なるほどね」

誰にも聞こえないような声で呟くと、ナナギは一人楽しそうに目を細めたのだった。

スレンダーだからな

「ねえねえ、クリス？」

「あ？ なんだよ、ニヤニヤして」

気持ち悪い、と一蹴してからクリスはナナギに向き直った。

眉をひそめつつも、ナナギはクリスの耳に顔を寄せる。

「あの子さ、クリスのこと好きなんじゃないかな」

「あの子って… ナップのことか？」

「そう。… っていうか、他にいないよね」

クリスは反芻するように数回頷き、ほんの少し先を歩く先ほどの少年、ナップを見やった。

別段何の派手なりアクションも取らない所を見ると、クリスも薄々は感じていたらしい。

じーっとナップを見つめた後、クリスは肩を竦めて鼻で笑った。

「ガキに好かれてもなあ」

「クリスも見た目は十分子供だよ」

間髪をいれず、ナナギが一言。

ぎろりとクリスに睨まれてもそ知らぬ顔だ。

「言うようになったじゃねーか」

「えー、何のこと？」

「…」

「…」

しばしの沈黙を挟み、二人は目を合わせてにつこり。

喧嘩するほど仲が良い、の法則を当てはめるのであれば、素晴らし
い仲のよさを見せ付けた二人だった。

ちらちら数秒おきにクリス達の方を振り返るナップの態度は、ナナ

ギじゃなくても分かりやすかった。

「ナツプ、お前もしかしてクリスのこと好きなの？」

苦笑しながら、チサヤはナツプの肩を叩いた。

ナツプを挟んで隣のシャオロンも、無表情ながら頷いている。

「おう！ 超可愛いよな。村にあんな可愛い人いねえもん！ しかも優しいし」

「え、やさ…？」

「というか、いつそ清々しいまでに潔が良いですね」

キラキラと瞳を輝かせるナツプに、チサヤが顔を引きつらせる。

「クリスが優しい？ お前なんかぜってえ誤解してるぞ」

「優しいじゃんか！ しかも華麗！」

「華麗、ですか」

確かに華麗は華麗かもしれない。

あの見た目年齢にして、優美とか流麗とかいう単語が似合うのは、クリスくらいのものだ。

「あ、ほら。そろそろ村だ」

流石に登り慣れているのか、かなりの傾斜の坂を上りながらもナツプの息は乱れていない。

意気揚々と坂の少し先を指差す。

「ち、ちよつと…待ってえ…」

対して、まだ随分下の方にいるナナギは息も絶え絶えによるよろと顔を上げた。

しかも、クリスに腕を引っ張ってもらっているあたり、基礎体力のなさがありありと表れている。

そんなナナギを、体を捻ってナツプは心配そうに見た。

そして、道中数々の爆弾発言を連発した彼は、特大級の、本日最大の爆弾を放った。

「姐さん！ 大丈夫ツスカー！」

「姐さん！？」

「しかも敬語…」

チサヤとシャオロンが揃って目を見開く。

それに対し、ナツプは不思議そうに首を傾げた。

「なんかこう…姐さんって感じがするからさ」

「そうかあ？ さっきから、お前見る目ねえなあ」

「どういう意味よ、それ！」

「おわっ!？」

後れを取っていたはずのナナギの声に、チサヤが身を引いた。

慌てて辺りを見回すが、ナナギの姿は見当たらない。

「上よ、上」

「上え？」

何故か勝ち誇ったような口調につられてチサヤが顔を上げると、そこにはクリスに首根っこを掴まれ、宙に浮かぶナナギがいた。

「うわ。かっこわりい」

とチサヤ。

率直な意見である。

しかし率直なだけに、ナナギは心外だとばかりに眉をひそめた。

「仕方ないじゃない。心臓が本気で危うかったんだもん」

「っーか、ナナギお前もうちよい太れば？ 女として大事な部分が足りなすぎー」

「ぎゃああっ！ 変なところ触らないでよ！ セクハラっ！」

「はん。セクハラなら、もっと触って楽しい女を狙うっーの」

「余計にむかつく！」

「馬鹿、暴れんな！ 落とすって」

じたばたと暴れるナナギと、それを食い止めるクリス。

騒がしい二人にいつまでも付き合っていられない。

小さく肩を竦めると、チサヤは小走りで少し先に行ってしまったナツプ達を追いかけた。

「クリスなんかぺったんこのくせにっ！」

「オレはスレンダーだからな…って違う！　オレは男だっこの！
乳なんざあつてたまるか！」

スレンダーだからな（後書き）

華麗談義の部分で、リーリアに「加齢ですって!?!」と言わせるかどうかすごく悩みました。

プライドと本音

「にん…げん…？」

ナツプを笑顔で出迎え、その後ろに続くナナギ達の姿をちらりと見ると、村人の顔が強張った。

二度見した後、血相を抱えて村人は脱兎の如く走り去っていった。

「えっ！？ ちょっと！」

呆然とそれを見送ったのは、つい一分ほど前。

目をまん丸にして首を傾げる一同の中で、不意にナツプが手を叩いた。

「あ。そういえば、うちの村、大の人間嫌いだったかも」

「ええっ!？」

何を今更。

メンバーの声がぴったりと揃ったのも無理はないだろう。

へへ、とナツプは決まり悪そうに頭を掻く。

呑気なものだ。

「いや、もう少し先に行くと人間の村があるんだ。昔はけっこう仲良くやってたんだけどさ…」

「出てけっ!」

ナツプの話を遮るように響いてきた怒号に、ナナギ達は一斉に振り向いた。

そして、思わず言葉を漏らす。

「嘘…!」

その数、ざつと五十人はいるだろうか。

皆それぞれに鍬やら鎌やら、物騒なものを手にしている。

その目は一様に、天敵らしい人間であるナナギ達を睨むように見据えている。

「あわわわわ…」

「一昔前の漫画みたいになってるぞ、落ち着け」

驚きのあまり、時代を逆流してしまったナナギに、クシナが冷静なつつこみを入れた。

既に半泣きだったナナギが顔を崩す。

「だ、だって…」

「あああ、泣くなって。ほら」

ごしごしと、ナナギの目尻に呆気なく浮かんだ涙をクシナが袖で拭いてやる。

まるで母親のようだ。

「ナツプ！ 早くこっちへ！」

鎌で牽制しながら手招く彼らに、ナツプが眉をひそめた。

ぎゅっと拳を握り締め、目を吊り上げる。

「なんだよ、それ！ 確かにこいつら人間だけど、村の奴らとは何の関係も無いじゃんか！ よく知りもしないでそんなこと言うなよ！」

「人間は人間だろう！ よく知りもしないではお前も一緒のはずだ。そいつらがわしらに害を与えない保障はどこにある！？」

「そんなの…」

「うわっ！」

「クリスさん！？」

尚も言い返そうと前のめりになったナツプだったが、クリスの声に慌てて振り返った。

「いてー…」

手の甲を押さえて、クリスが顔をしかめている。

足元には、ころころと微かに音を立てて転がる小石。

それをじつと見つめて、クリスは視線を上げた。

石を投げた犯人を捜すように、ぎろりと睨みつける。

「誰だ…」

よ、の一言を言い切ることは出来なかった。

「いい加減にしろよ！」

しん、と水を打ったように辺りが静まる。

あーあ、怒らせた。

まるでそう言うかのように、怒りの勢いを削がれたクリスが頬を掻く。

「保障？ なら村の皆だつてわかんないじゃんか！ そんなこと言つてたらキリないよ！ しかも何の手出しもしてない人たちに石投げるなんて！ それこそ！ みんなが嫌う人間と同じだ！」

ナツプの剣幕と、心に突き刺さる正論に村人がたじろぐ。

素直で真つ直ぐな子供ならではの言葉は、胸に痛い。

「あの、本当に村を襲つたりとか、そんなつもりはないんです！」

「信じていただけると嬉しいのですが」

ナツプに続いて、クシナとシャオロンが頭を下げた。

真摯なその姿勢に、更に村人がうろたえる。

後ろには、こんな状況にも関わらずにこにこと笑っているレイ、またも涙目のナナギ、そのナナギにしがみつかれているリーリア、そしてむすつと仏頂面をしているチサヤ。きつと、どういう表情をしているのか分からないのだろう。

村には入れてもらいたいが、かといってレイのように人懐こくも笑えない。

何となく頭を下げるのも悔しい。

プライドと本音がない交ぜになった、そんな顔だ。

少なくとも、害がありそうには見えない。

「…」

村人は黙りこくってナナギ達を見回す。

そして、無言のまま顔を見合わせると、揃い合わせたように同時に

手に持っていた、物騒な得物を地面に落とした。

「子供に諭されるとは、思わなかったな」

そう言う彼らの顔には、うっすらと笑みが浮かんでいた。

人間嫌いの理由

「あー、緊張したー…」

だらんと四肢を投げ出して、ナナギが畳に寝転がる。

一悶着あった末、大歓迎とはいかないまでも村人は、ナナギ達を迎え入れてくれた。

用意されたのは、大人数用の和室。

部屋のレベルとしては、可もなく不可もなく、といったところだろうか。

少なくとも、石を投げつけられて追い出されるよりは余程ましだ。まさにナツプ様様である。

「でも、あんなに人間嫌いなんて、何があったんだらうね」

「さあ？ それはそれはよっぽどな理由があったのではなくて？ 人畜無害なわたくし達に刃を向けたくらいですもの」

ふん、とリーリアがレイの問いに鼻を鳴らす。

プライドのお高い彼女には、あの歓迎方法はお気に召さなかったらしい。

…誰だってそうだろうが。

「でも、彼は将来大物になりそうですね。あれだけの人数の大人を前に、あの啖呵はなかなかきけませんよ」

「確かに、すごかったね！ 格好よかったよね、クリス、ねっ？」

何故かナナギはとても楽しそうだ。

「んー？ ああ、まあ」

「クリスのためにだよ？ クリスに石が当たったからあんなに怒ったんだよ」

成る程、楽しいな理由はそれか。

ナナギの意図することを察したクリスは、それはそれはにこやかに笑った後、その赤い頭にチョップをかました。

うひゃっ、と小さく悲鳴が上がる。

「もっつ、なにするのよ！」

「そりゃこっちのセリフだっつ。お前、オレの性別忘れたか？」

「く…っ。それは知ってますけど。でもクリス可愛…」

「それ以上言うと、次はデコピンな」

クリスの言葉と掲げられた細い指に、ぱっとナナギは額を隠す。

華奢な指から繰り出されるデコピンは、思いの外少し、いやかなり痛いのだ。

何度か餌食になっているナナギはそれを身をもって知っている。

「ごめんなさい」

「分かればよろしい」

うんうん、と満足そうに頷いてクリスは指を下げる。

ナナギがおそろおそろ手を外したところで、クシナから声を掛けられた。

「ナナギ、クリス。ちよつと外に出てくるが、二人はどうする？」

「何しに行くんだー？」

「情報収集です。気になりませんか？ 人間嫌いの理由」

ふ、と淡くシャオロンが微笑む。

人を惹きつける綺麗な笑みは、精霊にも有効らしく、クリスも好戦的な笑顔を返した。

「なるな、それは。オレも行く」

元気よく手を挙げて、クリスは立ち上がった。

立ち上がってそれから、まだ座ったままのナナギを見下ろす。

「お前は？ どうすんの？」

「あたしは…えつと」

迷うように視線を彷徨わせ、ナナギは首を振った。

「ちよつと疲れたから、ここで待ってる」

「皆行くけど、いいのか？」

「うん。留守番しとくね」

心配そうなクシナに、ナナギは力強く頷く。

それでも、まだクシナは不安顔だ。

「でもナナギ一人残すのは…。俺も残ろうかな」

「いいよ、大丈夫だって」

「だけど…」

「こいつが大丈夫つつつてんだから、いーじゃん。クシナは過保護すぎ」

食い下がるクシナを見かねてか、クリスが袖を引っ張る。

それもそうか、と納得しかけたクシナに駄目押しでナナギはにっこりと笑ってみせた。

「行ってらっしゃい。大人しくしとくから、本当に心配しないでね」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9467i/>

ヘタレで少女な勇者様

2011年3月6日20時43分発行